

556
79

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始



德富蘇峯先生題字
犬養木堂先生題字
鐵山蓑田政德著

人物評論

第壹編

札幌 北日本刊行協會發行

筆挾秋霜

燕峯

此心不屈
此志不枉

大養教

緒言

題して「人物評論」と謂ふ、當らず、其の人物の片影を捉へ、其の事功の一端を録し、多少の管見を加ふることに於て、寧ろ「人物紹介」と謂ふの勝れるに如かず、冠するに「評論」の二字を以てするは僭越である、素と是れ余が「札幌毎日」紙上に掲げたる、粗製濫造の作、書くに従つて原稿を文選子の手に委ぬ、固より推敲の暇なし、措辭穩當を缺き、蕪雜文を爲さざる感は充分なるを知る。

余は元來文士に非ず、直に血性を述べて文章を作るもの、文章を作ると謂ふよりも文字を羅列するに過ぎず、特に文章は氣合ものだ、氣合の乗ると乗らざるとに依りて巧拙が岐かれる、己を得ず否や／＼ながら書く時は、氣缺けて死文が出来る、己を得て、勇み進んで書く時は、氣満ちて活文が出来るやうだ、此編載する處の文、自分ながら赧顔に堪へざるの尠からず、而も倚馬の才を缺ぐ余に取りては、何とも致方ない想ふに題材とられた人々は、定めて御迷惑であらう。

大正
15. 9. 9
内交

余が師匠徳富蘇峰氏は、世界の文豪である、先生の文章は、文士の仰いで宗とし、範とする處、適くとして可ならざるは莫し、特に人物評論に至つては、天下一品と激賞せらる、其の千里透徹無碍の心眼を開いて心腔を抉ぐる、到底凡庸の企て及ぶ處でない、皮相の見は誰れにも出来る、肺腑を抉ることが難事である、曾つて左右に侍して文章を學ぶ節、人物評論の書方について、大要左の如き心得を教つた。

人物批判は誰でもやる、一寸容易に見ふるからである、併し容易いやうで一番六ヶしいのは人物批判である、人の肉や皮を描くことは左程困難でもない、然も骨髓を描くことは中々困難だ、況や骨髓の間に潜在する靈妙なる其人の心機を描出するに於てをや、人物を批判して第三者の稱賛を博する位では未だ到れりとするに足らぬ必ずや其の對象たる當人を、全然首肯せしめて始めて、批判の能事盡せりとせねばならぬ、人物批判の上に於て、その眼光の靈蠢、その手腕の粗笨の岐かる、所以即ち一に此に在る。

對象たる當人をして全然首肯せしむるは、その人の急所を衝くからである、急所とて短所缺點ばかりではない、好所美點にも亦急所がある、短所缺點の事は暫く措き、好所美點に就て言はんには、人各々公認せられたる自分の有りふれた道德、事功以外に、窃に自ら期する所のものがある、然も其が雷に認められざるのみか、却て誤解される場合が多い、是は當人に取つては死して瞑せられぬ譯だ、生者知己の感のみならず死者亦感謝する所以、人物批判の能事、こゝに極まる。

心得とは如上の通りだ、凡庸の余には、如何に學んでも至らない、併し人物を度かる照準は此に置いて居る、有体に白狀すると粗製濫造の中にも、會心の作なきに非ず、其れは極めて少數である、然らば他は凡てなぐり書きかと問はるれば、決して左様な不都合な心も筆も持たぬ、只氣合抜けして筆が心に副はぬまでだ、一生懸命に書いても出来不出来は已を得ぬ次第なりと承知して貰ふ外はない、原稿を整理するに當り、多少の修正を加へたるは、其の餘りに粗雑なるは、御當人に敬意を缺ぐを慮かつてなり、余の拙作、豈敢て其人の人物を上下すと謂はんや。

目次

○大學教授 理學博士 八田 三郎……………一

○札幌電鐵專務取締役 助川貞二郎……………一〇

○日の丸 商店主 松本菊次郎……………二一

○普選論の急先鋒 辯護士 高野 精一……………三七

○札幌電鐵會社社長 板谷順助……………四六

○札幌辯護士會長 法學士 安東俊明……………五四

○土木建築業界の權威 菱田多吉……………六四

○北門貯蓄銀行取締役 小竹文次郎……………六五

○政治家としての 村田不二三……………七〇

○土木建築界の新銳 伊藤鐵三郎……………八四

○萬澤診療所 醫學博士 萬澤 晋……………八八

- 理論的溫情の辯護士 濱田和三郎……………九八
- 札幌商業會議所副會頭 久保兵太郎……………一〇七
- 第一銀行支店長 加賀谷真一……………一一一
- 社會奉仕的資本家 藪 惣七……………一二四
- 札幌電鐵株式會社重役 齋藤甚之助……………一二一
- 北門銀行常務取締役 井上外幾雄……………一二七
- 本道新聞界の元老 上野貫一……………一三四
- 丸井商店總支配人 今井智能吉……………一三七
- 風變はりの資本家 本間久三……………一四二
- 本道の藥種王 山形卯三郎……………一四六
- 札幌魚市場の頭領 中西八百吉……………一四八
- 北門銀行取締役 鷺見邦司……………一五二
- 札幌溫泉土地會社專務 高倉安次郎……………一五八

- 札幌病院長 醫學博士 林 敏雄……………一六六
- 土木建築業界の明星 山田足穂……………一七一
- 多角多面の實家 足立庸三……………一七四
- 本道運送業界の頭領 南部多三郎……………一七九
- 公僕を以て任ずる 阿由葉 宗三郎……………一八三
- 札幌酒造株式會社長 山田利吉……………一八八
- 財産世襲無用論者 地崎宇三郎……………一九〇
- 札幌電鐵營業課長 黒澤美德……………一九五
- 策 の 人 遞信大臣 安達謙藏……………一九九
- 本家歸りの道廳長官 中川健藏……………二〇一
- 立憲政友會顧問 代議士 東 武……………二〇六
- 本道政界の風雲兒 木下成太郎……………二一八
- 本道政界の大立物 中西六三郎……………二二五

四

- 札幌市會議長松田學……………二二三
- 愛嬌溢る病院長木根淵清……………二四〇
- 札幌商業會議所會頭大瀧甚太郎……………二四五
- 本道木材界の重鎮大島喜一郎……………二五三
- 拓銀の剃刀取締役安藤信彦……………二五八
- 商と農に成功した計良翁助……………二六一
- 旭川市助役稻見貞藏……………二六五
- 土木官吏の一異彩杉森文彦……………二七二
- 北海タイムス編輯局長山口政民……………二七五
- 公友會の智囊大瀧林之助……………二八六
- 前北門銀行頭取長友比佐吉……………二九一

人物評論 第壹編

大學教授 理學博士 八田 三郎



學問に活學と死學の別がある、學究の多くは死學の仲間だ、其處で人間の「生字引」の異名が生ずる、到處の學校に生字引がゴロついて居る、學問の卸し問屋格たる大學にも、生字引共が威張つて居ると云ふ小言は、活社會に於ける活人の學者觀である、畢竟死學があるから、活學が生ずるのだ、死學死學と學問を馬鹿にすると、學問が情けなくて泣出すだらう。

死學とは修めた學問を活用せぬことを意味するであらう、宜しい、併し之を凡ての學究に應用せんとするは當らず、其の深遠玄妙の學問を誤りなく人に教ふれば、學究の本分を完ふしたと云ふもの、之を活かすと殺すとは、教を受けた人の才能に依り、心

掛けに依る、勿論、新島襄の如く、福澤諭吉の如く、吉田松蔭の如く、横井小楠の如く、徳富蘇峯の如くに、活きた先生が、活きた人間を教養せる如くなれば申分のない處である。

帝國大學は國家有用の英才を製造する所で、決して公等碌々のヤクザ人物を製造する場所でないのは申すまでもない、故に薫育の任に當る教授は一人として生字引でなく悉く名譽ある活學者であるべき筈だ、其中でも八田博士の如きは、活學者中の活學者である、普通の學究と心の置所が異ふ、豪傑博士の異名を専らにするだけでも、傑物と云ふことが判かる、博士は實に經世家的學者である。

博士は忠實なる學者である、篤學者である、獨逸學に於て、多くの教授中、博士の右に出づるものなしと、獨逸人の教授が推奨する、其の博學多才と云ふ點から管見すると、幽玄の學術は固よりだが、義太夫や謡曲の末に至るまで精通してゐる、更に進んで餘興としては、都々逸、端唄、新内の趣味を有する、併し此等は書物についてである、自分自身に節廻はし面白く、唸ると云ふ譯合でないが、單り吟詩に至つては、時

々吟聲月を掠めて蒼洲に落つるを耳にする。

八田博士は政治家風の學者である、理論家でなく實際家である、國家的經綸もあれば抱負もある、彼を實際政治家たらしむれば、ジョンモールレーの役目は充分に勤まる彼を文部大臣たらしむれば、森有禮位の計畫は、造作もなく立て得られる、併し彼は大臣などになる野望は、毫も有しない、飽まで大臣たる人材を育成するを樂んでゐる孟子は天下の英才を養ふを道樂としたが、吾が八田博士も同様だ、國家有用の人材を製造せんとす之が眞成の教育家と謂ふものだ。

自から大臣たるは愉快に相違ない、其よりも大臣の器を製造するのは、更に愉快である、今の政黨者流は、悉く大臣病に冒されてゐる、悉く大臣になつた夢を見てゐる、之が主たる目的であるやうだが、政務次官は愚か、參與官にすら買上げられない、大臣になつてくれと強要されて、眞平御免と逃げ廻はつた故江原素六の如き、桂首相から文章報國も大臣報國も結句は同じだと、入閣の相談をフーンと鼻で挨拶して斷つたと聞く、徳富蘇峯の如き、吾が八田博士も曾つて大隈侯から、文部大臣に擬せられ

た筈だが、フーンと挨拶したであらう。

學あり、識あり、經綸あり抱負あり而して最も座談に長ずる八田博士は動物學者の權威である、世界的の動物學者である現にベルギー動物學界の名譽會員であると聞及ぶ動物が學問の主であつても智識は普遍的である、問はれて窮することなし、故に天下恐るべき何人もない、天下交友多し其の中でも政客が割合に多かつた、大隈侯とは肝膽相照した仲だつたさうである。

大風呂敷を擴げて他を煙に捲くは、大隈侯の得手で日本一品の稱あり、普通の人間は足許にも寄せ付けない、又寄りつき得なかつた、無官の大夫でも有官の大夫でも、大抵小僧扱ひされ、吹き捲くられるが常、武富も犬養も尾崎も加藤でさへ頭が擧がらなかつた、其の大隈を向ふに廻はして風呂敷の布き較べ、解り易くいうと、法螺の吹き合せをやるのは、恐らく吾が八田博士一人位だつたらう、大隈侯は好い話相手を得たと喜んだらう、八田博士の相談なら何でも乗つたもんだ。

前の長官俵孫一は、八田博士に負ふ處が多い、彼が政友會の毒殺に依り、長官の椅子

から刎ね飛ばされた當時、意氣悄然として八田博士宅に暇乞に赴いた、時に博士は所謂心身の安定を受合つた何もクヨクヨすることはない、人間万事塞翁が馬だ、氣の取りやう、心の持やう風の吹き廻はしで何うにも變化する心配する勿れ、俺が片肌脱いでやると、俵の身の振り方を頼み込んだのが大隈侯だつた、俵は憲政會に入り、小利な男だから重用され、故參を乗越へて、新參の俵が鐵道次官から得意の内務次官に納まり、羽振よく何不自由なく暮らしてゐるのは、詰り八田博士推挽の力である。

私的方面より見て、豪放磊落である、公的方面より察すれば、謹嚴莊重である、公私の別を設けて、巧みに使ひ分けて、チャンボンたらしめぬ、以て親しむ可く、以て畏る可しだ、人に接して城壁を築かず、凡てが平等である、若し平民主義を如實に行ふものを探めなば、其の人は吾が八田博士を推さざるを得ない、故に官權を笠に被て横柄顔でもしやうものなら、言下に罵倒し殺される。

博士は凡ての人に向つて門戸開放だ、訪問者に留守を使つて、門前拂を喰はするは、エラさうな人物の通弊であるが、吾が八田博士は斯様な卑怯の眞似は決してしない、

如何なる訪問者でも歡んで迎へ、話を聞いたり聴かしたりして樂む、客を迎へて多々益々辯ずるので、常に訪客絶間なく、時に二十人も込合ふことがある、高談雄辯四遊を驚かす、集まる者孰れも一癖ありさうな人物、鼻摘みの俗物は、憚りながら一人も居ない、イヤ自から憚つて參じ得ないのだ、人稱して八田の梁山泊と名づく。

公務に處しては秋毫も枉げない、他の便宜を計るは、人一倍であるが、苟も官權を光らして、特別の便宜に預からうとしやうものなら、頭から叱り飛ばされる、曾つて文部省の鈔々たる役人が、道廳官吏の案内で、博物館參觀に來つた、是は確か休館の日である、例に依りて例の役人口調で參觀を請求した、取次に出たのは博士である、博士は休日の故を以て謝絶した、更に請求して曰く、位記勳章を有する者なれば、特別の詮議に預りたいと、ソロ／＼官威をピカつかせた、博士天を仰ぎ嘯いて曰く、「そざあんこた屁のごたつたい」と言放つて、サツ／＼と引込んで仕舞つた、訪客呆氣に取られ、博物館の門前に二人の立ン坊が出來たことがある、多分博士は、否やに官吏風を吹かしたのが癢に障つたのだと推察する。

博士は身を持する極めて謹嚴で、曲つたことが大嫌ひだ、凡てに於て其の氣象が現はれてゐる、道を歩くにも苟もしない、大道の真ン中を、反くり返つて直線に歩き、決して側目をふらない、軀幹長大にして反身の格好は、恰も鐘馗大臣の道中に肖たり、曲り角も、直角に歩む、以て規律の嚴正を證する。

難かゝ學理を平易に解釋する妙術は、他の企及し能はぬ處だ、學生の誰もが、八田先生の講義は、恰も上手の講談を聞く如しと言ふ、面白いから聞いて忘れない、難かし理窟一片の講義になると、耳に留らずに頭の上を素通りする虞があるからのことであらう、聞くものをして印象を深からしむ、之が講義の上手というもんだ、例を古今に引き、現在に照らす、忘れんと欲して忘るゝ能はざらしむ八田博士の巧妙な講義振り人呼んで八田先生の鳴物入りの講義と呼び、珍重してゐる。

由來學者は奇行に富んでゐる、併し其の奇行なるものは、自己を廣告せんために使ふ方便でない、毀譽褒貶を埒外に置く、天真爛漫の行である決して性を矯むる所以でない、例へば中江兆民が、夏の眞最中、熱さに耐へ得ず、大道の用水桶に白地浴衣を着

た儘、烏の水行水をつかた如く、佛蘭西歸りの西園寺が公卿の若様に似合はぬ、豆絞りの手拭を肩に引掛け、懐手の鼻唄格好、切られ與三郎式で、都大路を練り歩いたと云ふが如き皆是れ學者の風流とでも言はれやう。

心と頭に錦を飾れる八田博士、邊幅を飾らず、夏向きになると古びたる麥藁帽子、羊羹色の禮服一着、此の一着で、冠婚葬祭を兼帶さする輕便さ、木綿服に烏打帽、手拭下げて湯屋通ひの容態は、何う見ても田舎の隱居さんか、村長さんだ、之が大學の勅任教授、其の装り振りに無頓着な處は、學者の學者たる所以で之を近代の學者の學者臭きは味噌の味噌臭きと同じだと言はれる、ハイカラ學者に比すれば、實に雲泥の差がある。

萬澤醫學博士は醫學界の權威であるが、同郷の八田博士をは、先輩として崇敬する、或時萬澤博士が東京土産に、立派なバナマ帽子を持參に及んだ、蓋し蔽衣破帽では、勅任教授の体面に關する大なり、宜しく先づ帽子から模様替への必要を感じた親切からであらう、萬澤國手は想へらく、先生のことだから碌な禮も言ふまいが、ヤア立派

な帽子たい、難有ぐらゐの挨拶には有つくだらうと豫期した何ぞ圖らん、八田博士は極々の不機嫌「こぎあんもな何になつたいな、貧乏の癖に」と散々叱り飛ばされ恐縮されたことがある、是れ不人情のやうに聞ふるが詰り人の贅澤を戒められたので、決して他の好意を汲まぬ譯であるまい。

博士は精力絶倫で、壯者も及ばぬ、其の健啖家たる點に於て、大食官の免許を有する壯漢でさへ追付かぬ、天井なら五六椀は、平氣で平らげる、同縣人兎狩の御馳走には大椀で十杯を代ふる、給仕の男、お代はりの早いのに目を廻はすとのことだ、酒はお極まりの晩酌などはやらぬ、が飲む時には徹底的に鯨飲する飲んで虹のやうな氣焔を吐き、天下一呑の概を示す、煙に捲かれざるもの、恐らく一人もなからう。

時間を空費するは博士の最も惡む處、時間を經濟する如く、人間をも經濟に使ふ、此の點は黒田如水軒と同じ、如水は罪人を縛するも、用があれば放ちて用ふ、歸れば又縛り、或は放ちて庭の掃除をさせて又縛る、罪人でも使はねば損が行くからのことだ八田博士も此の流義だ、博物館の下足番にも暇の節には綱なごすかせ、決して只是置

かぬ、人物經濟も此處まで行けば堂に入つたもんだ、加ふるに人に對して温情溢るゝ如し人の世話は吾が身に代へてする寔に當代得がたき先生である。

札幌電鐵專務取締役 助川貞二郎

古人は棺を蓋ふて事定まると言つた、人物の評論は、其の人が生涯を終つてからでなければ、總勘定を決する譯に行かない、人間が生きて居る間は過去及現在の事功に就いて、觀察するに過ぎない、助川貞二郎君は、多技多能の人である、而も事業慾の熾烈なる、決して人後に落ちない、過去に於て、不毛の地を拓き、水田を造成して、大地主となつた、其の本道の拓殖に貢献するの大なる、寔に拓殖の功勞者として推奨すべきである、況んや交通機關の整備に向つて澱げる心血は、萬人の俱瞻する處である、今後尙更に幾多の事業―現に渡島海岸鐵道會社を創設し、之が專務取締たり―を企畫

すべきを信ずるに於て、助川君の決定的評論を試むるは尙早だ、故に今現に中心的勢力となつて經營しつゝある、札幌電氣軌道株式會社專務取締役として、短評を試むるに過ぎない。

凡そ事業を企畫するには、千里透徹の識見が必要である、而して之を行ふには、百折不屈の勇氣なかるべからず、此の見識と勇氣とあり、初めて事業が成功せられる、想ふに助川貞二郎君は、果敢の氣、豪邁の質、常に江河停蓄の想を凝らして、將來の大計を樹つ、其の一たび決して事に當るや、飄忽震蕩、風雨の到るが如し、時に窮逼困躓なきにあらざりしも、克く耐へ、能く忍んで、窮極の目的を達成して、今日あるを致せり。

初め君が電車事業を創設せんとするや、札幌の有志、多くは時機尙早を唱へ、將來の成功を危んで躊躇す、瓦釜雷鳴の徒、又盛んに惡罵嘲笑を浴せて敵視す、事業の前途轉た寒心に堪へざるものあり、然るに「功の成る、成るの日に成らずで、必ず由つて來たるあるを知れる」君は、堅き信念を持して、善く計り、善く畫き、皇天亦君の志

を壯なりとして、天佑を興へ、遂に初一念を貫いて、環境の蒙を啓くに至つた。

電鐵成り、交通機關茲に備はりて、札幌市民之を便とす、爾來業態順調に進み、利益大に擧がる、事業の擴張は、前後二回の増資を促がし、有志投資を争ふて、多くは意を満たす能はざるの盛況を呈し、遂に膨脹して二百万圓の大會社を形成するに至つた。今や會社の基礎愈々固ふして、収益日々に多きを加ふ、其の文明の利器を捉へ來つて交通機關整備の先驅を爲す、君の功績は寔に偉大なりと謂はなければならぬ、而して會社の實權實勢力は、一に助川貞二郎君の手に握らる、人は即ち斷じて電鐵の助川君に非ずして、助川君の電鐵なりと言ふもの、其れ豈偶然ならんや。

勿論株主の電鐵會社である、助川君個人の會社でない、けれども電鐵の運用が、一に助川君の名智妙策に依ることにて、而も電鐵の利益と計畫とが助川君の方寸に出づることに依りて、助川君の電鐵なりと云ふ言説が、穩當なるを發見するであらう、記者の信ずる如くなれば、凡ての施設計畫は、助川君に依りて樹てられてゐる、重役は其の施設計畫を承認する迄である、斯く言ふと、各重役は伴食のやうに聞ふる、只依

々諾々の盲目判を捺す道具に過ぎざる如く受取られぬでもない、若し一人半個でも、左様に感ずるものあらば、其れは正しく解誤である、曲解である、思違ひであることを、記者は明白に告白するのだ。

想ふに、電鐵の重役は悉く賢明の士である、常識に富んでゐる、計畫の才、施設の能、他會社の重役に比し、寧ろ超越するも、遜色あるなし、電鐵の重役は、手腕揃ひである、濟々たる多士を以て満さるその世評は、決して總花的の賛辭ではないことも、記者は裏書したい、看よ、老巧の板谷社長あり、其の他の重役皆計畫に秀ず、豈敢て助川貞二郎君一人と謂はんや、諸氏何を苦んで盲目判を敢てせん、諸氏が一も二もなく助川案に賛同するは、其れ以上の名案良策なきが故ならずんばあらず。

株主等は助川君を信任し、重役亦助川君を信任して疑はざるに於て、彼は自己の負へる責任の、一層重きを加へたるを感じ、日夜信任に辜負せざるに苦しめり、助川君は大膽の人なり、小事に無頓着の人なり、如何なる難事に蓬著するも、酒々落々として憂苦の色なし、而も電鐵の事業遂行上、小心翼翼として一事一物を苟もすべからざる

に苦めるは、是れ則ち深厚なる信任を辱かしめんことを恐るゝからだ、實に助川君は責任觀念の強き人である、此の觀念の下に、凡ての事業が計畫せられ、發展し、會社の利益が増進せられつゝあるのだ。

責任を他に轉嫁し、若くは回避するは臆病者の常である、眞に責任を解する人は、自己の爲したる責を甘受して辭せない、助川君は即ち其の人である、彼の一舉一動は、皆な責任を以て固められてゐる、時に獨斷專行の嫌なきにあらざるも、而も善くも惡しきも一切の責任を負ふ、從來の事例に徴すると、會社の利益のために計りし、獨斷專行の結果は、悉く利益を收めて厘毛の損失なし、昨夏の納涼大會の如き好個の活例である。

商賣は慈善にあらず、營利である、成るべく多く儲かる工夫を凝らす、之が商賣の上手と云ふものだ、儲かるためには、多くの顧客を得る途を講じなければならぬ、其の方法は多端多岐なりとしても、顧客の便利を計ることが、商賣の極意だ、優良品を安値で賣る、間違つても粗製濫造品を優良品と詐らぬことだ、少なくとも羊頭を掲げて

狗肉を賣らぬことだ、馬糞を金粉と間違はしめぬことだ、正直の商賣、而も薄利多賣招かずして門前市を爲す、神代このかた保證つきである。

札幌電鐵は果して、薄利多賣主義を實現しつゝあるや否やを詮穿するのは、別問題である、今茲に詮議立つる場合でない、電車賃金の高い安いの世評については、記者も公正なる意見を有するから、孰れ論議の機會があると思ふ、餘事は差て措き、電鐵イヤ助川専務は商賣が上手だ、客を招徠するの巧妙なる所に、助川専務の商賣に抜目なき面目が躍如たり。

有体に言ふと、助川君ほどの智慧は、他重役の誰もが所持してゐる、敢て助川君獨りを智慧の結晶也と重寶がる譯でない、併し其の智慧だ、之を活用しなければ、畢竟寶の持腐れに終る、サモ論語讀みの論語知らずに似たりけりである、驚くべき智慧を所有しても、世間に通用せざる天保錢と同一ならば、即ち智慧なきに似たり、實行しない智慧は、智慧なしと斷じて宜しい、助川君は神經過敏である、其の脳髓は電氣のやうで感應自在である、一たび感應すれば、損得打算は直に分明する、口と手と足とが

共同運動を開始する、大智の活用、實行の勇、之が多くの智者に勝ぐれて、助川君の重要される處なりと記者は信ずる。

大抵の人は、計畫の前に、思案投首だ、之を行ふ方法と、來たるべき結果を沈思靜考する、其時間が餘りに長すぎると機會を失する、斯うなると寧ろ考へざるに勝るのだ是に於て果斷決行と云ふ奴が必要となつて來る、助川君は果斷決行の勇者だ、如何なる面倒な問題に逢著しても、長日間に渉る首捻りをやらない、事の利害得失は談笑の間に解決する、人から相談を持ちかけられても、考へて見やうとは容易に言はない、若し言ふとすれば、其れは借金を申込まれた時位だらう、但し金を貸すに別に考ふる必要はないが、斷はり悪くいから、考へて見やうと逃口上に使ふに過ぎない。

人は必要に迫らないと電車を利用しない、何人も道樂に電車に乗る狂人はない筈、乗客の多少は、直に會社の米櫃に影響する、電鐵を敷いて客を待つ、手を空ふして客の御入來を待つと云ふ自然放任の營業ならば、何人にも出來る、要は進んで客を迎ふる工夫を運らすにあり、夫れ機會に乗ずるは易い、機會を作る難し、其の難かしい機會

を作つて、運用の妙を致す、之が助川專務の、進取的電鐵の營業方針と信ずる。

商買は宜しく進取的なるべし、宜しく發明的なるべし、決して化石的なるべからず、決して繩墨的なるべからず、工夫に工夫を凝らして、客を喜ばしめ、樂ましめねばならぬ、之が商賣繁昌の基である、電鐵の利益増進を計る上に於て、助川君の脳髓は、二六時中、間斷なく働いて居る、如何にせば會社の收入を増加すべきかの問題は、常住坐臥、研究されて居る、苟も乗すべき機會に際會したならば、踴躍之を捉へて逸しない、之がため臨機應變の措置を執りて誤らない、斯くて會社の收入は殖へ、株主は配當の多きを喜ぶ、有志相謀つて、彼の壽像を圓山後樂園境内に建設するもの電鐵の功勳者に對する、當然の措置である。

看よ、如何に彼が會社利益のため、努力の深甚なるかを看よ、彼の脳髓の大半は、會社繁昌のため消耗されつゝあり、春は花見の客を誘ふ、圓山の設備、秋は中島遊園地の觀月、夏は豊平河畔の納涼、冬は賞雪と來る處だが、北海道の雪は名物に似て、其の實は名物にあらず、千門萬戸、雪に閉されて、觀るだに嫌氣がさす、雪軍の包圍攻

撃を娛むものは、恐らく袖夫のみだらう、雪は厄介物に似たれども、利用其の宜しきを失はなければ、優に金儲の材料となるを得べし、其の如何に利用して乗客を吸集するかに就ては、恐らく助川専務は、多年の宿題として、研究中なりと推察する、飛行機やラヂオが發明せらるゝ世中、天然物の利用……雪位の利用が發明されぬ筈はなからう、何とか助川専務に依りて、新案が工夫されるであらう。

偕て雪の利用が甘く出来上がれば、春夏秋冬、電車は繁昌して、會社の儲かるは受合だ、昨夏行はれた豊平河畔の納涼會だ、設備に三千金を費やしたと言ふのだ、此の計畫は多分助川君の獨斷專行に出でたること、想ふ、何となれば、納涼會位を計畫するに、重役會に問ふまでもあるまいからだ、納涼會は豫期以上の成功を收め、毎夜幾萬に達するの會員、雲霞の如く群集す、二千餘坪の河原に點するイルミネーションは、清流に映じて、流星の如く、金龍躍る、餘興として、茶番狂言あり、手踊あり、活動寫真あり、打揚花火あり、仕掛花火あり、音樂會あり、浪花節あり、相撲あり、而して茶見世あり、喰ふに壽司あり、辨當あり、お手輕料理ありて、空腹を感じない、飲

むにビールあり、サイダーあり、氷水ありて、渴を感じない、諸般の設備具はり、實に別天地の歡樂境であつた、民衆が先を争ふて雲集するは當然ある、助川専務の大山は大當りである、蓋し納涼會の盛況は、則ち電鐵會社の盛況である、電車の収入は、之がため激増した、納涼會開催前日に於ける、豊平線の収入は、一千八百三十餘圓、開催當日は、二千三百八十圓を超ふ、差引五百五十圓の収入が増して居る、盛況か尻上して、収入亦尻上がりした、開催期間中の増収は、内輪に見積り、一万圓を降るまいとは、一般の豫想であつたが、之が事實となつた、兎角一万圓内外の増収、是は之れ納涼會のお蔭である、納涼會を企てた助川専務の餘徳である、記して此處に至る、我輩が電鐵の助川にあらずして、助川の電鐵なりと謂ふもの、必ずしも株主や重役に對する、不遜の言説ではあるまい。

札幌電鐵敷設に關する、助川君の功勞は實に偉大なり、而して其の功勞を記念するため建てられたのが圓山後樂園内の壽像だ、勿論電鐵に關係ある人々が發起し、他有志の醜金に依つたのである、大正十四年九月五日、之が除幕式が盛大に行はれた、參列

するもの、朝野の貴顯紳士五百餘名、壽像の題字「功勞」の二字は、遞信大臣正三位勳一等犬養毅君の筆に成り、撰文は衆議院議員で立憲政友會の總務小久保喜七君だ、撰文左の如し。

助川君貞二郎壽像成矣君常陸人天資剛毅有材幹學已通委身子商業不幸頓躋航于北海營商與漁亦不如意乃欲投身于政海歸郷爲衆議院議員候補不當選於是再提家赴札幌從事墾闢然非其志也君常欲圖運輸交通之便與同志謀辛苦經營創立鐵道會社布鐵路于北海是爲濫觴矣爾來爲札幌電氣軌道株式會社專務取締役實二十餘年又設自動車株式會社及人力車組合爲之社長以餘力勤道會議員市會議員名譽參事會員商業會議所議員等公職其他善行懿績不遑枚舉云惟北海之爲地冬則積雪文餘朔風裂膚當是時布鐵路便運輸非堅忍不拔以任其業者安能見今日之隆君之力不亦偉乎今茲乙丑君年六十六有志胥謀建銅像以圖不朽予乃銓次其所知以示後人如此

衆議院議員 正五位勳三等 小久保喜七撰

犬養君は滅多に毫を揮はない、其の遞信大臣の犬養君が、特に助川君の爲め揮つたと

云ふことは、助川君の大なる名譽であらねばならぬ、君の從來の功勞は小久保君の簡約なる叙述に盡して居る、今後精力絶倫なる助川貞二郎君は、更に新なる事業を企畫成功して、壽像に幾多の光彩を添ふると想ふ。

日の丸商店主 松本菊次郎

禪道の虎の巻「碧巖錄」に斯う言ふ文句がある、「活人を活かし盡して死人を見る、死人を殺し盡して活人を見る」と、随分無理な文句で、俗智では解釋されぬ、併し俗念を放れ、無我無中の境地に入り、宇宙の大自然に同化さへすれば、譯もなく得心が行く、孔子も曰ふた、知るを知れりと爲し、知らざるを知らずと爲す、是れ知れるなりと、得て禪道の悟りと云ふやつは、「負け惜み」の強い人間ならば譯のない話だ、有り合せの智慧を働かして、人に一步先じた考へを起せば足れり、人が人力車で走れば

吾は自動車で走る、人が自動車なら、吾は汽車、人が汽車なら、吾は飛行機と云ふ具合に、人よりも先へ先へと智慧を配れば宜い、此の心掛さへあれば、頓智頓才は湧くが如しでグツト行詰ることはあるまい。

松本菊次郎君は臨濟禪を修めて造詣あり、現に札幌郊外圓山瑞龍寺の世話人であり檀家である、想ふに彼の智慧も、經綸も、人格も、禪道に依りて陶冶されたやうである而して之を天下國家に活用せんとする所に、時々彼の面目の躍出を見るのである、彼の札幌を商港とするため錢函方面から札幌へ通ずる、運河開鑿意見の如き一例である此の卓見は恐らく俗智を驚かしたであらう、只一片の理想—小説的架空の意見と笑つたかも知れぬ、而も事實に就て考ふれば、彼の「札幌商港論」は、突飛に似て決して突飛にあらず、聽て實現の機會が屹度到來するに相違あるまい、札幌原頭、海陸空を聯絡する、北海道驛の大建築は、蓋し時間の問題にして、必然實現せらるべきであると想ふ、實に彼の眼に映ずる經濟的交通路は、世界的に展開せる水路と空路であるが、實際に於て水運の便を開き、札幌と小樽とを結びつけ得ば、札幌市及び附近の開発繁

榮は著しいのだ。

菊次郎君は三重縣伊賀の人だ、家世々農を業とす、農は國の本なりと謂ふ觀念は、少時既に深く腦裏に刻まれてゐた、而も彼は自勞自活の舊式農業に満足する程の、小局量の持主ではなかつた、彼が三重縣中學校を卒業したるは、明治二十一年であつた、此の時に當り自由、改進の二大政黨は、口を揃へ、筆を揃へ腕を揃へて藩閥政府の倒壞に痛撃を加へた、天下の青年悉く浮華誇張の政論に血を沸かし未來の大政治家を夢想した、遂に一般の風潮は愈々浮調子となり、政治は上品なる職業にして、農商工は最下級の職業と賤むに至つた、然るに深慮の菊次郎君は、此の風潮に捲き込まれなかつた、窃かに惟へらく、假に志を得て廟堂の大官と成り得ても、其れが格別大いした名譽でもあるまい、寧ろ大臣を養ふ百姓となつた方が、却つて面白いではないかと、即ち實業家たるべき方針に向つて進んだのである。

明治二十二年上京して、先づ英語を練習すると共に簿記學校に入つた、蓋し諸般の實務に要する經理の智識を培はんためであつた、是れ即ち彼の卓見である、簿記は當に

銀行會社の實務にのみ必要な武器でなく、農業の經營にも乃至家計の整理にも、孰れも極めて必要だ、斯くて彼は實務に要する基礎學を頭に入れた、偶々總武鐵道の計畫成り、彼亦重要な任務に就かんとするに際し、意外にも恩人の情誼に縛せられ、彼をして遂に大坂公論―村山龍平の宰する日刊新聞社に籠城の己むなきに至らしめた、彼が東京を去るに臨み、友人等深く之を遺憾とし、情に死せる彼の葬儀を某旗亭に營み贈るに左の弔詞を以てした。

義理も人情もない浮世に、近頃迷惑な禰も糞のつき合、絡みつかれし鳶かづら、解けぬ心を知りもせで、東を西へ逆櫓の進まぬ舟を無理やりに漕ぎつ推しつ難波江の葦間に結ぶ筆の縁。

菊次郎君の大坂下りは、實際氣の進まぬ、近頃迷惑な禰も糞の附合であつたに相違ない、鐵道屋たらんと志して、飛んでもない新聞記者に方向轉換、恐らく世の中に義理ほど辛いものはないと感じたであらう、送辭に對してスラ／＼と述懐したのは左の二句

伯樂の目鏡違ひに是非もなく馬子に牽かれし筆の初旅。

千里をも走る此身も今はうし世間のぼろを運ぶ悲しさ。

新聞社に入りて彼は外字新聞の翻譯を擔當した、即ち倫敦タイムス、紐育ヘラルド、これが抑も彼の腦裡に世界的智識を注入したる第一歩であつた、特に濠洲の事業を察するためシドニーマールを精讀し、旁北海道毎日新聞を深き興味を以て迎へた。

大坂公論は甚だしく彼の事業慾を刺戟した、産業立國の初一念に向つて慕進すべく決意を固ふせしめた、彼は濠洲に關する智識、北海道に關する情況を詳にした、共に孰れも前途有望である、南せんか北せんか去就に迷ふた、一己の利益よりすれば、濠洲の勝れるを感知した、而も外國に於ての事業だ外人相手の金儲だ、愛國心の燃えて熾なる彼は、如何に利益の見るべきあるも、我國―北海道の開拓を除却し能はなかつた當時、内地人の眼に映する北海道は、熊鹿の棲家である、害虫の世界である、廣大なる地域は、瘴猛なるアイヌ種族に占領せられ、只雄大を誇るものは、千古斧鉞を入れざる森林のみである、海は魚藻に富み、陸は礦物の無盡藏、寔に北門の寶庫たる實を

失はないけれども、内地人は聞いて浮雲の如く、見て土塊の如しだ、此の時に當り、官人如何に北海移住を奨励するも、人の多くは祖先の遺業を棄て、墳墓を棄て、移住の決心を固むるに至らなかつたのである。

北海道に初めて大和民族の足跡を印したるは、文治年間(今を去る七百年前)藤原泰衡の殘黨であることは舊記の録する處だ、鎌倉幕府は罪人の捨場に本道を選んださうだ其の國防及開拓の大業を樹てたのは徳川幕府である、爾來春風秋雨三百年、幾千万の國帑を費やして、明治二十三年前は人を容るゝ僅かに五十万、地を拓く又僅かに五万町歩に過ぎなかつた、本道拓殖の遅々として進まざる、實に慨嘆に堪へない、是れ彼が天恵多き濠洲を棄て、天恵少なき北海道の開発に一生を托するに至つた所以。大阪公論の廢刊と同時に明治二十三年七月、意を決して函館に渡り、共同商會に入りて商業に従事した、商會は十万圓の小資本にも拘はらず、北海道にありては三井大倉の大會社と拮抗し得る勢力を有した、營業の範圍は廣汎に涉り、海産陸産は勿論木材より石炭に及んだ、札幌に支店を有する關係上、常に往來して商勢を探究した、此間

潜心各地の農業状態を視察し、研究調査の結果は、茲に彼の探るべき方針と事業に就て鐵案を下すに至つた、其れは言ふまでもなく、本道拓殖の眞髓たる農業方法の改善及改善に伴ふ肥料と農具の營業であつた、彼は夙に掠奪農業—無肥料耕作—の拓殖の趣旨を没却するを認め、進んで之が悪習慣の改善を決意した、之が爲め明治三十二年の二月を以て、札幌に「日の丸商店」を創設し、肥料の販賣を開始し、一面施肥の徹底的宣傳を試み、苦心慘憺漸やく農家の蒙を啓き、年一年と施肥の區域と需用の數量を増加し、隨て日の丸商店の名聲噴々として今や殆んど全道を風靡する盛況を示せり、是れ菊次郎氏が、北海全道の土地を自己の所有と見做して樹てたる、大方針の實現に外ならぬ。

農業の經濟的進展は勞力本位の農業を革めて、機械本位となすことである、斯の如くせざれば拓殖の進展を期し得ない、是れ實に農業の革命である、此の革命の陣頭に立ち、先驅をなせるものは即ち吾が松本菊次郎君なり、先づ革新の一着手として、大正七年二月を以て新式農具販賣の旗揚げをなした、彼は多大の犠牲を拂つて、米國より

八臺のトラクターを輸入し當業者をして實地に就き、絶大の威力に驚異せしめた、蓋し本道に於ける廣大なる耕地面積と、勞力需給の關係とは、早晚斯の如き機會の到來を達觀して先鞭をつけたるなり、取も直さず菊次郎君は農事改良に向つて陳吳の役目を勤めしなり若夫れ新農具が一般に行渡つて絶大の威力を揮ふに至れば、本道の拓殖に一新機運を迎へ、從來牛歩的拓殖事業は、恰も駿馬に鞭打つが如く、急速度を以て進捗すべきは、火を睹るよりも明かなり。

何事によらず、向上とか、進歩とか、發展とか、改善とか云ふものは、人の振り見て吾が振りを直すことに基づく、廣く智識を先進國に求め、其の智識を巧みに活用することにある、其れには實物教育が必要である、實物教育は先進國の情態を視察することによりて得らる、農事改良に熱心なる菊次郎君は、曾つて米國農業を視察し、其の獲る所の一端は載せて「米國の農業と北海道」と題する小冊子に詳かなり、要は米國の農業は凡てが大仕掛で、設備も整備して、痒い處に手の届くやうに整備して居る、實に到れり盡せりと云ふ域に達して居る、凡て資金は事業を促すと解するは僻見だ、事業に

伴ふ資金である、事業さへ的確なれば、何ぞ資金なきに苦るしまんやである、故に世界の資本國と、世界の貧乏國とを比すれば、到底較べ物にはならぬが、貧乏國は貧乏國なりに、盛に他の長を探り吾が短を補ひ、利用厚生の途を講じたならば、決して悲觀するに及ぶまい、菊次郎君は農業視察の結論として、學理を基礎とする合理的經營により、飽まで生産費を減する事、貯藏法を合理的にする事、取引及運搬方法の改善に依りて、品質にも値段にも、世界的に常に市場に勝を制する事、此の見當がつかぬ以上は、保護も獎勵も、勸誘も指導も、結局は思ふ半分の効果も面倒だと斷言して居る、一々の的に中るの至言である、竊かに菊次郎君の意中を忖度するに、吾國運の轉ずる所、吾が農業も早晚必ず海を渡りて、大陸經營の新舞臺に入らざるべからず、然り衣を中央亞細亞の高原に振ひ、足を黒龍の流に洗はんとするもの、今に於て豫め北方寒地の農業經營に對し、深き理解と、充分の試練なくして可ならんやと云ふに在りはすまいか。

思想に國境なき如く、宗教にも國境がない、人情にも國境がない、只異なるは風習の

み、言語のみ、政治のみ、菊次郎君の米國を見舞ふや、携ふる處は一に國旗、二に算盤、三に木魚、此の三つが携帯品の主要物であつた、想ふに國旗は日本國民の精神で如何なる場合、如何なる事情あるも、決して日本國民たる精神を喪失せぬ爲であらう算盤は凡ての事業は算盤球に乗らぬものは失敗を招くと云ふので、米國の事業を算盤球を通して研究する爲め、研究の結果は、米國の事業は悉く算盤に出發し、日本の事業は多く算盤以外に出發して居ることを確めたい、木魚は日本佛教の表徴で、木魚を以て米國を横行するは、佛教信者として基督教國を濶歩せんとする、偉大なる信念に基く、彼はワシントンの墓前に跪し、香を焚き木魚を鳴らして、般若心經を拜誦し、幽明相隔て、心の握手を試み、互に會心の情緒を述べ、尙且寂漠たるアリゾナの汽車中に、白人の懇請に應じ、木魚を叩き讀經し、異教徒をして感謝措く克はざらしめたるが如き、思想も宗教も人情も、極致に至れば凡て是れ一誠に面白かつたと言つて居る。

着實なる實業家として、本道拓殖の功勞者として、菊次郎君の盛名は己に全道を壓すると謂ふも過賞ぢやあるまい、裸一貫に身を起して、長者議員たり得る資産を造れる如き、札幌市に極めて有用の人物として推重され、幾多の公職を帯び、日夜劇務に鞅掌しつゝあるも、此等は決して彼の本領の全部ではあるまい。

凡そ其の爲人を觀るは、眞摯の言行に徴するが徑捷だ、菊次郎君は如何なる性格の人なるか、如何なる經論、如何なる抱負を懷き、如何なる信念を抱有するかを詳かにせんとせば、千万言を費やすよりも、近頃嫁せりと謂へる、彼の一子に與へるたる一篇の「婆心漫錄」其れを抄録すれば足るので。

婆 心 漫 錄

【一】身○心○行○動○の○源○泉○は○須○ら○く○大○慈○大○悲○の○嶺○頭○に○發○す○べ○き○事○。

【二】溫良恭謙讓之を婦徳と云ふ一誠以て貫くべし克己、柔順、物と争はず之等の功讓は廣大無邊にして單に一身一家の重寶なるに止まらず天下の至寶なり常に努て修養すべし。

【三】金殿玉樓に住み酒池肉林に飽き綾羅錦繡を身に纏ふも省みて人生の眞意義を解

せず随て心の衣食住に無頓着なるものは淺まし。

【四】常に努めて身心の健康に留意すべし身心輕快なれば瑞氣自から堂に滿つ。

【五】朝は早く起きて清新の氣に觸れ時間の餘裕を作るべし夜は十時を過ぐれば座睡も可なり睡眠不足は保健の道にあらず。

【六】衛生上先第一に水と空氣と光線に大なる注意を拂ふべし。

【七】氣の腐るは空氣の腐るなり時々換氣を要す掃除洗濯撒水等の機會に於て一日數回出で、外氣を呼吸すべし。

【八】大抵人のする程の事は慣れるによりて行ひ得るものなり灸所を捕へて練習すべし先づ米磨より始めてかな。

【九】食事は營養を主として味覺を従とす營養は吸収に注意し偏せざるを良とするも品數の徒らに多きは亦不經濟なるものなり。

【十】番茶は口の焼ける程熱さをよしとす酒の事に關しては吾之を知らず。

【十一】服裝は身分相應而して質素を旨とす。

【十二】その日の衣服は就寢前に必らず正しく整理し置くべし。

【十三】萬事萬物内外共に常に努めて整理し置くべし整は正なり氣持のよきこと夥敷煩惱も妄想も自然に整理し得らるべし。

【十四】掃除は適當の時間に於て表裡なく勵行すべし邪念の拂拭亦最肝要なり。

【十五】便所の手拭は絶對的清潔を望む凡て汚き所は特別に清潔に保つを要す。

【十六】金錢を大切に努て冗費を慎むべし獨り金錢に限らず時間も身体も萬事萬物經濟的に凡て活かして用ふべし。

【十七】借金は家計を誤るものなり家庭に用ふべきものにあらず人生知足を貴ぶ分を守りて有餘を保存し以て他日の用途に備ふべし。

【十八】何事も用意は極めて周到なるべし用意の周到なる所臨機應變即斷即行の妙あり輕爾なる勿れ而も亦餘りに考へ過ぎて因循に陥ること勿れ。

【十九】心配は必要なるも心痛は無用なり。

【二十】常に大局を觀て同時に亦要所を知るべし。

【二十一】仁過くれば弱くなり義過くれば堅くなり禮過くれば諛となり智過くれば嘘を吐き信過ぐれば損をすと聞く及ばざるは過ぎたるに優れる事あり程合を知るべし。

【二十二】依頼心の存する所に失望あり常に依頼心の排除に努むべし。

【二十三】禮儀は眞の禮儀ならんことを要す贈品の如きも其中に報恩謝徳の意味を含むは可なりとして斷じて依頼心を混入すへからず。

【二十四】交際は一時的のものあり永久的のものあり何れにしても親切を旨とすべし凡て淡泊をよしとするも斷じて浮薄の振舞あるべからず。

【二十五】人の譽ることなしと雖も人の毀りを受くること勿れ。

【二十六】御世辭の上手を交際上手と心得、交際上手を内助の唯一手段と心得るものあり現代婦人の多くは御世辭の工夫に没頭して其練習に肝膽を砕くも顧て内助の眞意義を解するもの少し。

【二十七】一樹の蔭一河の流れ固是宿縁の存するものあり已に相許して夫婦となる一

切を超越して其間毫末も不安の心あるべからず相敬し相信じ之を調ぶるに禮を以てす親しきに慣れて禮儀を鹿略にすること勿れ夫婦の間に禮儀なければ禽獸と擇ふ所なし。

【二十八】掃除洗濯食事の用意家計一切の整理整頓、子女の教養戸締、火の用心、僕婢に對する心配りなど臨機應變何の造作もなく身心一如輕快にして夫をして内顧の憂なからしむると同時に勤儉力行飽迄正しき大道を歩ましめ其脱線を警しめ忠實業に服して不平不満の心なからしめ歡天喜地相共に其志を高尙にす以て祖先に對すべく以て子孫を辱しむるなし亦樂しきにあらずや。

【二十九】心田は常に平靜にして喜怒哀樂の小波に翻弄せらるゝこと勿れ。

【三十】調子に乗り又はウツカリとして自己神の所在を忘却すること勿れ。

【三十一】道行倦むことなくして飽まで飲食すること勿れ。

【三十二】朝念觀世音、暮念觀世音念々從心起念々不離心。

孔子曰く詩三百、一言以て之を蔽ふ、曰く「思無邪」と、想ふに菊次郎君の「婆心漫録」

三十二箇條、之を要約すれば大慈大悲の源泉に基く、大慈大悲の觀念は体なり、三十二箇條は用なり、詰り自己の理想とする所を愛子に諭せるなり、其の現代婦人の多くは御世辭の工夫に没頭して、其の練習に肝膽を砕くと言ふは、現代婦人の流弊を指摘せるなり、其の金錢でも時間でも身体でも、經濟的に活用すべしと言ふは、以て彼の健實なる經濟意見を窺ふべし、其の即斷即行の妙諦を説いて因循に陥るを戒めたるは即ち禪機の活用なり、是れ菊次郎君の躬踐實行する處だ、其の人より譽められなくも人より毀られる勿れと云ふ意義は、婦人は椽の下の努力に終始し、人の己を知らざるを患へず、結局出娑婆の勿れと云ふことになる、移して以て彼の世に處し、人に對する要道を窺ふに足る畢竟已を推して人に及ばす慈眼愛腸は、大死底の人に非ずんば流露し能ふまい。

政治に就て、彼は高遠の理想を有してゐる、彼の行藏は只理想の命する儘だ、故に彼は理想に動くも、人に依つて動かない、雷同附和は、彼の最も忌む所である、現に彼は公友會の領袖である、公友會が中西六三郎君との關係上、殆んど相率ひて政友本黨に加盟したる時、彼は毅然として動かず、説客又遂に彼を動かし得なかつた、此の一事彼が如何に理想の人であり、進退去就を苟もせざるかを證する、彼や財成りて位地益々高く、而も謙抑して矜らず、己を空ふして民衆と樂むを忘れない、其の精力絶倫頭腦透徹、豊富の經驗、特に衆を動かすの雄辯に至つては、誠に平民政治家の典型、而も斷じて出處を肯じない、何處迄も池中のものとして、白眼天下を睥睨するあたり吾之を評するの辭なきを如何せん。

普選論の急先鋒 辯護士 高野精一

札幌辯護士の花形役者を探むれば、先づ指を高野精一君に屈せざるを得ない、彼は實に辯論の雄である、嘗に辯論に雄なるのみならず、新々思想の持主である、凡有の新刊書を耽讀して思想の糧とする、忠實なる讀書家として、政治、經濟、社會の各方面

に涉りて、研究を積めるもの、札幌辯護士中恐らく彼の右に出づるものはあるまい、斯くて政治家たる素質を養ふ、普選實施の曉、代議士の榮冠を戴くもの彼を筆頭に推さざるを得ない。

高野精一は立志傳中の一人者だ、給仕より身を起して早稻田大學に學び、優等で卒業し、判檢事及辯護士試験に及第して檢事となり、其の論告の合理的に峻烈なる鬼檢事の評判を取つたさうだ、元來人は感情の動物で、萬事が感情に支配され易い、然るに彼の辯論は法理に基ける常識だ、若し檢事に理窟は附けやうにあり、被告を罪人と思へど云つたやうな調子で、まくし立てられたら、其れこそ被告は悪い災難である、吾が鬼檢事の高野精一君は左様な沒常識論者でない、飽まで理詰めで行く、非は非では是であつた、今日法廷で聞される公明正大の雄辯は今も昔も變はらない、只變化した點は、酒色と讀書の分量が多くなつたことであらう。

精一は最も善く既成政黨の弊害を承知してゐた、故に久しく政黨員たることを避けた即ち政黨には門外漢であつた、門外漢として盛に政論を闘はしたもんだ、誤解する勿

れ、彼が政黨員たるべくして政黨員たらざりしは、立憲政治に政黨の必要を認めぬ、野暮な量見からでない、只既成政黨が理想に適せぬからである、國家及民人の福利を戸棚の隅に押込め置き、黨利私福の一點張りに驀進しやうとするからなり、既成政黨を嫌ふのは、獨り吾が高野精一のみでない、天下の識者は多くさうである、然るに其の既成政黨嫌ひの彼が、齷然禪を締め直して憲政會に仲間入りするに至つたは抑も譯がある。

昔、陸奥宗光は決して藩閥の寵兒ではなかつた、伊藤井上輩とは同僚同格の人物であつたが、彼の政見は大に進歩して居た、政治の革新は藩閥を槍玉に揚げてからと確信した、而も藩閥の根底深く、之を倒す一朝一夕の能くする處にあらずと看取するや、藩閥を倒すは外部よりするより、寧ろ屈辱を忍びても、獅子身中の虫となつて、内部から細工するが近道なるを悟つて、猫を被つて明治政府に仕へた、明治十年の亂には彼は元老院幹事の重要な位地にあつたが、氣脈を西郷に通じて、明治政府の顛覆を企て當路大官暗殺の陰謀に參畫したが、計畫は美事に失敗に歸して、國事犯罪人として

囚れの身となつた、高野君の政黨入りは、陸奥宗光の故智を借用に及んだのではあるまいかと噂されてゐる。

國家民人の幸福を度外して黨利黨福一點張りの既成政黨、其の黨弊やら情弊やらを刷新して、一種清新の空氣を漂はしめやうとするには、局外者の力及ばぬ處である、ド―としても身を黨籍に置かねばならぬ、恰度陸奥宗光が内部から、藩閥政府を組上に料理しやうとしたのと同じ意味合だ、其處で高野君はズ―と一通り、爛眼を放つて既成政黨の點檢を始めたが、孰れを觀ても山家育ちの感に打たれた、然し其の中でも憲政會が幾分理想に近かつた、斯くて既成政黨鼻摘みの彼は遂に憲政會に仲間入した、其の仲間入りしたのは一時の方便、一時の權宜に過ぎない。

黨弊刷新と普通選舉速成の二大目的を抱いて黨人となつた彼は、果て目的達成の曙光を認められしや否やは、大に疑問の存する處である、露骨に言ふと、是は確かに失敗であつた、札幌憲政派の中樞神經は、今尙狂つてゐる、積年の宿弊は、固より一朝一夕に改善さるべくもない、モヒ注射の夫の如く、當意即妙の効果を奏するやうに容易

でないことを承知せる人々は、高野君が常に不如意の境遇に不平滿々たりしことを責めぬであらう、若し之を責むるものあらば、甚だ以て酷である、札幌憲政支部の革正は、先づ幹部の改造から手を下さねばなるまい、其れには玉葱王の一柳支部長から追つてかゝらねばならぬ、一夜作りの政治屋の一柳が、支部長として、采配を握る器でないことは周知の事實だ、矢張り一柳は林檎や玉葱をいぢくるが適任だ、無能無策の一柳の郎黨で固むる支部、常に政友派に太刀打たれ勝ちで、醜態百出は理の當然でなければならぬ。

支部長一柳の無能振りは、嘗に札幌仲間にてのみならず、東京の本店にまで響き渡つてゐる位だ、一柳も人間並に自己の不能を悟つて、潔く支部長の椅子を抛たうとした、是れ決して作り狂言でない、作り狂言の筋書を畫き得る程の器量人では無論あるまい、何を言つても支部の重鎮本間久三に浮腰になられては、支部長の看板が背負される筈がない、本氣の沙汰で投出しにかゝつたが、残念なことには止男が出た爲め、龜の頭のやうに、辭意を引込ませてしまつた。

一柳が辭意を翻したので、幹部は其の儘居据り、支部のダレ氣分は一層ダレて來た、夫れ病膏盲に入れば、名醫も匙を投げざるを得ない、流石の高野君も是にはハタト當惑した、自己の理想が實現されぬ以上は、三十六計の奧義を極め込む外はない、支部の長老松田學、安東俊明は眞先に離縁狀をブチ付けた、高野君も脱走の後陣を承はるはずであつたと思ふ、併し出所進退を苟もするのが嫌の彼は深く淺く考へた。

待てよ、此處でタン腹を起せば其れ限りだ、入黨の意義を爲さない、此處か勘忍の爲し處だと、大きく悟つて遂に切れかゝつた勘忍袋を引締むるに至つた、固より彼の眞意は天下國家に存する、支部のウジ虫共に伍したからが、其れで彼の名聲が傷つき貫祿が減るのでない、隱忍自重して焼ッ腹を押へる處が、彼のエライ處であると信ずる。大正十四年十一月二十一日疾風迅雷的に左の聲明書を發して支部の同志を驚かした。

脱黨聲明書

醜惡な政權慾の單なる争に愛憎がつきました私は、一切情實を排して、斷然憲政會を脱會致します、併し其は變節改論でもなければ、又一時の氣紛れでもありません

もつと純眞な、人間的な戰の第一線に立つべき道程であります、切に辱知諸彦の健康を祈ります。

想ふに彼が憲政會を脱したのは豫定の行動として、何等怪むを要しない、只處決の遲れたことを不審に思ふ位で、本人に取りては、何等の痛痒を感ぜずとしても、本道憲政派には、取り換へしのかざる程の大打撃である。

勿論、憲政會支部は高野君一人の支部でない、他に幾多の自稱名士政客に乏しからざるも、彼等は單に支部を組織する一分子に過ぎない、其の精神たるべきものは、即ち吾が高野精一であつた、實に憲政會支部は、彼あるがために重ぜられたと觀すべし、語に曰く、山高きが故に尊からず、水あるが爲に貴し、高野君は貴き水であつた、水の精であつた。

畫龍點睛を施さざれば、如何に名匠の作も、一片の反古紙のみ、點睛を施して始めて活龍を觀る、雲霧を得ば、將に九天に飛躍せんのみ、憲政支部は死龍である「點睛」の高野君あるが故に活きて居たのである。

智略に於て、識見に於て、辯舌に於て、高野君は實に憲派の珍寶であつた、而も國士の風格を備ふることに於て、憲支部中何人が彼に伍するものあらん、今日憲派が大を爲せる所以、固より幾多の理由ありて存す、而も地盤擴張の先鋒となつて、各地に試みられたる、雄辯の效果なるを否む能はず、然り、高野君の雄辯は、常に憲派の珍とするのみならず、本道言論界に於て推重されるのである。

普通選舉は彼が宿昔の持論であつた、理論と實際とに稽へ我國に普通選舉制を布かざるべからざることは、今日の政黨が俄かに之を提唱するに先ち高唱した、而して輿論の喚起に努めたのである、彼は即ち普選論者の先輩と謂ふべし、黨人は彼の尻馬に乗つて走つたのである、只此の一事を以てしても、彼は政治思想の改造者である、天下の憂に先ちて憂へる先覺者である、彼は持論の實行に便利なる政黨を選び、憲政會に入會したのだ、彼が憲政會員として普選の速成に、如何に雄辯を揮ひたるかは、茲に絮説する必要がない、今や普選の制成り、實行期に入つた、彼が本來の目的は達せられたのである、政治に一定の信念を有せざる、田夫野人に似たる政友と伍し、時に愚

劣の黨議に拘束せられるは、彼の最も心に快とせざる處なりと信ずる、是に於て潔く脱會の手段を採つたのであらう。

脱會の理由に曰く、醜惡な政權慾の單なる争に愛想がつかしました、と言簡にして意長し、只此の一語、千萬言の文章に勝さる、彼既に憲政會を去る、今後如何に行動せんとするか、想ふに彼は「純眞な人間的な戦の第一線に起つ」を疑はぬ、彼が憲派を去る定めて満足であらう、想ふに普選實施の曉に、既成政黨は根本から覆されると信ずる筈の高野君は、無産階級の代表者として、政界に雄飛するであらう、又無産者にした處が、普選の恩人たる彼を、代表者に選ぶを光榮とするであらう、されば次の總選舉に彼が候補者に推薦さるべきは判かり切つた話だ、高野君が無産階級の代表者として政界に活躍するの時機も蓋し遠くはあるまい。

札幌電鐵社長 板谷順助

四六

近來の世相は、著しく資本家排斥に傾いて來た、半可臭い學者、或は學者の卵子共は口を極めて資本家を呪ひ、共鳴者日増しに殖へる一方である、彼等の或者は、他の資産をロハ取りにしようど突飛な考へを持つて居る、財物のロハ取り、是れは強盜の所爲である、人の所有權を強奪しやうとする思想は、如何なる場合に於ても不都合であることは、餘りに明白し過ぎてゐる、板谷一家は本道隨一の資産家と目せらる、其の一門の財力を集むれば、全額拂込の一億圓位の大會社は、立所に設立されさうだと認められるに於て、例の半可臭ひ連中より、資本家横暴なりと呪はれる程の大資本家だ記者は決して資本家征伐の思想に與する者でない、自分が貧乏なるがため、他の金満家を呪はんとする者でない、飽まで資本家を敬重せんと欲する一人だ、然れども畢竟資金其ものを重寶と見て、敬重するのであつて、資本所有者其ものを敬重するでない、若し資本と人と共に敬重に値すれば、無論共に敬重するに吝ならず、斯く言へば

拜金宗のやうに感ぜられるが、決して然らず、金満家の多くは低脳兒なりと信ずるが故に成るべく有効に使消せん爲の、一時的方便の考へに過ない。

順助君は板谷家の一分子である、宗家の總支配人たる重要な位地を占むるに於て、彼が事業界に有する勢力は實に偉大である、彼の思想は未だ全く舊套を脱し得ざる憾なからすとは言へ、一般資本家の通患たる、横暴、倨傲、豪奢の氣鮮し、人或は目するに風流才子を以てするあり、是れ皮相の見に止まる、彼の眞骨頂は、未だ目するに風流才子を以てするほど墮落せざるなり、時に「隱戀房」を耳にせざるに非らず、而も斯の如きは一時の惡戯なり、痴情に囚はれざる一時的脱線なり、以て理性を葬り去るにあらず、偶然の小過失、豈聲を大にして咎むべけんや。

造物主が人間製造の眞意を付度すると、概括して智、仁、勇の三徳を兼備するものたらざるべからず、此の三徳が圓滿に發達したのが、眞の人間であるさうだ、然らざるものを、人間の皮かぶつた畜生と言ふげな、今の世は、此の畜生道に墮ちた人間だらけで、流石に寛仁大度の造物主も呆れて、此處一ぶくの体であらう、敢て道學先生の

四七

説明を受賣するまでもなく、智者は智に倒れ、勇者は勇に斃れる、未だ曾つて仁者が仁に倒れたるを聞かない、仁者に敵なしと言ふが、想へば實に其の通りである。遠き昔に遡ぼるまでもなく、最近に於て、一代の偉人傑物と仰がれさうな人物でも、悉く不仁に倒れて居るやうだ、星亨は何うだ、原敬は何うだ、安田善三郎は何うだ、誰れも此れも、三寸の切先に、天壽を縮めてゐる、星も原も、智もあつた、勇もあつた、併し其の智も勇も、自己流であつたのだ、國家民人のためと云ふよりも、多くは自黨を本位として、天下を私せんがため揮つた、智勇に外ならず、之を稱して蠻智蠻勇と謂ふのだ、志士の怨を買ふ、固より當然である、伊庭想太郎なくも、中岡良一出でざるも彼等の命數は窮せりだ。

安田善三郎は天下の大富豪であつた、彼は日本の金融界を壟斷せんと試みた、財力に於て、何者の恐るべきを知らなかつた、斯ほどの大勢力家でも、朝日平吾の一撃に敵し得なかつたのだ、要するに彼れ安善は、財を集むるの智勇は甚だ人に過ぎてゐた、然も克く取つて、能く散ずるの途を知らなかつた、天下の財寶を私して國家民人のた

めに散ずるを知らなかつた、否散ずるを知らざるにあらず、散ずるを吝んだからだ、若し彼に驚くべき同情心が發露したならば、而して天下の素寒貧たる美なる心情を有したならば、恐らく兇刃に斃るべき運命に遭遇するに及ばなかつた、故に彼を殺すものは、人にあらずして、彼自身である、他殺にあらずして自殺である、朝日平吾にあらずして、金庫にうなる財貨である、敢て言ふ、彼は不仁なるが故に、遂に身を滅したのである。

順助君は金満家だ、併し今日の富は、安善の富の垢ほどもあるまい、併し行く／＼は安善の域に達し得ないとも限らぬ、今に於て安田の智勇を學んで、仁を棄つる乎、智勇仁を兼備して、人間本來の面目を發揮せんと欲するかを、研究して世に處するの道を講ずべきであらう、順助君は人情哲學の蘊奥を極むる如く、金満家の世に處する途を、善解すると聞く、必ずや積善の家餘慶あるを知るであらう。

順助君は理智に長けた人である、自信を任せぬ人である、一路理詰で進む、何人も遮り能はぬ、時としては、理外の理に囚はれることもある、併し是あるがために、順助

君の人物を高下するに足りない、例せば女難の如し、女難の家庭を破壊する所以の理を解してゐる、浩然の氣を養ふためには、必要の道具視せられてゐる、女難恐るゝに足らず、唯恐るべきは愛の結晶である、之が抑も問題の種子たるに於て、成るべく其の種子を製造しないことに意を須ひるらしい、其の用意周到の點は敬服の外なし、其處へ行くと、彼が莫逆の友、齋藤甚之助君などは、用意甚だ粗漏と謂はなければならぬ、何となれば千慮の一失あるからだ。

聞く順助君が、深く練り、深く考へて、電鐵社長たるを決意するや、周囲の人々は再考を求めた、然るに彼は毅然として動かず、敢然として行ふた曰く、助川も人間ならば、俺れも人間だ、同じぐ二箇の罌丸を提げて居る、別に恐るゝに足りない、心配するな、助川の智慧と手腕が、俺れよりも勝ぐれ居れば、俺は助川の子分となるまでだ、若し俺の方が助川より勝れ居らば、助川を子分にするまでだ、何等の不思議なし、又面倒なしと、果して然るや否やを知らずと雖も、意氣豪壯の順助君としては、如何にも有りさうなセリフだ、大丈夫は宜しく斯ほどの氣慨なくては協ふまい、記者が順助

君を目し、金満家の子弟に、出色の才氣あるを信ずるもの、之がためだ、細瑾固より問ふに及ばない。

金満家が只金の番人たるに止まるは、無意義である、金の番人は金庫で澤山だ、資本家は資本家らしく、大膽に其の金を有効有益に使ふことだ、霸氣満々たる順助君の性格としては、營利事業のみに汲々たるは決して本意であるまい、足を政界に投じて一六勝負を試むるの意志あるを忖度するに難からず、故に彼は一たび衆議院議員たらんと志した、而も四圍の事情許さざるものあり、志を屈すべく餘儀なくされたが、想ふに其れは一時の故障で、決して永久の故障にあらざるは勿論であらう、板谷君の活眼なる既に普選に應ずるの準備を整へ居れると信ずる、記者は凡ての點より觀察して、來るべき普選に乗出すだらうと思ふ、記者は重ねて言ふ、吾が板谷君は、事業家としてよりも、政治家として本分を遂げしむるが、寧適性なりと信ずる、唯一言したきは金持の味方たらんより、貧乏人の味方たるを失念せざらんことだ、板谷順助君に望む處は、此の一事だ、夫れ唯此の一事のみだ。

凡眼を開いて、近きを観るは千万人悉く然り、活眼を開きて、遠く謀り、深く慮ることとは、蓋し稀れである、順助君は活眼の士である、彼は咫尺の近きを察せずして、千里の遠きを察し、且つ適應の準備を整ふ、曾つて多額議員補缺選舉に對する行動は即ち是である、義弟宮吉氏が立候補した、彼が貴族院議員として適材なることは、別に黨人の口を藉るを要せず、衆目の視る處、十指の指さす處、悉く然らざるはなし、其の學識に於て、材幹に於て、識見に於て、人格に於て、財力に於て、聲望に於て、群小に超越する、固より然らざるを得ざるなり、但し公人の資格に於て、財力を數ふるは、聊か奇異の感なくんばならず、財力の多少、勿論人物の高下を律する能はずと雖も、財力必ずしも邪魔になるまい。

宮吉氏の推薦者は、憲政、政友二大政黨であつた、二大政黨の勢力圏に擁する票數は少なくとも百三十を下るまい、更に板谷氏己人の勢力より生ずる得票を加ふれば、百五十は大丈夫である、左れば他に競争者なきは明白だ、假りに競争者出づるとするも、慘敗を招くは必然だ、選舉は遂に競争者を出さなかつた、宮吉氏の獨り舞臺であつた

競争者なきに周密の陣容、人或は其の無益の手段ならざるやを怪むは理なり、而も是れ有權者を尊重する所以なり一たび立候補を決したる以上、敵なきが故に、候補者とて諸般の努力を盡さざるは、即ち有權者を輕ずるに似たり、戦備を整へざるも勝利を確信して怠るは、即ち有權者に對する侮蔑だ、故に敵なきに却つて多く備ふ、有權者に對する敬意は敵の有無に依りて厚薄あるなし、板谷氏が敵なきに、恰も重圍に陥ると同様の考を以て事に當る、此の美德、此の誠意、此の熱心、是れ板谷氏の板谷氏たる所以である。

而も一面から之を察する、是れ順助氏が普選に對する豫備行動と觀るを得べし、順助氏が政界に志を伸さんとするや久し、而も身邊の事情は捉ふべき機會を逸したり、來るべき普選は、宿昔の志望を達成する好個の機會である、即ち彼は此の好機を捉ふべく躊躇しなかつた、實に彼は天の未だ陰雨せざるに先ち雨具の用意を爲せるなり、是れ豈遠く謀り、深く慮かる者にあらずして、何ぞ策の玆に出るを得ん、順助氏は疑ひもなき大策士だ、若し更に己を空ふし、賢に降るの心を養ひ得たならば、大策士の面

目は猶且つ躍如たるに難からぬだらう。

五四

札幌辯護士會長 法學士 安東 俊明

理想に生きて、理想に死するは、人間の本望である、併し近代の世相は、物質に生きて理想に死してゐる、故に物質萬能の世界を現出する、露骨に言ふと、今の世は、惡の世の中である、理想と物質と戦つて、常に物質が勝つてゐる、理想に活くる人が世に容れられぬは當然である。

辯護士安東俊明君は、肥後熊本の人である、明治三十一年東帝大出の法學士だ、同期生には前内務次官小橋一太の如き同郷人も居り、盛にボタン黨の氣焰を吐いて、四筵を煙に捲いたもんだ、其中學時代には、例の支那革命で、陳勝吳廣の役目を勤めた、宮崎滔天と机を並べて、濁酒を煽つた、何しろ青年時代から、一と風も二と風も

變はつた人物である、恬淡無慾の性格で、物質慾も少なければ、政治慾も少ない、唯至善を樂む、先づ現代には不通の人物だ。

若し彼にして、心を闇にし非違を働いたならば、今日は一廉の財産家として仰ぎ奉られたに相違ない、若し人並勝れて政治慾が發達してゐたならば、遠くの昔に、代議士で幅を利かしたであらう、若し官吏熱が旺盛で、官海遊泳術を體得したならば、少なくとも縣知事の椅子は、容易に占められたであらう、餘りに理想が高遠にて、此等の凡てが没交渉である、故に世俗の所謂名譽は、彼に取りては不名譽であり、恥辱であるのだ、假全身は風塵の裏に埋れても、心は光風霽月を友とする、彼は常に「雲よりも高き處に出て見よ、しばしも月にへだてあるやと」の道歌を高唱して、世を達觀して居る、其の心事を觀破すれば邵堯夫の所謂

心安身自安。身安室自寬。心與身俱安。何事能相干。誰謂一身小。其安若泰山

誰謂一室小。寬如天地間。

大悟徹底せるものに非ずんば、曷ぞ能く斯の如くなるを得ん。

五五

人動もすれば彼を評して、理に偏すと謂ふ、是れ彼が法律屋なるが故であらう、彼は正しく理窟屋である、然も温情湧くが如し、世の所謂冷血漢にあらず、理性の裏に温情を含むと云ふよりも、寧ろ温情の中に理性を含むと云ふが適切であらう、如何なる場合に於ても、理と情との調和を失はない、一たび正を持して怒れば、猛虎の山野に暴れ廻はるが如く、人と接して柔和なること鳩の如し、苟も怒らず、苟も笑はず、苟も喜ばざる處に、彼の眞骨頂を觀る。

人或は彼が變通の才に乏しきを嘆ず、權謀術數固より彼の長ずる處にあらず、而も頓智、頓策は、萬更缺く譯でもない、今の策士常用手段たる、人を詐り、已を欺く、場當り策は、彼が到底採る能はぬ處である、彼に策なしと謂ふ勿れ、乏しきは權略のみ世を濟ひ、民を救ふ、正理に基く考へは、滾々として盡きない。

曾つては札幌憲政會の重鎮として、名智名案の有りつたけをサラゲ出したこともある例ひ政治慾が無いにしても、政治道樂の趣味は、充分に解してゐる、併し、政治道樂の仲間入りしても、高遠の理想は殺さない、故に正道を踏み外つさなかつた、正を踏

んで恐れざるを信條とする彼は、支部の有象無象共を相手に、大義名分を楯に取つて大に論争したこともある、今の政黨は多くの野武士の寄り集りで、札幌憲政支部の面々は、一山百文的の野武士共だ、大政黨の出店としては貫目が甚だ軽い、安東俊明君は、之を大呂よりも重がらしめんと計つて、反つて他の反感を買ふたのである。

憲政支部に横流する一切の情弊を告白するに忍びない、だが徹頭徹尾、玉葱の臭氣を脱せぬ、無學文盲としての博士と呼ばるゝ、一柳仲次郎が支部の采配を揮るに至つて支部の結合が緩み、黨中黨を樹つるに至つた、彼は頗る之を遺憾として、之が匡救改善に全力を注いだもんだ、而し効能がなかつた、獨り一柳黨と稱するものが跋扈するに至り車肆横暴到らざる處なし、一柳の郎黨を以て支部の幹部を固むるに至り、一層甚だしきを加へた、彼は遂に憤然として脱退するに至つた。

普通選舉が實施せらるゝに先だち、最も急務とするは、政治思想の普及である、全國民が政治に理解を有するに至り、始めて普選の意義を完ふし得る、此の見地から札幌辯護士の新人と協戮して、純正選舉同盟會を組織した、時恰も代議士選舉に際し一柳

松田、久保三候補が、盛んに鎬を削づる時で、同盟會の理想とする人物は一人も見出されなかつたが、併し比較的松田が理想に近い人物なので、松田を應援するに至つた即ち理想選舉で、成敗を眼中に置かない、金力萬能の世中にありて、人物選舉の大義が徹底されざるは勿論である、松田は案の如く敗れた。

今や普選案成立して、是より國民的政治の端緒を開かんとするに當り、彼を盟主とする純正選舉同盟會は、大に活動を開始せざるまい、一方政治思想の普及に努むると同時に他方無産者の爲め有力な團體を作らねばなるまい、同盟會が今後の活動、計畫措置に至つては、一に安東君の計策に待たざるを得ない。

蒙古來

賴山陽

筑海颶氣連天黑。蔽海而來者何賊。蒙古來。來自北。東西次第期吞食。

嚇得趙家老寡婦。持此來擬男兒國。相撲太郎膽如甕。防海將士人各力。

蒙古來。吾不怖。吾怖關東令如山。直前斫賊不許顧。倒吾檣。登虜艦。

擒虜將。吾軍噫。可恨東風一驅附大濤。不使羶血盡膏日本刀。」

土木建築業界の權威 菱田多吉

人に運と不運とがあると言ふ、多分仕合せ善き人と、仕合せ悪き人の事を言ふのだらう、人間の行路は、譬へば大海を航走するやうだ、順風に帆揚げて走る、走ること矢の如く、何の障碍にも出會しない、之が仕合せ善き人だ、逆捲く怒濤狂瀾と戦ひ、お負けに暗礁に乗り揚げて、進退茲に谷まる、之が仕合せ悪き人だ、人生の行路はマア如斯ものだ。

玉手箱が如何なるものか、又如何なる貴重品が秘藏されるかは、龍宮の乙姫より外に知るものはあるまい、容易に開けられぬのは、開く途を知らぬからだ、知つても進んで開く勇氣が乏しいからだ、人間が此の世に産れ落ちた以上、人毎に運を開く鍵を與へられてゐる、其の不運を悲むは、詰り開く手段を講じないからだ、開運の鍵が授けられぬなど、悲觀する連中は、進取の勇氣がないからだ、暗礁に乗り揚げたら、乗り卸す手段を講ずる工風を凝らすが宜い、此の智慧と勇氣とさへあれば、乙姫の玉手

箱でも何でも容易に開き得るのである。

世人稍もすれば、少しく社會に頭角を現はすものを捉へて、揚ぐるに「立志傳中の人なり」を以てす、而して牽強附會の事實を製造して飾ざる、眞個立志傳中の人、左様に澤山あるものであるまい、人を買被ぶるにも程がある、立志傳中の人、安賣は、眞平御免蒙らざるを得ない、猫も杓子も、立志傳中の人では、釋迦や孔孟の徒が地下で笑ふぞ。

空拳を揮つて自家の運命を推開する、是れが眞個の立志傳中の人だ、多くの成功者と言はれる人達は、嘘八百の事實を並べて、奮闘努力を誇るけれども、其の實は他人の恵に頼るのだ、他人の推輓に依るのだ、元來無一文の裸一貫から、敲き上げた成功者は、先づ指を吾が菱田多吉君に屈せざるを得ない、勿論彼一人に限らないけれども、最近の成功者中には、其のよく短日月の間に、幾十万の巨富を積むに至つたのは、實に菱田君をイの一番に推さねばならぬ。

彼は「伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ」で有名な伊勢の産だ、鈴鹿峠は天險だ、阿漕が浦は名所だ、淨瑠璃に唄はれて居る、父は米穀商で、近郷切つての素封家だつた、阿兄義民君は、最近まで朝鮮總督府内務部長を勤めて居た、多吉君は四男坊で、小供の時代は負惜み強き、喧嘩大將のキカン坊だつたさうだ。

負嫌の氣風は彼の渾身を支配して居た、而も其の反撥心の強き、決して女々しき負惜みを言はない、喧嘩に負けたなら、更に進んで勝つべき術を研究した、此の意氣と用意が抑も餓鬼大將たる所以である、群童の頭領として、信賴された所以である、天下何人も負好のものはない、併し多くは中途にして意氣が挫ける、遂には他の恵に得るべく餘儀なくされる、吾が多吉君は、徹頭徹尾、負嫌ひの男として、獨立自尊の美なる氣分を長養したので。

獨立自尊是れは容易に遂行されない、餘程意志の鞏固な人にあらずんば能はぬ、次兄は銚々たる官人の位地を占めた、若し多吉君にして初めより、官人となつて一身の榮達を圖らんとせば、之に要する學問は、食傷するほど修得されたのである、學資に窮せぬ彼の家庭よりすれば、中學校次で高等學校、而して大學に入りて、法學士の肩書

を有する、決して難事にあらず、而も彼の意氣は豪壯であつた、役人が何で嬉しい、總理大臣が何で名譽か、と言つた風であつた、三重縣は憲政の神と尊崇される、偉大なる政治家尾崎行雄を産出した、尾崎の理想とする政治家は、パーマアストンであつたやうだが、過去の尾崎は、理想的政治家たり得なかつた、將來とても中々六ヶ敷からんと思はる、少壯時代の多吉君は、多少尾崎の風格に感化された嫌なきにあらず、併し五斗米に膝を屈するが大嫌ひの彼は、政治商賣は愚の極と悟つた。

治國平天下に資すべき筈の學問の相場は、段々下落して、一身の榮達を計かる道具となつた、是ちや學問も考へものだと觀念したる多吉君は、學問に深入りする念を絶つた、而して父兄の助けに依らず、裸一貫、越中禪一枚で、自己の運命を推開せんと試みた、年少時の喧嘩大將、負嫌ひの氣質が、是に至つて愈々益々社會的に發揮されたのだ、如何に彼の武者振りの勇ましかりしかを看よ、至誠一貫天地を動かさずんは己まざるの氣概を示したのである。

北海の地、遺利多し、此の遺利を拾ふには、尋常一様の決心では不可なり、萬人が試

むる努力は是れ即ち尋常一様の努力である、尋常の努力と決心とでは、到底拾利の目的は達成されないのだ、猛熊と組打する底の決心を固めて事に當つて初めて成功の緒に就くと悟つた。

多吉君の渡道は、今を距る二十四五年前と記憶する、先づ天囃の苦前に草鞋を脱いで運命推開の機會を覗ふた、當時土地熱が流行の折、誰も彼もが土地に指を染むるを觀て、夫子自からも、土地喰ひの仲間入りして、若干地の拂下げを受けた、斯くて首尾悪く百姓になり終はしたのであるが、元來農業は素志にあらず、空々寂々の間に四五年を経過し、遂に心機一轉して土工の群に投じた、是れが抑も多吉君が成功の門出であつたことは、其の當時にあつたことは、恐らく彼自身と雖も、豫想しなかつたことであらう。

明治四十三年頃、土工界に於ける井田菊藏の名聲は隆々たるものであつた、井田は實に土方人足の親分株である、工事の下請を爲して居たので、多吉君は其の帳場に住み込んだ、喧嘩大將の氣質は、土工夫を御するに、是れ屈強の資格だ、特に算筆に秀で

計畫に長ず、彼が井田に信任せられしは當然だ、轉じて彼が淺野次郎右衛門の配下として、札幌水電工事を完成したるは、如何に彼が土工に關する智識と、部下統御の才幹が勝れたるかを立證する、其の後荒井組の配下となり、益々彼が非凡の才機を發揮し、土工界に菱田多吉ありと敬重されるに至つたのである。

彼が今日まで關係したる、重なる工事を舉ぐれば、道廳土地改良工事、留萌町營土木工事、留萌築港工事、和寒灌漑工事、沼苗線第六區鐵道敷設工事（漁鐵橋は全線中の最長のものに屬す）鐵道局室蘭線砂利工事等にして、總工事費約三百万圓に達す、土工に足を投じてより二十年、一介の土工夫に身を起して、三百万圓の工事を完成して人物と手腕とを認められ、今や群少請負業者を抽いて、鐵道省所屬の建設請負人たるの名譽を荷ふ、負けぬ氣質の彼に取りては、固より豫期の成功と謂はざるを得ない。彼や知遇に酬ふるの念特に深く、常に燃ゆるが如き同情を溶す、他の咽元過ぐれば熱さを忘るゝ的の輕薄男子に似ず、其の義堅ふして信厚き一事に至りては、實に士人の鑑と爲すに足る、曾つて恩人の井田菊藏、不幸事志ざしと違ひ、今や零丁孤苦の境地

に悩む、多吉君即ち勞はり扶け、其の情親子の如し、義ありて勇、勇ありて仁、努めて施すを好む、舉世輕薄の中に吾が菱田多吉君の如きは、蓋し稀なり、道樂は書畫骨董、固より閑中の餘嗜に過ぎず。

北門貯蓄銀行專務取締役 小竹文次郎

人間には平凡と超凡との差別がある、斯の差別で能く人間社會が調和されて居る、若し愚人ばかりならば、納まりがつかない如く、賢人ばかりでも亦納まりがつかない、恰も電氣に陰陽の別ありて始めて用が足りると同様だ、人間も賢愚をチャンボンに攪き混ぜて社會が維持されるものと信じて居る、故に愚人必ずしも悲むに足らず、賢人必ずしも誇るに足りないと思ふ。

古來大政治家大實業たる榮冠を戴くものでも、別に生れながらにして、大政治家たり

大實業家たる素質を備へたものであるまい、先天的に政治家だ、實業家だと謂ふのは成つてから附けた名稱だ、詰り普通の能力を有し、普通の體格を有し、一人前の教育を受けたものなれば、中途に蹉跌せず精勵刻苦を積みさへすれば、頭角を現はすに足るのだ、天分に安じ自己の職務に忠實でさへあれば、結局鯉の瀧登りが出来ること云ふものだ。

覇氣満々たる人物が成功を急ぐと、職務が疎忽になり、其處で躓づきが来る、支那の歴史を緋くと、秦の總理大臣邵平と云ふ男が、一朝失脚して瓜作の百姓となつて、遂に天下一品の瓜を作り出した、總理大臣として天分に安じた邵平は、瓜作りとなつても天分に安じた、急激なる境遇の轉換ではあるか、其の好む處に適從するは、人間處世の第一義であらねばならぬ。

勤勉力行、是れは成功の秘訣のやうだ、徒らに空想に耽けつて實行を缺く、誇大妄想狂に陥らざるを得ない、其の結果が高等遊民と稱する、人間の穀潰しが出来る、高等民ほど國家の厄介物はない、社會に害毒を流すのは、臥て食ふ主義の動物だ、見渡

す處、社會には此種の動物が多い、だから世の中が益々物騒となるのだ、若し彼等に於て、勤儉力行の權化とも云はれる、吾が小竹文次郎の瓜の垢でも煎じて吞めば、人間並には蘇がへり得るだらう。

吾が小竹文次郎は二度と行くまい丹後の宮津、縞の財布が空となると俗謡にも唄はれる宮津の産である、明治十五年十一月を以て生る、幼少の時分から謹直を以て稱せられた、特に非常の勉強家で學業もメキ／＼と上達し、文次郎の名、郷徒を壓するに至つた。

己れを知るものは、己れに若しくはなし、稍々長ずるに及んで、將來社會に立つ方針を定めねばならぬ、今でこそ銀行家として重を置かれて居るが、功名心に驅られる少壯時代には、或は廟堂の大臣を夢みたくも知れぬ、併し是は一時の出來心に過なかつた、半夜人定る時、沈思熟慮すれば、彼の温厚篤實なる性格は、政治家たるに適しないを悟つた、彼の現代政治家の通有性たる、權謀術數の如き、其の最も嫌忌する處である、是に於て彼は實業家たらんと決意したので。

彼は志を立て早稻田大學に學んだ、彼が熱心なる大隈崇拜の結果でもあらうが、眞面目に學ぶ處は早稻田大學に限ると信じたからであらう、明治三十八年七月に政治經濟科を卒業して、直に名古屋市の明治銀行に入つた、彼が將來銀行家たるべき素地は、此處に於て作られたのである。

預金を掻き集めて金の番兵を爲すことは、誰れでも出来る、單に金の番人ならば、人間でなくとも安全なる金庫で澤山だ、併し銀行は死金の番兵でない、死金を活かす處だ、金融殺活の權を握る處なることは、三歳の童子も知つて居る、死金を活用する處に銀行の妙味が存する、有体に言ふと銀行商賣ほど興味津々たるものはない。

活人にして始めて資金を活用し、世を益し人を利することが出来る、吾が文次郎は財政經濟學を専攻したるだけありて、資金の運用を誤らざる處に敏手腕を見る、彼は明治四十年九月北海道拓殖銀行に入り、爲替課長の重位を占めて手腕を揮つた、次で拓殖貯金銀行常務取締役に移じ、今現に北門貯蓄銀行専務取締役として、札幌金融界に貢献しつゝあり、其の一たび札幌市會議員たりしも、是れ固より環境の事情己を得ざるに出でしもの、彼の眞價を是非するに足りない。

廉潔は何人にも必要であるが、金錢を宰領する者に、其の最も必要を認むる、賄賂苞苴に依りて、貸出に手心を爲す銀行屋は多いやうだ、銀行員が腐敗して蛆虫を生じ、幾多の非違行はれ、行務紊亂の事實は、眼前に見せつけらる醜態だ、他の好物とする珍品の贈賄は、彼の最も憎惡嫌忌する處で、偶々珍品を贈りて彼の清廉を汚かさうとするや、諄々として其の不心得を訓誨して倦まず、若し不在中に遺贈すれば、鄭寧反覆した書面を添へ、珍品を逆送して残さず、故に他も彼の高潔な心事に恥ぢて再びしないと云ふ、近來稀に見る清潔の士である、記者は銀行家として、文次郎君の前途を祝福して已まぬ。

北門貯蓄銀行は、新に大富豪一億の資産家板谷吉君を頭取に仰ぎ、千万長者の藪惣七君を取締役に据へた、共に無限責任を有す、故に北門貯蓄銀行は、兩家の存在する限り、基礎磐石なりと謂はざるを得ず、凡そ銀行業者の時に困むは、資金の欠乏である、北門貯蓄は如何なる場合に於ても、綽々として餘裕あり、天下若し基礎確實な

る銀行を探めなば、北門貯蓄は即ち其の一である、唯一と言ひ得ざるまでも、重なる一である、凡ての預金者は、晏意して預金し得られ、取引者亦安心して取引し得られる、特に謹嚴實直なる小竹君を専務取締役に戴く、北門貯蓄の異常の發展、固より期して待つべきである。

政治家としての 村田不二三

廣く全道に涉つて、辯論の雄を探めば、先づ指を高野精一君と村田不二三君に屈せざるを得ない、共に日下開山の横綱格である、札幌辯論界に兩雄の向を張るの雄辯なきを悲む、若し兩雄を帝國議會に送つたならば、必ずやフォックス流の雄辯を揮つて、議場を風靡すべきを疑はない、是れ吾が札幌の誇りと推賞せざるを得ない。辯論の辛刻なる点は、兩君相似たり、三寸の舌頭劍花を吐き、敵を威服せずんば己ま

ず、其の風調は故人の陸奥刺刀大臣に似たり、現代に於ては犬養毅式である、敵の止めを刺すまで辯ずる、此の點は老巧の中西六三郎君の、遠く及ばざる所である、中西君のも辛辣である、匕首を敵の咽喉に擬するも、決して刺ない、常に十分の二位の餘地を存する、兩君に至つては、單刀直入、深く刺して抉ぐり殺すが常である。

村田も高野も、常に辯論に同形同型であるのみならず、策略に於ても同様である、快辯を揮つて人を煙に卷く手段は巧妙である、若し兵略家としたならば、孫吳である、もし説客としたならば、蘇張である、もし策士としたならば、一は岡崎邦輔、他は安達謙藏だ、もし夫婦に見立てたら、比翼塚の土人公、白井權八小紫だらう、兎も角も兩雄相互して下らない、政治家として東西に別れ、札幌政界の寂漠を破る處に妙趣味湧く。

村田君は薄倖の人である、家貧ふして學資に窮した、併し飽まで意地張りの強い彼は貧乏に負けない、貧乏とは只金の無いを謂ふ、金は腕により掛くれば何程でも得られる、貧乏何かあらんと、青雲の志を懷いて上京した、郷黨彼の志を壯なりとして、村

はづれまで送つた。

江戸は八百八町の大廣場、今でこそ膨脹して、何千町と數へられるが、村田君が上京當時は、千町まではなかつた筈、郷黨から神童と持てはやされた村田君も、正に迷子となり終はす處であつた、漸やく迎りにたどつて落着いた所は二松學舎だ。

二松學舎は三島中洲の家塾である、三島は我國に於ける漢學の泰斗と仰がる、人、漢學を借りて、國家有用の財を養成する所で、子曰くの文字を教ふるのみが本旨でない其の精神は吉田松蔭の松下義塾と同様であるが、教育の方針は大に異つてゐる、松蔭の志は天下國家にあり、故に當初から天下を一呑にし兼ね問敷き、國士を養成するを目的とした、群童に隗たるは、天下に隗たるの始めなりと、盛に英氣を塾生に注入したもんだ、三島の教育は實直で悲歌慷慨の士を養成するが本旨でなかつた、吉田の松下義塾と稍質を同ふしたるは、徳富蘇峰の大江義塾位のもんだつたらう。

二松學舎から、才人傑物が出て居る、社會の各方面に、樞要の位地を占むる者、枚舉に違あらず、村田不二三君は、二松學舎に入りて、漢學の智識を養ふた、讀書百遍、

羣編三たび斷つ位に勉強したるは、史記である、戰國策である、詩經である、孫吳の兵書である、唐宋八大家である、之が本業で、餘業としては、水滸傳、杜甫詩集であるさうだ、斯くて漢學の素養は充分に養はれた、文も能し、詩亦能くすれども、容易に作綴せぬ、是れ能はざるにあらず、爲さるなりである、境遇は彼をして、文人詩客たるを許さないのだ。

學成りて神奈川縣小學校の先生となつた、今で言ふ代用教員だ、是れ學資を作りて、更に新しい智識を研かん爲である、恰も清浦奎吾が、月給四圓取りの、埼玉縣寺小星の先生に甘じたると同様である、青雲の志を抱ける村田君は、代用教員に屈託するを潔としない、教鞭を執りしはホンの束かの間、一たび郷里に歸つて學資を才覺し、再び上京して法學院に入りて法律を修めた、神童は何處までも神童だ、秀才は何處までも秀才だ、而も身を持する嚴肅、吉原に浮かれて浩然の氣を養はず、一心不亂の勉強法學の蘊奥を極め、優等で卒業して、代言人となつた、時恰も明治二十五年、松方内閣で、例の一本調子の品川内務大臣が、盛に選舉干涉の魔手を擴げて、政府黨製造に

餘念なき節だつたと承知する、官權を悪用して、人權を蹂躪して顧みない、亂暴狼籍が、痛く小癢に障はつて遂に役人たるの希望を抛ち、一身を代言人に捧げ、人權擁護の爲に戦ふ意志を固めた、是れ村田君が先輩の官吏推輓を辭して、代言人となりし動機であると信ずる。

若し札幌辯護士中に於て、先輩を求むれば、即ち吾が村田不二三君を推さざるを得ない、彼は實に札幌辯護士の先輩である、彼が先輩と仰ぐ中西六三郎君は、却つて彼の後輩だ、其の辯護士界に重望を負ふ、所以なしとせず。

今の政治家を大觀すると、驥足を政界に伸ぶる者の多くは、金の恩恵を蒙つてゐる、如何に才人傑物でも、之なきが故に、人後に落ちざるを得ない、實力に伴ふに金、之あらば實に鬼に鐵棒である、是に於て金に無頓着の村田君も、決して金に淡泊なる能はず、資産を造つて今日の位地を築いたのだ、手も八丁口も八丁、而して必要な活動資金を豊かに積むに於て、村田君は好き機會を觀て、駈足でザブンと政海に飛込んだのである、古池に蛙飛び込む水の音がした。

村田君が飛込だ古池は、政友會である、札幌政友派の頭目は中西六三郎君を推さざるを得ない、辯護士の閱歴から云へば、中西君は後輩であるが、政治海に於て、中西君は一日の長ある先輩である、村田は中西に兄事した、併し村田の希望は高大である、抱懐せる思想は決して中西に譲らない、或は超越するかも知れぬ、而も先輩と兄事する處に、村田君の瀟洒たる襟懷が偲ばるゝ。

村田君の遺口は、能く陸奥宗光に肖て居る、明治維新當時は、伊藤や井上等同僚であつた陸奥が、西南役の側杖を喰つて暫らく閑日月を獄窓に送り、一旦赦されて英國に渡り、死んだ加藤高明を通譯として、議院制度を研究し、歸朝した時は既に伊藤も井上も、明治政府の大立物として、飛ぶ鳥を落すの勢だ、陸奥は遂に彼等の下風に立たざるを得なかつた、併も甘じて下風に立ち、哀訴嘆願して外務省の政務局長の椅子に有ついた、苟も將來に大志を抱く、此の位の我慢が出来なくて何とする、村田が中西に於ける、矢張り同様だ、村田は巧に中西を利用したのだ、若し中西が村田を子分視するならば、其の鈍眼にして、英雄の心事を洞破する能はぬ大馬鹿者だ。

禁行調査を嚴密に行へば、其好色の點に一致す、寔に好一對である、中西は表面君子人の如く見ゆるも、決して道德堅固ではない、彼を君子人視するは、抑も買被ぶりである、一例を擧ぐると、小樽には妾を蓄へ、子寶を儲けてゐる、君子と蓄妾、當節の流行かも知れぬが、中西が研究した道德の書物には、何處にも見當らない、村田も劣らぬ斯道の勇者であるが、先輩の中西から教はつた譯でない、同輩同格で、偶々手練手管を異にするまでだ、是等は大事の前の小事、深く追及するにたらぬ。

政治家たるの資格を備へた村田君は、意を決して政海に乗り出した、其の皮切りは道會議員である、道會は言はゞ、代議士の踏臺で、所謂豫備門といつたやうな譯だ、今日代議士の肩書を辱ふせる連中の多くは、一度この關門を潜つてゐる、村田君は現に豫備門に頭を突込んでゐる、而して道會議員としての雄辯、議長としての手腕は世間既に定評あり、記者が蛇足を添ふるに及ばぬ。

村田君は道會議員の魁である、道會の音頭取の讃辭を捧げて然るべき人物だ、人或は異議を唱ふるかも知らぬが、其は唱ふる者の偏見である、記者は眞に斯く信じてゐる

何人も公平の見を持つる者は、悉く吾人と同意見だと思ふ、實に道會議員中村田君の右に出づる俊秀は、之なかるべしとは、獨り記者の巧言飾辭であるまい。

村田ほどの人物を、帝國議會に逸するは甚だ惜しい、本道の爲に不利益なるは勿論である、村田君としても席を衆議院に有せざるを残念がるに相違ない、二たび代議士の候補を争つて二たび敗れた、併し其の敗戦は恥辱にあらずして名譽である、有権者の政治思想低級にして、候補者の人物を識別するの明なく、黄金萬能の選舉界に於て、理想一點張り、人氣の揚がらざるは當然だ、負くるも亦當然である、要するに村田君の敗戦は、理想の選舉民に容れられざるが爲めだ、人物が容れられぬのでない、もし村田君にして、黄金の魔力を借用したならば、勝つのは極まつてゐる、斯の如くして月桂冠を載くよりも、屑よく敗軍の將なりと冷笑せられた方が理想に協つてゐる。普通選舉が行はるれば、茲に村田君の理想が實現し得る、智識の分量は、無産階級に多い、従つて村田君を理解する有権者は、無産階級に多いのは勿論だ、失意の村田君は、愈々得意となつた、無産者は何うしても、村田君を帝國議會に送るべく、意氣込

んでゐる、人物選舉は今度こそは行はれる、記者は村田君の自重を促して己まぬ、若夫れ黨人としての批評に至つては、他日改めて春秋の筆鋒を揮はん。

大正十四年の通常道會に於て、皇孫殿下御誕生のため、賀表、賀牋を奉るべく、五名の起草委員を擧げた、吾が村田君之が委員長として、出來上がったのが左の二章。

賀 表

北海道會議長臣秋山常吉

誠歡誠喜頓首頓首謹みて白す伏して惟るに

天皇陛下澤哲欽明乃ち聖嚮に好述を選ひて

儲宮に配し吉日を卜して關雎の鴻典を擧げさせられ上は以て

宗廟に事へ下は以て後世に繼くの大本を明章したまへり今や螽斯祥を呈し

皇孫降誕の慶あらせらる吉瑞累仍休徵荐至四海僉な謳歌し億兆齊しく抃舞す臣等寔

に踊躍歡忻の至に任ふる無し伏して寶祚の無疆を禱り併せて

皇室の隆昌を頌し謹みて奉表稱賀す臣常吉誠歡誠喜頓首頓首

賀 牋

北海道會議長臣秋山常吉

誠歡誠喜頓首頓首謹みて白す伏して惟るに

皇太子殿下聰明天縱仁孝の徳は夙に宮禁に著はれ

元良の譽は遍く寰宇に布く嚮に好述を迎へて關雎の鴻典を擧げさせられ敬慎重正

陰陽徳を合せ承祚繼後の大本を明章したまへり今や螽斯祥を呈し

皇孫降誕の慶あらせらる吉瑞累仍休徵荐至四海僉な謳歌し億兆齊しく抃舞す臣等寔

に踊躍歡忻の至に任ふる無し伏して

臺壽の萬斯を禱り併せて

皇室の隆昌を頌し謹みて奉牋稱賀す臣常吉誠歡誠喜頓首頓首

大正十四年 月 日

寔に古格の文字であるから、著者は左の批評を試みた。

村田不二三君の漢學の素養は豫て耳にする處であつたが今回皇孫殿下御誕生を賀する道會の表牋文を読んで愈々其の深淵に驚がされた。

委員は五名であるが村田君以外の人々は失敬ながら意味が判かるか字義が解せるかと疑はれる、右起草は勿論村田君一人の力である。

熟字は凡て「詩經」から出て居る、詩經の文字を集めて熟字にしたものだ、即ち關々たる唯鳩を縮めて「關唯」が出来た。

「好述」は窈窕たる淑女は君子の好述だ、「螽斯」とは螽斯羽詵々兮宜爾子孫振々兮から出て居る。

螽斯は「はたおり虫」で一回に九十九匹も産むと云ふのだ、詰り子寶の多いことだ。

村田君ほどの漢學者は、自慢ぢやないが道會中恐らく一人もあるまい、村田君が齋戒沐浴しての案文三嘆に値する。

漢字制限などが流行して子の曰はくの四角文字は成べく角の少ない程珍重されて來た今日、詩經の文字を目にするは、漢學復興論者には百萬の味方を得たる如き思

ひしやう。

漢文學の大家であつた、三島中洲の秘藏弟子だけあつて、村田君の文字は當世の珍とする處であらねばならぬ。

然るに此の短評が痛く癢に障つたものと見へ、直に左の苦情を著者に申込まれた。

記者足下、今朝（大正十四年十二月九日）の貴紙上にて賀表及賀牋の起草を小生の手になるものとして、小生が漢學の素養に富む、天晴れ文藻家なるが如くに、過賞せられ、朝つばらから、冷汗三斗背を浹すを覺へ申候。

小生は往年、道會の討論に於て、某議員より「渠は法律上の智識は、多少あるかも知れぬが如何せん、漢籍の素養に乏しき故に、末節に屑々たるは、甚だ憐れむべきなり」とやりつけられ、如何にも御尤なりと首肯したる次第なり、最も嘗て二松學舎に遊び、三島中洲先生の教を受けたることなきに非ざるも、それも十四歳より十七歳までの間にて、只うかくと其日を暮したるに過ぎず、今以て當時もう少し身を入れて居たならばと悔恨致居る次第に御座候。

賀表賀牋は道會にて、常に御願する某大家の筆に成るものにて、小生は御恥しながら、朗讀の際は振假名を便りに、辛つと通りつけたるに過ぎず。

勿論足下にも、其邊の事情は千万御存知の上にて、御からかひの事とは拜察するも左りとは餘り罪な仕打と御恨み申上候、正直な知らぬ人は、本當と思ひ夫れが爲めに何かの機會に飛んだ恥をかくに至ることを恐れ、暗から闇の恥を、明るみに出して一言致置候 早々

村 田 生

此の苦情を受けて著者は甚だ當惑した、元來村田君に對して惡意を有せず、直感したことを直筆したに過ぎない記者は、實に意外の感に打たれずに居られなかつた、依つて早速左の通りお詫びした。

餘計な言を申立て、村田君疝氣の筋に觸れたことを恐縮する、彼の文は道會にて常に御願する某大家の筆に成るもののお仰を承り、初めて堂々たる北海道會に御抱へ記者の存在することを承知した、然し其れは詐りでムらう、謙遜の餘りに左様な

事をお仰るのでムざらう、假りに御用記者ありて一二凝り過ぎた字句に修正を施した處で、其れは文字の修正で文其もの、結構は、矢張り漢學に素養深かき村田君の頭から割出されたのであらう、村田君が師事せる三嶋中洲先生は漢文學の大家で、特に得意なのは詩經と論語であつたと承知する、其人の弟子たる村田君が、詩經などは知らぬ存せぬとは言はさぬ、既に知りとしたならば、詩經から熟字を引張り出すことは、敢て他人の手を煩はすまでもないことだ、尙朗讀の際振假名を便りにしたなど、如何にも無學らしい申開き、其の手を喰ふほど、薄ボンヤリの記者ではムらぬ、しち難解しい「文選」がスラ／＼と讀め、「楚辭」を愛翫せられる村田君が、振假名便る理由がないからです、正直な知らぬ人は本當と思ひますよ、現にだ君が今回持込まれた苦情文に、冷汗三斗背を浹すの「浹」の字は漢學に素養なきもの、絶對に使へるものでない、唐宋八家の統領株韓退之は（人吏浹和）など、浹の字を好んで使つて居る、村田君は漢學の素養なしと謙遜されるが、記者は素養あるを信じて疑はない、而も君は飽まで素養なしと白ばれるを、特の外御怨すると同時に、世

の無學者が有學者を銜ふに似ず、有學者たる村田君が、無學者の看板を掲げやうとする心事の奥床しさに敬服を禁じ得ない、先づは苦情に對する釋明、荒々ザツト斯の通り、早々

村田君が漢學の素養なしなど白ばくれるれば、白ばくれるほど漢學の素養深きことを證據立つると言ふもんだ、問ふに落ちず語るに落つるとは此の謂乎。

土木建築界の新鋭 伊藤鐵三郎

蛇は寸にして人を呑むの氣概を有する、凡て有爲の人物は少壯にして、風變はりの處がある、梅檀は嫩より芳ばしと謂ふに詐りない、吾が伊藤鐵三郎君の如き、即ち是れ。才氣煥發、彼が少年時代より今日までを通じて、彼の才氣は事毎に煥發した、彼が非凡の才物たるは、人の宣傳を待つまでもなく、自然に顯揚されたのは、宛かも錐の囊

中にあると同じ意味合で、何時かは自然に穎脫せざるを得ない。

彼は秋田縣川邊郡牛島の産だ、父は有名なる銅鐵商にして、其の名は遠近に響いて居た、伊藤の銅鐵と云へば、誰知らぬ者なき程である、彼は其の三男に生れた、銅鐵商は寔に堅い商賣である、米穀商賣の如く、相場に著しい變動がないから、餘り儲からぬにした處で、又太いした損耗を招く虞もない、先づ安然な商賣と言つて可い、彼は十八歳まで父の業を手傳つて居たが、何を言ふても、此の儲の少ない、安然な商賣が意に満たない、霸氣満々たる彼の性格としては、運を天に任かせて太く短かく遣つて除くる商賣が適して居たのだ。

我國で土木建築請負業界の權威である、栗原源藏は秋田の人で、鐵道の大工事は大抵彼の手になつてゐる、直接彼の手を下さるまでも、彼の庇蔭に依りて行はれる、特に社會公共事業には何呉れとなく義捐を惜まない處から、秋田の人々は栗原源藏を殆んど、神さまと崇がめてゐる位だ、左れば伊藤鐵三郎君は栗原の風を聞いて起ち、土木建築請負業者として名をなさんと欲する、信念を固めたと信ずる。

斯様に決心して見ると、一日も父の手許にあるが嫌となつた、土木業者として身を立つるには、北海道が宜からう、幸なことには、阿兄源吉が北海に於て、土木請負業を營んでゐるから、兄の許に走つて斯業の洗禮を受けやうと、本道に渡つたのが明治二十六年の頃だつた。

土木建築請負業は、輕易な仕事のやうだが、其の實は中々面倒だ、まづ人心を收攬するに足る器量人にあらざれば不可なり、上品の言葉で言へば、將に將たる機略大勇の人たるを要する、部下を心腹さするに足る人物でなければならぬ、心腹させる、之が頗る六ヶ敷、人を使ふは寛なるべからず、嚴なるべからず、其の寛嚴宜しきを得る處に妙味が存する、世には面従腹背のズルイ人間が多い、特に土方人足に於て然り、此等を驅りて手足の如く使役し、親方のためには水火を辭しないと云ふ氣風を養ふて、始めて請負業の資格を完ふし得られる。

土木建築請負業者の成功したる者を視るに、孰れも將に將たる資質を備ふ、關東請負業者の牛耳を握る河台徳三郎の如き、栗原源藏の如き、本多治三郎の如き、荒井初一

の如き、伊藤龜太郎の如き、川村音吉の如き、堀内廉一の如き、地崎宇三郎の如き、皆然りである、要するに請負業者は、腕節の強いばかりが能でない、腕節は弱くとも可なり、徳を樹つること極めて肝要である、彼等成功者は皆徳を樹てゝゐる、勿論大小の差は免かれないが、一たび徳を失ふては、請負業者として起つ能はざるは必然である。

伊藤鐵三郎君は阿兄の許にありて、一と通り請負業の呼吸を呑込んだ、更に才智を磨くため、川村組に入つた、居ること十ヶ年研鑽の功を積んだ、今は一本立ちになつても差支へないまでに腕を研いた、即ち川村組と云ふ請負學校に入りて、請負學を修了したのだ、其處で大正二年の師走中に、辭して獨立の業務を開いた、從來請負業者としての進境見るべく、業務の發展將に先進の壘を摩せんとするに至つた。

己れを推して人に及ぼす、又己れを空ふして部下を愛撫養護するの念轉た切なるものあり、是れ鐵三郎君の特長である、美德である、世の請負業者仲間には、よく己れを充實して部下を空虚にする、部下を殺して吾れ獨り活んと試むる者あるを耳にす、斯

の如き不人情不徳義、は鐵三郎君の唾棄する處である、彼の事業が益々進展するの眞因は此處にあるのだ、此の心を推擴して、社會万般の事業に及ぼす、遂には天下無敵たるを得ん、想ふに彼の前途洋々たり、更に進んで徳を樹つるを忘るべからず。

萬澤診療所 醫學博士 萬澤 晋

「醫は仁術なり」は、醫師の職務に對する定義と謂つて然るべし、凡そ人間に貴ぶものは「生命」の外にあるまい、一切萬事「生命」あつての物種子だ、何事をも之に依りて解決せられる、活動するやうに拵へてある人間が、病のため活動力を滅殺し、若くは全滅せしむることは、天に對して恐れあり、醫は此の大切な人間の生命を司る役目、生命の次に大切なものは醫師と云ふことになる、故に仁術は天下に敵なし、不仁なれば倒れる、彼の仁政と稱するは、詰り醫師の領域より流れ出づる仁術の作用に過ぎない

然るに、今日醫師の多くは、仁術を賣物にする嫌がある、金に依りて仁を施す、大切な生命が金に依りて左右せられる、人道より達觀して、斯んな不都合な話はない、藥九層倍は昔の事、今日は幾十層倍を貪るか判からぬ、若し世に高利を貪むものは、所謂高利貸なりとせば、醫師は即ち高利取りである。

醫師を異名して「杏林」と呼ぶ、神仙傳を案ずるに、董奉山に居り、田に種へず、日々人の爲に病を治め、錢を取らず、重病癒ゆる者は、杏五株を植へしめ、輕き者は一株斯すること數年にして數万株を得、鬱然林を成せりと、醫者のことをば杏林と呼ぶのは之から始まつてゐる、醫者は決して錢に眩惑するものでない、處が今日の醫者は多く金に眩す、故に貧乏人の生命は、粗末に取り扱はれてゐる粗末尙可なり、赤貧者に至りては粗末にすら取扱はれざる悲あり、是決して醫者の本旨であるまい。

萬澤博士は普通の醫者でない、其の志は天下を醫せんとするに存する、蓋し大政治家と爲つて政弊を革め、仁政を布かうとする意味でない、天下の大醫が治療の術に窮せる難病でも、病根を窮めて治療を施し、天下一人として不治の病に斃れしめないと言

ふにあり、即ち其の志や天下の治療であらう、博士は性極めて淡泊である、何等物質に執念なし、醫師本來の仁術を事實に示してゐる、病人の苦痛を除いて樂む、是れが一の道樂である、天下物質慾に迷ふもの、到處に累々たるに當り、獨り吾が萬澤博士の清風に嘯くあり、其の操志や實に名醫の名醫、大醫の大醫たるを失はぬ。

名醫と藪醫との岐るゝ處は、よく病の由つて起る原を診して誤ると誤らぬ、二途に外ならぬ、投藥の如きは、日本藥局法に明示してある、藥店に馳れば直に購ひ得べし、別に難かしいことはない、只其の病原を窮むることが難かしいのだ、裁判官が誤判の結果人命を損せんとすが如く、名醫と雖も亦誤診を免かれぬ、堂々たる病院にも幾多の實例がある、誤診の結果人命を縮むるから人殺醫師の惡評が生ずる、元來病名を確斷し兼ねる病氣になると、醫師は首をひねつて、毒にも藥にもならぬ、無駄な投藥を試みて経過を見るが普通だ、其れ程の難病であるから、二三日の経過を察する間に、病勢昂進して大切な生命を棒に振らねばならぬ、場合か往々ある、之は藪醫の常である、世には名醫と稱する藪醫の多きを悲む、眞正の名醫は瞬間にして、病源を窮め能

ふ、吾が萬澤博士の如き即ち是れである。

例を遠くに求むるに及ばぬ、本文の記者が好例だ、記者は平生「人間は壽命に死するも病氣に死せず」と云ふことを信ずる一人だ、愈々此の信念を固ふする試験に供された、寔に難有からぬ試験に遭はされたもんだ、三年以前、記者は風邪に冒された、苛めの風邪と輕蔑して素人療法で退治しやうと努めた、發熱して苦吟する時に、口悪るき友人が訪れ来て、「風を引くなんて、マダク、人間らしい處がある」と罵倒した、之が特別に癢に障つたから、成るべく醫師の厄介になるまいと瘦我慢を張つて、素人療法に腐心したが、一夜にして四十一度の高熱に進み、一上一下、其が三日も繼續して身体に疲勞を感じて來た、今は瘦我慢の角を折つて、某名醫の御厄介になつた、名醫先生首をひねり始めた、其れは病原が判らぬからであらう、例に因りて好い加減の藥を投じて試験された、三日を経過しても診斷が付き兼ねると仰しやる、幾分か人間を玩具にすると云ふ考へも起らぬでもなかつたが、又一面からは名醫を手古摺らすほどの難病を製造したことを思ふて、己を得ず獨り慰むる外はなかつた、餘り診斷がつか

ぬので、若しや不覺を取つて大往生を遂げては、先祖に對して申譯けない氣が起り、更に他醫に診察を請ふたが、矢張り不得要領、熱に浮され夢幻の間に現はれたのが萬澤博士だ、ハハ！此處だな、病氣に死せずと云ふのは……と悟つた、直に博士を招じて診察を請ふた、數日來の熱度の昂低を熟察し、未だ診察もしないで、即座に急性肺炎なりと診断は下された、マゴク／＼すると正に生命に別條ある處であつたと、言ひ聞かされたときには、全身が冷やりとした、其れは急性肺炎は手遅れすると、九分九厘までは助からぬことを承知し、現に記者の知人は、此の厄介病で將根倒しに往生してゐるからだ、博士はまづ一本の注射を施した、隔日に八回の注射を受けて、急性肺炎君は全く退治し終はした、是に於て萬澤注射の卓効を翫味した。

萬澤博士の注射に依りて、危なき一命を取り留めた、今日世にも人にも憚らぬ悪口を吐き得るのは、一に博士のお蔭なり、再生の恩人なりと心に感謝してゐる、故に若し人あり記者の筆鋒の峻烈に故障を持込み來たる節には記者は常に其の苦情は萬澤博士に持込んでくれと逃げたもんだ、餘り世間の口が煩さいので、己むなく「萬澤博士

を怨むの記」を作つた、要に曰く

復、持病の「悪口」と云ふ奴が起つた、見るもの聞くもの癩の種子ならざるはなし、癩が崇うじて、悪口となり、悪口が崇うじて、惡筆に化けて出る、萬澤博士をお怨みする外あるまい。

自分の悪口に、自分ながら呆れることもある、其れは自分の悪口が進歩せぬことを呆れるのだ、其の進歩せぬ悪口が、人様に崇るとあつては、尙更に悪口の勉強をしなければならぬ、徹底的に悪口を吐いて、吐いて吐きまくつて癩飲を下くるやうにならなければならぬ、暴ばれる場所が狭ければ、廣場に飛び出して腹一杯暴ばれるまでだ。悪口が利益か利益でないかを天秤で量ることは御免蒙る、腫れものと何とやらは、場所をお構ひなしに吹き出ると同じく、持病の悪口も時と場所を嫌はず不時に起る、利害得失など考へる暇がない、之が持病の性質だ、萬澤博士のお蔭で、死ぬ命が助かつて、持病の悪口も活き返つたことをおうらみする。

去年の夏の煩ひに、寧ろ死んで終うたら、斯うした迷惑はかけないものを……、三勝

半七酒屋の段で、お馴じみのおそのが、僕のため申開きをする、成程な、去年の病氣を萬澤博士が癒してさへくれなければ、吐きたくも吐けない、併し地獄では相變らず吐くかも知れぬ。

命を助けてもらつて、僕は決しておうらみするやうな馬鹿でない、だが世間の或人間共は左様に思ふのです、僕は人並に悪口をつき得るに至つた事を感謝するのです。

口は禍の門とすれば、筆も矢張り禍の劍である、會つて札幌毎日新聞紙に載せた、某々勢力家等に關する、東京仕入れの赤ソンの手土産と、某勢力家愛妾の出産事件につきのつびきならぬ人から、取消の命令的に似た注文を受けた其時、事實は取消の義務なしと主張した文句中に、

舞文曲筆は余の絶対に潔とせざる所、只事實を根據として、少しばかり文句を並ぶるに過ぎず、若し事實を事實とせず、又は事實の發表を迷惑がつて取消を申込されても事實が誤れる點を證明されざる以上、余は取消の義務を負ふ能はぬ。

何某が秘藏の子を擧げられると言ふのは、實に芽出度事である、其の嫡出と庶出とは

問を要しない。之が爲め家庭を破壊すると云ふのは、實に聞へぬ言分である、何故に芽出度事が家庭を破壊するかの理由を質したい。

一步を譲つて、秘藏の子を設けることが、家庭破壊の動機となるならば、是は養田鐵山と稱する、無遠慮の男にあらずして、何某其の人であらう、何某が自家の家庭破壊に要する、秘藏の子と云ふ爆烈彈を製造しさいしななければ、家庭に何の風波も起るまい。

秘藏の子は、決して虚構の事實でない、事實もあれば證人も居る、之を否定するならば、腹の子は自分の種子によりて製造されないことを證明する外に途なからう、余は自己の名譽にかけて、取消さるることを聲明す。

此の取消さぬ申譯が特の外に仲介人の癢に障り、一方ならぬ激怒を招いたことがある記者が世間を騒がし、仲介人に逆捻を喰はするなどの所行は、詰り記者の生命が萬澤博士のため助かつた結果だから、苦情は記者を活かした萬澤博士に持込んでくれと逃ぐる外はあるまい。

服薬の効果は何人も疑はない、奏効の怪しいのは、手製の鼻糞万金丹位だ、併し鼻糞で丸めた萬金丹も、腹痛には奏効神の如しと云ふこともある、斯やうな方劑は、日本薬局法には無論ない、お醫師さんでも、固より御存じあるまい、之を實驗したのは、獨り記者一人だらう、是れ鼻糞で癒るにあらず神経で癒るのだ、服薬は各種の關門を通過するから、効能が急速でない、飲んで即座に利くのは毒薬のみだ、スヨリキニネーを服すれば見てゐる間に死ぬる。

博士は手取早く薬を利かすことに苦心した、之が爲に殆んど寢食を忘れた、好きな酒を飲まなければ、女の味をも失念した、之が爲に一ケ年を東京に費して研究された、研究が大成して案出されたのが注射薬だ、元氣喪失の者、一たび注射を受ければ、忽ち壯者に若返へる、肺や心臓に惱める者、腎臓に苦む者、熱に胃される者、醫家の難治とする丹毒症や狭心症、危険なる血管栓塞症を豫防し得られ、其他四百四病に應用して、驚くほどの効果がある、今や萬澤の注射は、醫界の評判になつてゐる位である、一管の注射器さへあれば、瀕死の病人を救ふ、實に起死回生の特効であるのだ。

札幌市南一西三丁目邊の原田商店主人は、心臓と腎臓の難症に罹り、久しく市立病院に入りて治療を受けた、小康を得たと云ふので退院した處が、其の晩から俄に病勢昂進して、危篤の状態に陥つた、一家擧つて憂愁の涙に暮れ、早速某某博士を招じて診察を請ふた、博士一診して、危篤の斷診を下し、親戚故舊の非常召集を家人に注意した、忽ち至急電報は道の内外に飛んだ、急を聞いて遠近より來り集るもの、十數名、孰れも枕頭に待つて、涙を吞んで聲なした、健氣な令夫人、此儘殺すは残念なりと、神佛の加護を祈る頻りなり、時に見舞の一客より萬澤注射の神効を聞き、急ぎ自動車で迎へ、手當を請ふた。

驚くべし、萬澤注射は威力を現はした、二階の病床に寝たきり、動くことさへ自由ならぬ大病人は、翌日からは起きて座するやうになつた、同時に食欲も進んで來て病は薄紙を剝ぐが如し、四日目からは、獨りで階下の便所に通ふまでに癒つたので、家人は奇蹟と驚喜した、遠來の客は、御蔭で札幌の花見が出來たと感謝するに至つた、斯の如きは只其の一例に過ぎぬ、醫界でも萬澤注射を奇蹟だと驚いて居る、世人が萬澤

博士に捧ぐる注射大博士の尊稱は決して所になしとせず。

札幌市北二條西三丁目に「萬澤診療所」の看板を掲げて以來、博士の盛名を慕ひ、來つて神妙の診療を請ふもの、門前市を爲し、起死回生の思恵に浴するもの、數ふるに違あらず、一九四九番の電話は、朝夕間斷なくベルを鳴らし、電話子爲めに忙殺されつゝあり、喬木風多し、萬澤醫門の繁昌は、同業の妬を招き、動もすれば無智蒙昧の徒を指嗾して、盛名を傷けんと試む、而も是れ隆車に對する蟻螂の斧のみ、楊子を以て天日を遮ぎらんとする惡戯のみ、無謀兒戲の擧、豈に博士の盛名を傷け、入神の技を奪ひ得んや。

理論的溫情の辯護士 濱田和三郎

不風流處也風流と云ふ語は、達磨和尚の流を汲む、禪門の大僧小僧共が口にする處で

ある吾が和三郎君も坐禪組の仲間だ、風流ならざる處に風流の趣致があるのは、畢竟坐禪のお蔭と謂つて宜い、若し更に一步を進めて三昧に入つたならば、鎌倉圓覺寺の徒弟たる、野田卯太や、死んだ中川一介等と伍するに難からざるべし、中川一介は札幌控訴院検事長時代に、圓山瑞龍寺の道場に日參したと聞く――

彼は文明に酔はざる文明の才子である、支那に酔はざる支那流の才子である、風流に酔はざる風流才子である、此の點は多少疑問だ――世或は婦人に酔ふは如何と、半疊を入れる者がある、想ふに其れは彼が婦人に酔ふにあらずして、婦人が彼に酔ふのだと善意に解したい、女子と小人とは養ひ難しと、孔夫子ですら手古摺つた女子が、濱田君の徳に感化されるを謂ふであらう。

濱田君は有徳の君子人であるや否やは別問題として、名利を度外に置いて、洒々落落たる人物のやうだ、光風霽月の熱語は、彼の襟度に當筈むべきであらう、其の性格より推せば、隱處山深遠俗塵、之が彼の本懐かも知れぬ、人或は彼に霸氣乏しきを難ず是れ未だ彼の本質を理解し得ざる者の邊見に過ぎない、既に功名の念を絶つ、俗事に齷

齷する必要何處にかある。

濱田君は天才的詩人である、越山と號す、札幌辯護士中の詩人を探めなば、安東君あり、村田君ある位だらう、或は記者の寡聞かは知らぬが、先づ濱田君の右に出づる騷客はなからう、今は漢字制限即省減の世の中だ、約二千字も解せば、日用事には差支ない、何を苦んで難解の文字を並ぶる要あらんと、漢字を蔑む輩多し、蓋し是れ無學者のテレ隠しに過ぎない、半文學者の負借みに過ぎない、以て有學の濱田君を輕重するに足りない。

越山君は漢學者である、融通の利かぬ漢學者でない、融通の利き過ぎるほどの漢學者である、左れば漢學の味を削がうとする漢字省減は、實は不服であらうと察する、徳富蘇峰先生は、漢學黨のため、大要左の如き氣焰を吐き、提灯を持たれたことを感謝せず居られぬ

頃者世間では、漢字省減が大流行だ、予も之には異存がない、されど平常の場合に六ヶ敷文字の使用を、省減すると云ふことゝ、漢學其物を閑却することは、全く別

種の問題だ、漢字を省減するから、漢學を全廢せねばならぬと云ふ理窟は、決して成立つものではない。

然るに世の中では、動もすれば兩者を同一視し、我國教化の本原とも云ふ可き漢學其物さへも、無用とするが如き傾向あるは、甚だ以て意外千萬だ、日本國民に於ける漢學と、歐米諸國民に於ける、希臘、拉丁、の古典とは、何れが其の教化に重大なる影響を與へたる乎、その比較は、一寸出來かぬが、されど予の意見を以てすれば、寧ろ過ぐるも、及ざるなきものと思ふ、何と云うても、我が應神天皇の時、王仁が論語、千字文を齎らして來朝したる以來、漢學は、其の儒教たると、佛教たるとを問はず、實に我が國民性を陶冶するに、與りて力ありと云はんよりも、寧ろ其の元素を爲したるものと云ふも、差支なき程であつた、然るに今更ら漢字が面倒であるからとて、漢學迄も放抛するとは、何たる自暴自棄の事であらう。

吾人は孔子と云はず、釋迦と云はず、若しくは老莊の虛無と云はず、申韓の刑名と云はず、苟も漢學を透して、之と接觸した、今更ら漢學を投げ捨て、知らず何を頼りとして、我自ら我が心靈を養ふを得可き、漢學を閑却したる結果、吾人は正しく心靈上の餓鬼道に陥る虞はない乎。

吾人は決して偏固なる、頑冥なる、片意地なる、風變りの男女を製造する爲めに、漢學の必要を説く者でない、されど日本國民、大和民族の心意氣は、我が東洋古典の學習によりて、始めて之を收得する事が出来るものと思ふ。

泰西の文明は、東洋の文明に負ふ所幾許ぞ、此れは手短かに語り盡す可き、輕易の問題ではあるまい、されど泰西の文明は、決して希臘、羅馬から、遺傳したるのみには止らない、遠く溯れば、埃及がある、廣く究れば東洋がある、東洋と云ふ中にも、別けて印度と、支那とがある。

世の中には、何でも斯でも泰西でなければ、満足が出来ぬ者がある、されど内地の人が、朝鮮に渡り、大阪仕入の高麗焼を買うて、自から誇るものあるが如く、一も泰西の學說、二も泰西の學說と驚詫しつゝ、其實は東洋仕入の原品を、唯だ泰西の商標にて、隨喜する者が鮮くない様だ。

トルストイは餘程老子に私淑してゐる、彼は口を極めて、孟子は淺薄であり、單純であり、要するに少き意見を、多くの言葉にて繰り返すに過ぎないが、然も老子は實に偉いと讚嘆した。

予はトルストイが、幾許の程度に於て、老子に負ふ所あるを測定し能はない。されど彼の所謂の新思想が、老子の焼き直しでなき迄も、其の負ふ所の少くなきだけは斷じて疑ひを容れない。

予は夙にエマーソンを好んだ、されば米國通過の際は、故らにコンコルトに赴き、彼の安らかに眠れる、老樹の蔭に立つ墓石を撫で、又た静かなる彼の宅を見舞ひ、其の書齋の中にも入り、其の壁に側うたる書棚をも瞥見した、而して意外なるは、其の讀み古されたる書籍の總てと云はざるも、或る物は、東洋諸大家の著作の譯書であつた。

漢學の力能く歐米碩學の思想を支配したと云ふ、漢學の効能書には、吾が越山君も定めし異存はなからうと思ふ。

彼は幼にして秀才でありしや否やは與かり聞かない、其の小學校を優等で卒業した迹から觀ると決して凡庸ではなかつた、彼は神童の名譽を専らにしない迄も、神童に近かつたことは事實である、準神童の彼は、初め縣立新發田中學に學んだ、學資給せず明治二十一年、彼が十四歳の時、退學の己むなき蹉跌を生じた、遺憾やる方なしである、是に於て彼は自から學資を作つて學ぶ、即ち自給自學の精神を發揮し、小學校教

員となつた、辛ふじて學資を補ひ得る貯蓄が出来たので、二十六年に教鞭を抛ちて上京し、同郷の先輩肥田野才之丈氏に寄寓して、東京法學院に通ひ、二十八年に卒業して翌年臺灣鳳山縣廳の腰辨を拜命した、腰辨固より本意でない、三十年職を辭して東京に舞戻り、鳩山和夫の事務員となり、三十一年判檢登庸試験と辯護士試験に合格し直に札幌區裁判所の檢事見習となつて、罪人製造の方法を研究した。

檢事に鬼檢事と佛檢事の區別がある、鬼は嫌疑者と見れば、直に罪人視して何うでも此うでも、罪を着せやうとする、佛は先づ常識で判斷して、後に法を擬する、其溫情の存ずる處から附する名稱だ、早く言ふと賽の河原の地藏尊の格だ、吾が濱田君は、三十三年に檢事に昇格した、法は狂ぐべからず、罪人固より罰せざるべからずと雖も罪の人たらんとする者に向つては、溫情が濃かであつた、是れ濱田和三郎君が「佛檢事」の名聲を馳するに至つた所以だ。

血あり涙ある濱田君の性格は、罪人製造係りの役目は不向かも知れぬ、人を罪して監獄を繁昌せしむるは本意にあらず、寧ろ野に下りて人權伸張財産保護の矢面に立つを

愉快に思つた、其處で三十三年の十二月に、役人の總勘定を濟して、サツ／＼と足を洗ひ旭川に於て辯護士を開業すること六年、佛檢事として名聲を博した彼は、辯護士としても嶄然頭角を現はした、民刑兩面にかけて彼の技倆、彼の辯論、彼の熱誠には札幌旭を通じて、法曹界の花形なりと推稱せられた、事件の繁昌に伴れ、報酬亦多く俄かに分限者となつた、特に旭川方面に於ける信望は、並大抵にあらず、三十七年には推されて道會議員となり、次で代議士として帝國議會に踊るの素地を作つた。

一たびは代議士として國家に貢献せんと欲した、然るに道會議員として、道政に參畫した時、席に列なる多くの議員は、我利我慾の羽織ゴロなるを見て取り、廉潔剛直なる彼は政治界のバチルス等と伍するを不快に感した、否寧恥辱に思ふた、辛ふじて一期を我慢して、再起の念を抛つと同時に、代議士たるの望を絶つた、是れ政治ゴロとして墮落すべく、餘りに廉潔すぎると謂ふべきである。

賢明にして墮落政治家の仲間入りを御免蒙つた和三郎は、辯護士に終生を托する念を固ふした、何を言ふても、札幌は本道の首府だ、根據を札幌に据へざるべからずとあ

つて、三十九年札幌に舞戻つて以來、今日に及んで居る、身は俗塵を浴びるも、心は風月を伴とす、深く悟道に入つて、限なき感慨を謠曲に託す、其の高風以て欽すべきである。

札幌商業會議所副會頭 久保兵太郎

空拳を振つて自家の運命を推開するは、凡庸人の能くする處にあらず、見識あり、勇氣ある傑物にあらずんば、出来ない、天は自から助くる者を助くと云ふ、久保君に就て其の證據を見る、彼は實に天祐に浴して、自己の運命を推開したのだ。

一代にして巨萬の財を積む者の多くは、無學文盲である、明き盲目である、然るに吾が兵太郎は、素養があり、見識がある、學問の深淺は承知しないが、兎も角も正則の學問を修めてゐる、故に理智に富んでゐる、等しく金を儲くるにしても、決して正道

を踏み外さない、金満家に有り勝ちの不義の財は、一文も久保の金庫に潜み得ないことは、金庫の番人が保証する、其れも其の筈である、不義の富貴は浮べる雲同様と信ずるからであらう。

彼の産れ故郷は四國の阿波だ、阿波は煙草の名産地に加ふるに、義太夫の本場と謳はれてゐる、門前の小僧習はずして經を讀むと云ふ譯でもあるまいが、彼は習はずして多少は義太の唸なり方を覺へてゐるはず、其の上手か下手かは固より論外として例の順禮の段は堂に入つたもんだと好評ある、是りや表藝でなく隱藝だから減多に出さぬさうだ、時々雪隠の窓口から「順禮に御ホーシャ」の美音が漏れるさうだ。

幼にして四方の志あり、長じて東京に遊學し、専修學校に入りて理財學を専攻し、鐵道廳の腰辨を皮切りに、遞信省へ腰辨の鞍替、小さくなつて職分に殉する、足掛九年固より腰辨に甘ずる人でなく、大に感ずる處あつて腰辨を抛ち、本道に渡つて些やかな事業を始めた、之が抑立身の基となり、今日の出世を見るに至つた、此間の奮闘努力は固より吹聴するまでもない。

彼の心事を解剖するに、事業慾は極めて旺盛だが、政治には寡慾を裝ふ、併し是れ彼の本意であるまい、仔細に觀察すると、實際の處、兩慾は相伯仲して居る、或は寧ろ政治慾の方が勝されるやも知れぬ、只暫らく隱忍自重して、銳鋒を露はさぬのであらう、其の幌都實業界に於ける勢力は大瀧甚太郎を壓するかも知れぬ、今や札幌商業會議所副會頭として實業界の牛耳を握り、名聲を四方に走する處から推して、大瀧の下風に立つを甘ずると爲すは、卓落たる彼の心事を解する能はざるもの、愚見だ、彼の意氣豪壯なる何ぞ大瀧の下風に立つを甘せん、事情己を得ざればなり、看よ彼の有する肩書を看よ、札幌軌道會社長、札幌信用組合長、札幌電氣軌道會社監査役、夕張鐵道監査役、登別溫泉軌道會社取締役、札幌土地住宅株式會社取締役、其他僂指に遑あらず、事業界に於ける彼の信用勢力は、何人の眼にも忽ち映ずる。

彼の常識は圓滿に近き程度に發達し居れるを否む能はぬ、金満家共通の弊たる、死金を蓄ふる氣は毛頭見出されない、必要の場合には卒先して多額を抛つて顔を澁がめない、例せば祭典寄附の如き、常に割當以上を吐いて、他に範を示してゐるさうだ、出

し惜み勝なる金満家の中に、吾が久保君の如きは、至極金放れの好い人である。

實業と政治とは、其の距離段々に接近して來た、曾つて政治は浮浪人専門の商賣視せられたが、近來漸やく専門政治屋の影を没するに至つた、實業家は即ち政治家たりと謂ふまでに進境しなければ、相變はず政治は腐敗し依怙最負が出来る、恒産なきものに政治を左右せしむるは極めて危険である、併し是は決して無産階級を實際政治から除外せしめやうと云ふ意味合でない、國利民福を第二段として、政治に衣食しやうとする政治界の浮浪人を排するのである、日常の生活に窮して、何うして眞の國利民福などの觀念が浮ぶものか、故に今日の世相は實業家を政界に引張り出すことに苦心してゐる、我が久保兵太郎も其の一人である、例へ政治慾は淡泊でも、實業界にのみ納まるを許さない、如今黨籍を政友本黨に置くが、是れ彼の本懐であるや否やを知らず兎に角も札幌政本派の音頭取りである、過る代議士選舉に、伊勢音頭を踊りそくねたは聊か氣の毒であつたが、彼の名望を以てすれば、一柳をたゞきつぶすは造作もなかつたが惜い哉幹部の失策で、一柳君に花を持たしたは返すくも残念だつたであら

う。彼は忙中閑を得て俳句に餘念なし、二瓢と號し秀逸少からず、最近京阪地方を漫遊して句あり

高野山にて

薰風や一山一百二十ヶ寺

同奥の院にて

聲に仰ぐ杉に影なし佛法僧

同急坂を登る

山駕籠に眠て吹けり青嵐

奈良の舊都にて

三笠野や歩み寄るどれもく鹿

叡山最高峰にて

老鷲や五幾一瞥の四目ヶ岳

是れ英雄の閑日月乎。

第一銀行支店長 加賀谷 眞一

我國には百五十に近き、銀行がある、其の中で日本銀行の如き、横濱正金の如き、朝

鮮、臺灣、日本興業、日本勸業各銀行の、特殊關係を有するものを除き、純然たる個人力を集めて組織せられたる銀行のうちで、其の最も優勢優良なるものを探めなば何人も第一銀行を推すに躊躇しないであらう、實に第一銀行は、普通銀行の最大權威であるのだ。

勿論、三井三菱の如き、又は安田銀行の如き、有力者がある、併し拂込資本と殆んど同額の積立金を有するもの「第一」を除いて一もあるなし、又拂込資本の十三倍の巨額に達する預金を有するもの「第一」を除いて一もない、三井銀行の如き、拂込資本に對し預金高は七倍に達せず、積立金亦資本の半に達しない、三菱銀行も其うである、積立金は資本の五分の一、預金は約七倍だ、安田銀行の積立金は資本の約六割、預金は約五倍に過ぎない、斯の如き事實から觀察すると、記者が「第一銀行」を推奨して、我國銀行界の最大權威となすもの、決して溢美過賞の言であるまい。

加賀谷眞一は、此大銀行の札幌支店長である、銀行の實力から言へば、彼は本道銀行業者の牛耳を握り得られる譯である、而も彼は性溫良恭謙讓にして、自己の職務を忠

實に守れば足れり、其の人の下風に立つも、上風に立つも、固より頓着する處でない是れ他の銜氣滿々たる金融屋が、彼の風を望んで愧死すべき處だ。

能ある猫は爪を藏すと言ふ通りに、寸分間違はない、世には随分自己の器量を顧みずして、他の許さぬのにも拘はらず、自分免許の手腕家振り、智慧者振りて、矢鱈に引つかき廻はしたがる人間あり、或は狐威を假りて威張たがる半可臭い金融屋あり、或は自己の位地を利用して、不正を働くものあり、利の爲め、慾の爲め、不當の鑑定を試みて、不當の貸出を爲すものあり、若し嚴密に貸出を調査したならば、背任罪に問はれる幾多の事實を發見するに難からざる銀行に乏しくあるまい、此等は吾が加賀谷君の營業振りを學んだならば、豁然と悟り、翻然として非を改むるに至ると思ふ。

眞一は愛媛縣宇和島の産、明治十八年二月生れの秀才だ、赤門出の法學士で、帝大卒業後直に第一銀行に入り、次で京城、釜山、京都の各支店を経て、札幌支店長に榮轉したるは、大正十二年の春だ、支店の業態堅實に進展しつゝあるは、是れ一に彼の人格に伴ふ報償だ、只彼の嗜好と道樂と、與かり聽くを得ざるを遺憾とする、記者は銀

行家として、徹底的に批判することを他日に保留して置く。

社會奉仕的資本家 藪 惣 七

徳川幕府は智仁勇の三徳で固めた、初代家康の智、二代秀忠の仁、而して三代家光の勇斯くて固めた封建制度は微動だにしなかつた、藪家も其の通りである、今は道心の堯、俗名の初代惣七君は、智と勇とで家を興したのだ、蓄財の手段については、世上幾多の非難がある、而も藪蚊の鳴くほどにも應へなかつた、多分蓄財に餘念なき、坊間の謗議は一切耳に入らなかつたのであらう。

三十年以前、札幌切つての大富豪は、藪惣七と五十嵐佐市の兩家を推さざるを得なかつた、當時の財産は、如何に割引しても百万を降らないだらうとは、一般人の想像であつた、果して其通りとすれば、藪家今日の資産は、一千万圓を超過するだらうと思つた。

はれる、而して財産の半は不動産ださうだ、一方には現ナマ、一方には不動産、寔に財産擁護のよき方法だ、現ナマは貸し倒れの虞がある、全部貸倒れに終つても、不動産は残る、深く考へ、遠く慮かつての遣口、初代惣七君は、財産家に稀なる智者であつた。

札幌隨一と唄はれた大分限者の初代惣七君、惜かな「仁」の一字が缺けてゐた、詰り猛烈な非難は、之が原である、博く愛する之を仁と謂ふことを、深く念頭に刻んだならば、決して非難の起るはずがない、今は佛道に歸依して妄念を晴らす、其の餘徳が二代惣七君に報ひられたのは、眞に喜ばしい。

藪家に缺けたる「仁」は、二代目に至つて芽を出した、若し智勇の一本槍で押し通したならば、全く世間の同情を失して、三代目には或は川柳の文句「賣家と唐様で書く三代目」の悲惨なる境地に陥らぬとも限らぬ、夫れは建設は難く、破壊は易いからである、人間も無情の風に誘はるれば只死ありだ、財産も亦無情の風に誘はるれば飛んで消へるのは世間の習ひだ、二代惣七君は、仁を悟つたのである、悟つて之を施すに至

たのである、財産も人間の生身体同様に、病氣に罹る所以を悟つて、營養物を攝取しやうとするのだ、財産擁護の營養物は即ち仁である、斯くて藪家の財産は、鼻風邪も引かないのである。

惣七君は苦勞人である、曾つては世の憂苦艱難を一口に嘗め盡した、自から好んで人生のドン底を歩む道樂息子、此の父にして此の子ありと、好い意味で褒められた、金を湯水のやうに使ひ果す、其の使ひ振りが派手だ、父に勝る傑物だと皮肉の賞讃聊か痛み入らざるを得まい、兎角金使荒き才物は、父に取つては不肖の子だ、忽ち勘氣を被つて、裏門からの阿呆拂ひ、是れ萬己を得ざる次第と申もの。

裸一貫で脱走した惣七君、金に餓ふるは當然だ、忽ち衣食に窮せざるを得なかつた、一度は父の無情を怨んだであらう、彼はツク／＼と後藤象次郎が、放蕩息子猛太郎に對する慈悲を思ひ出して、深く父の殘酷を怨んだに相違ない、待合荒しの藝妓泣かせ放蕩にかけては豪のもの、父象次郎は明治政界の大立物、猛太郎は實に不肖の子であつた、象次郎殆んど當惑したが、子の道樂を取除くべく、所謂逆手を用ひた、放蕩を

抑制せずして却つて獎勵した、此處が象次郎のエライ處だ、

オイ猛、一寸來い、お前は道樂を覺へて誠に結構、だが未だ其の位ちや堂に入らぬ、更に大に發展せよ、何事も徹底しなければ駄目だ、食傷するほど暴れよ、思い切つて騒げ、ソラ之を興ると投げ出した一封を開いて見ると驚いた、一万圓の銀行切手だ、彼は一万圓の放蕩費を頂戴して有頂天の喜び、忽ち意馬に鞭ちて紅圍粉陣の真ん中に乗り込んだ、其の武者振り天晴だつた、恰度太十の尼ヶ崎の段、明智十治郎初陣そつくり、放蕩の獎勵、是れ毒を以て毒を制する手段、放蕩病の膏盲に入るに當り、鹿爪らしい説諭訓誨の藥餌は、糞にもならぬ、却つて反動の勢を激發するのである。

惣七君は猛太郎の境遇になりたかつたであらう、併し父の性質として之を許さない、毒を以て毒を制する逆手を採り得なかつた、遂に東京に漂浪して身を筋肉勞働者の群に投じた、此の時に當りては、或は車夫となつて辻に客を待ち、或は一文商となつて繩暖簾の殘肴に飽き、或は箱屋となつて藝妓の三味を擔ぐを辭しなかつたであらう、流浪の惣七君が如何なる職業に有付いて、忠實に働いて居たかは、茲に吹聴の限りで

ない、兎も角も筋肉労働者として、暫く天分に安じたるを想へば足る、彼は凡有の艱難を嘗めて恥ぢなかつた、斯くて人物の修養を積んだのである。

惣七君は凡ての艱苦を嘗め盡して、浮世の眞味を味ふた、つく／＼と金の難有味を悟つた、ピター一文でも浪費するは、罪惡なりと悟つた、世のドン底を歩み、社會の風波に揉れて、己れを爪つて人の痛さを覺へた、積善の家に餘慶ありと謂ふ意味が讀めた誰やらが云つた通り、社會は大學校である、曾て放蕩學校を優等で卒業した惣七君は社會大學に入り、天地自然を教師として、實物教育を受け、遂に敬すべき靈光を放つに至つた。

天地の自然に同化しない前、悟つたやうでも未だ全く俗念を脱却し得なかつた、母親の生命保險金受領につき、父との間に忌むべき問題を惹起したとは云へ、夫れは權義に關してで、敢て深く咎むべき筋合でない、彼が一朝翻然として悟つた以來は、生れ變はつた人格者となつたのだ、而して飽まで善を好み、其の好む處の善を實行するの勇氣が出て來た、人間も斯うなれば天下何者も懼るゝものはない、頑強の父は悦んで

彼の勘氣を許して跡目相續人とした、今となつて放蕩學校在學當時を追想したならば定めて身の毛が戰慄つだらう。

藪家の財産を擁護する爲、合名會社が出來た、合議に依りて財産の運用を爲す、實に堯祐和尚が、この制度を布いたのは、超凡の見識だ、人間は堅いやうで軟かい、一たび魔風に襲はるれば、何う變化するか判からぬ、この心配を除くために、合名會社が組織されたのだらう、之を組織して、ヤレ／＼と一安心して、お寺に立籠つた堯祐和尚、偶に置きぬ智慧者である、斯くて藪家の身代は、万々歳だ。

藪合名會社の事業は、多種多様である、横合から一本突込みたき事もある、併し此等の事は他日に譲らう、只藪合名會社の行へる事業は、根底を社會奉仕に置くことだ、資本に伴ふ利益、是れ當然の歸結で恰度谷川の水が集つて川となり、海に注ぐと同じ黙つて居ても金は殖へる、夫婦に子供の出來ると選ぶ處ない。

二代目惣七君は「金溜」主義の家憲を改正して、「社會奉仕」の看板に塗り替へた、詰り社會奉仕をなさんが爲に、金を儲くるのである、凡てが社會奉仕の觀念に基くのだ、

夫れ陰徳あれば陽報あるは、天然自然の理で、孔孟の徒が發明した譯でない、世には陽報を得んがため、陰徳を施すもの、随分と多いやうだか、此等は陰徳商人で、眞の陰徳の安賣、決して感心は出來ない、斯の如き輩が、社會奉仕を口にするは、即自家廣告である、世を詐る自家廣告である。

惣七君は社會奉仕の權化と謂つて宜しい、彼は人からも、世からも報ひられんがために施さない、只己の欲する處を人に施して樂むのだ、金満家にして、同情心厚く、犠牲心に富むものは、札幌では差當り惣七君を推したいと思ふ、彼は言ふ處は、多く實行してゐる、早い話が借家賃の如き、地代金の如き、何處よりも安くしてゐるので判かる、未だ伊藤龜太郎氏の如く、借家に住むものには、十二月一箇月の借家賃は、餅米代として免除してゐるさうだ、惣七君も早晚地代も借家料も、十二月の一箇月分を免除しやうとする意志を抱くとのことだが、有りさうな話だ。

積善の家には餘慶ありで、積善の報は、政治的に現はれて來てゐる、取敢へず市會議員、道會議員さては代議士に擬せられてゐるが、斯やうな派手な商賣には、一切有附か

うとしない人が薦めても、御免蒙つてゐるさうだ、併し都市計畫、手取り早く言へば、札幌市の繁榮については、抱負もあり、經綸もあることなれば、市長にはなつて宜い位の底意はあるらしい、自腹を切つても、札幌市の爲に盡すだけの人物でなければ、市長は勤まらぬ、月給で衣食しやうとする人物で、何が綠な仕事が出来るもんか、惣七君の如き、公共心に富める人物は、正に市長の適材だらう、將來札幌市は、惣七君を煩はす時機が來るだらう、其の時は辞退して貰つては困る、社會奉仕は金ばかりでない身体も必要だからである。

札幌電鐵會社重役 齋藤甚之助

ロスタチャイルドは世界の金満家である、人種は金に飽くを知らぬ猶太人、猶太人の特色は、譬へ人非人と言はれやうが、乞食穢多と蔑せられやうが一切頓着なしの鐵面皮

彼等の富は殆んど世界の金を一族郎黨の手に握むにたるほどでも、其の下劣な根性は世界から排斥を喰つて、身の置き處に窮し、世界の各所に放浪して、自分等の國家さへ所有し能はる氣の毒さ、併し世界の金權を握るだけが強味だ、金に穢ないはずの猶太人のなかにも、ロス君のやうな立派な心掛けの人が居る、之を稱して泥中の蓮と謂ふ。

ロスチャイルドは其の事務所の一隅に、救濟の一課を設けて貧民救助を遣つてゐる、貧民からの申込を審査した上で、公然でなく内所で救つてゐる、此の内所の二字に美味がある、普通の金持の仕事は、自家廣告が先に立つ、何千圓何万圓何十百万を社會奉仕に寄附しても、其の寄附したと云ふ評判を取るを目的とするものが多い、ロス君は世の評判が大嫌ひ、人に施した陰徳を賣名の道具に使ふのを以ての外と賤んでる彼常に曰く、富豪と目せられる以上、憐れ果敢なき窮民を救ふ義務があり、窮民は救助を求むる権利があると、實に其通りである、日本の金満家にロスチャイルドの心懸あれば、安田は朝日の兇刃に斃れはしない、窮民を助くるのが富豪の義務と心得たな

ら、些の忌はしき社會問題は起らない、社會は常に平穩無事たるべき筈である。

齋藤甚之助は金満家である、同情心に富める金満家である、能く窮民の心理情態を呑込んでゐる、社會奉仕とあらば先陣を承るほどである、其の心掛はロスチャイルド同様であると、彼の庇蔭者は聲言する、此の聲言の通りなら寔に結構な事である。

彼は圓山神社附近の仙境——今日は俗境と化す——を相して、素破らしい別荘を構へ圓山を自家庭園の築山と爲してゐる、實に廣大な建物で、恐らく全道隨一だらうとの評判だ、屢々自分の自動車を自分が操縦して、別荘使ひするのを目撃する、人或は壯觀に目を廻はして阿房宮などと蔭口さくが、マダ別荘の二階から圓山まで棧道を造らぬから、阿房宮などとは以ての外の駄評と見るがよからう、さりながら一般からは感心なブル振りと恐縮されて居る、恐縮と謂つた處で、半面に岡燒きを含むことを忘れてはならぬ、自分の金で立派な別荘をこしらへた處で、別に岡やきをやくに及ばぬはず、金満家が大に金満家振りを發揮する、必ずしも人の痛氣を頭痛に病む必要もあるまい、百万の蔭口は屁でもない、甚之明決して心配無用。

新築祝とあつて紳士紳商連が招かれた、一同鱈ふく御馳走に預つた、御馳走の食ひ放しは禮に非ず、其處で電鐵社長の板谷順助が、來賓を代表して一場の挨拶を試みた、其の言葉は意味深長であつた、要に曰く、お祝の御馳走を鱈腹頂戴仕つて心から難有御禮申す、此の機會を利用して、心からの祝辭を呈じたい、御主人(甚之助)のお氣に障るか知んが、先代は只金溜一方で、今日の大財産を作られた、其の道にかけては實に非凡の手腕を有つて居られたが、惜い事には社會奉仕の觀念は至つて薄かつたやうだ、當代の甚之助君は、定めて遺憾とせられることゝ信する、願くは先代と二人分の社會奉仕がして欲しいと、寔に甚之助君に對する頂門の一針であらう。

口頭の社會奉仕は誰れもする、只實現させることが難事だ、從來の行爲を拜見すると教育ある甚之助君のことだ、社會奉仕の眞意義は充分に諒解せるはずだ、殘念なことには大に手加減を加へてる嫌がある、其の手加減も、成るべく多く人の意表外に出づる手加減ならば、別に苦情の持込みやうもない、併し常に意表内だから文句の絶へないのであらう、其の一例として例の關東大震災の義捐が話題に上る、甚之助君は大

枚一万圓に値する金品を義捐したのである、然るに一万圓を出して尙且兎角の非難を聞くと云ふことは畢竟出し振りが遠慮勝であつたと謂ふに過ぎない。

と云ふのは外でない、當時札幌の金満家連は、殆んど強制的に義捐せしめられたのである、即ち追手からは札幌市、搦手からは警察署が攻め立した、追撃又追撃の厄にあつた資産家も鮮くなかつたらしい、甚之助君も追撃を受けた一人である、時の警察署長薦田某は、金持苛めに妙を得たりと評判を取つた男だ、勿論官威を假りて脅迫箇間敷放れ業には出でぬであらう、社會は共存共榮を主眼とする原理から説き起し、緩急相濟ふは同胞の義務なる點につき、盛に蘇張の辯を揮つたものと信ず、甚之助君も説き落された一人だ、彼は割當の一万圓を已を得ず——いや／＼ながらとは言はぬ——出すことに承諾した。

一万圓の義捐實に殊勝の至りである、然るに彼は窃かに三千圓を、方面替へて市役所に持參に及び、市長からは奇特の至りとか何とか、甘い言葉で褒めたゝへられた、處が薦田署長は大に食言を怒り、甚之助君に膝詰談判に及んだ、果てが残り七千圓は現

金でなく、手製の味噌醤油で埋合はしたと言ふのだ、己を得ず義出したと云ふことが非難を招く焦點であるが、併し其の非難は出す方の甚之助君のみであるまい、官權を擁して義捐を強制した方も非難しなければならぬ、凡て義捐などは任意的で強制すべきでない、恰も税金でも賦課するやうに、割當つべきものでない、想ふに甚之助君は、心中大に強制手段を怒つて、薦田に一ト泡吹かしたものであらう、強ち甚之助君をケチなりとして非難するは、少しく酷ではあるまいか。

言ふ勿れ、甚之助君を天下無類のケチン坊なりと、濟生會にも公會堂建設費にも、共に万金の寄附を爲してゐる、場合に依れば、多々益々辯ずる氣勢を示してゐるさうだが彼は非難者の言ふ如く、冷情漢でない、熱かい血も涙もある、若し嘘と思ふものならば今後の行動に徴せ、只氣の毒に堪へないのは、近來輕微の腦を病み世事と遠ざかつて居ることだ、春秋に富める有爲の才物、速に快癒を祈りて已まぬ。

北門銀行常務取締役 井上外幾雄

人に貴ぶ處は、公私の區別を嚴守して、敢て之を混淆せざるに在り、而も是れ最も難しとする處である、情は一なり、然れど公に於ては冷情、私に於ては溫情、情を二様に使ひ分くることは、頗る難事に相違ない、強いて寬嚴宜しきを得やうとすると、茲に區別が混同されて来る、是れ公私を嚴別することの難い所以である。

人の難する處を、易とするを稱して英雄と謂ふ、英雄の資格は、多々あるであらう、プラタルクの英雄傳を讀むまでもなく、英雄とは、人の出來ざる事を、平氣で成し遂ぐる人間の名稱だ、然らば、輕業帥も、手品使も、共に英傑に相違ない、此の定義から行くと、天勝も、羽左衛門も、那破倫翁も、豊臣秀吉も、徳川家康も、田中義一も加藤高明も兄たり難く、弟たり難く、腕前は五分／＼である、筒井順慶以來、政界の日和見政友本黨總裁床次竹二郎の如き、ノラクラ式の人物は、英雄中の英雄と推奨すべきであらう。

英雄の資格者中で、毛頭失念してならぬ事は「色を好む」と云ふ一條だ、昔から英雄色を好むと云ふ、何人が立てた法則だか知らぬが、寔に申分なき尺度のやうだ、此の尺度で推し度ると、五戒を立てた釋迦、十戒を工夫した耶蘇は、凡の凡たり庸の庸なるものと値打が下落する譯だ、依つて想ふに、吾が北門銀行常務取締役井上外幾雄の如きは古來稀なる英雄の列に伍するに足る、何となれば、色を好む者は英傑なり、井上外幾雄は色を好む故に英傑なりと、三段論法より割出した、理詰めの英雄だからである。

井上の艶名は、名花福助との關係から、端なく世界の隅々にまで轟いた、同時に福助も世界的に花が咲いたと云ふもの、サヅ鼻が鞍馬天狗より高くなつて満足であらう、而も鐵面皮の福助は、赤フン仲間に対して、少々氣が退くると見へて、近來は一間に閉ぢ籠つて謹慎中とある、何故の謹慎かは知らぬ、其處は俠のやうでも女だ、しほらしい節もある。

宿の妻は本妻として臺所に据へ、福助は權妻として親展室に圍ふ、井上の公私嚴別主義は、此邊にも遺憾なく發揮されて居る、愛して溺れざる處に萬金の價值がある、併し猿も木から落ち、河童の川流れと言ふこともある、兎角御家騒動の發端は、女の道からである、賣りもの、買もので、アツサリ心の緒を引締めて、四疊半の摘み喰する間は先づ無難、天下泰平、嬉安然であるが、一步踏み誤れば、遂には一家の治安が妨害されぬとも限らぬ。

熟々井上の相貌を拜見するに、軀幹はスラリと高く敢て瘦ギヌたらざるも、慾を言へば、今少しデブであつて欲しい、是れでも粹人は今丹姿だと珍重がる、若し之に多少の肉付きを加へたら、お誂へ向きの好男子に型まり、幌都花柳界の人氣を、一身に背負込むに難からずと恐察する、只玉に疵と想はれるは、額に縦横する青筋である、惜ひ哉、神經過敏性なりと云ふ世評は、多分此の青筋から見立てた謗評であらう。

瘡癩持ちと言ふことが顔に書いてあるや否やは知らず、然れど瘦ギヌ下青筋の通つて居る人間は、男女に限らず、概して神經過敏である、少しの事を怒つたり、庇放つたやうな事を悦んだり、笑つたり、泣いたりする癖がある、喜怒哀樂の情が一日に何十遍となく繰り返やされる、其の變化の速かなる、七面鳥も三舎を避けずばなるまい、

給仕君あたりでもビク／＼もので小使部屋の評議にのぼる、併し便利なことには、件の青筋がビリつくのと、つかぬことに依りて、大將の御機嫌の善悪が測量されることださうだ。

人間は感情の動物である、感情が事に依りて、幾變遷するのは、雷に井上のみに限るまい、恐らく千人が千人、万人が万人とも、左様であらう、人間から喜怒哀樂の情を取り拂つて仕舞へば、人間の木像が出来るだらう、是れでは切角人間に生れた甲斐がない、怒りたければ、勝手に憤ふるべし、笑ひたければ、山の崩れるだけ笑ふべし、只戒むべきは感情の自制だ、平たく言へば感情の節約だ、さもなければ疑心暗鬼を生じたり、暗鬼が罪も咎もなものに入ッ當りしたり、かみついたり失策を招く。

鐵道省には雷大臣が居た、北門銀行にも雷事務が居る、雷さんの流行には閉口だと、恐縮の聲が時々小使部屋から漏れるさうだ、青天の霹靂、ピカリゴロ／＼、取引先きの氣の弱い連中は、聲聞いたばかりで、今日は御機嫌が斜ならぬと測量し、肝腎の用事も足さずに、ソーツと罷り退るとは、嘘のやうにも思はれる、併し神經過敏質の男

には、得て有りがちの事で、敢て不思議とするにたるまい。

折入つて考ふると、斯の如きは能く配合の妙を得て居る、頭取長友は温厚の長者である、一口に言ふ、大のお人好しである、大抵の事は依々諾々たりで、人と争ふのが大嫌いの方だ、終始ニコ／＼然として、神棚の恵比須さんソツクリ、井上がニカ虫をかみつぶしたる如く、終始ニガリ切れるに比すれば、天地霄壤の差あり、井上さんは福助と差向ひ以外に只の一度でも笑つたことがあるだらうかと評判される位だ。

愛嬌屋の長友、六ヶ敷屋の井上、是れで北門銀行の營業が調和されて、宜い加減に發展される、愛嬌の極は情弊に陥る嫌がある、氣六ヶ敷き結果は苛察に流れる、人は言ふ、公私の區別さへ嚴守すれば、情弊に陥る心配なしと、寔に其の通りである、けれども、其れは意志の極めて鞏固なる人について言ふので、私を以て公を害しやうとする處に、人間の弱點が遺憾なく露現するのである。

慈母の愛は長友に觀るべく、慈父の嚴は井上に求むべし、兩々相持して始めて寛嚴宜しきを制する事が出来る、此の兩性の調和あり、業務の遂行に誤りなきを得るであら

う、記者は敢て長友の個性が、金融政策を放漫ならしむると謂ふにあらざる如く、井上の個性が緊縮に偏すると謂ふに非ず、緊縮と放漫と相渾融して、茲に健實なる金融政策を觀ん。

概して宏量な人物は一般の氣受け宜しく、察々たる人物は毛嫌ひされる、由來神經質の人間は、何事についても神經が鋭敏に働く、寧ろ働き過ぎる、何事にも氣が廻はり過ぎる、故に事大小となく、萬事萬端、自分が手に掛けなければ、承知が出来なくなる、安心して人に任せられない、早い話が、給仕や小使の任務から各部門の事務に至るまで、自らしなければ氣が安まらぬのだ、是れ神經過敏性の通弊である、斯様に萬遍なく氣を配ることは、事務を監督する上に於て、極めて忠實なり、一概に排することは出来ないが、人間の能力には限りあるもの、是れでは心神過勞、徒らに過敏なる神經を過敏に導き、遂には神經衰弱に陥らざるを得ざるべし。

疑心暗鬼を生じ、常に恐怖の念に驅られるは、神經質に伴ふ特徴だ、輕信輕疑是れも神經質特有の産物だ、大体に於て人を容れ能はぬ處に、人格上の大欠點がある、人の

長たらんと欲するものは、宜しく大量ならざるべからず、宜しく知つて知らぬ風を裝ふものたらざるべからず、清濁併せ飲む底の度胸なくして、何で大事が遂行されるもんか、苛察狷介の人間が落行、途は、孤立だ、唯一の不名譽の孤立だ。

井上は高等の學問を修めて居る、學窓に於ては秀才と謳はれ、先輩に愛せられ、同窓に重せらる、彼の性格は銀行業者として大を爲すに適するや否やを知らず、又銀行業者としての素養と、見識と、手腕を有するや否やを知らず、其の知らずと雖も、大人物たるべき修養を缺ぐことは、疑ひなき能はず、彼は長友の跡を襲いて、頭取たらん野心を包藏するに非ずやと怪まれて居る、併し是れありとて、決して野心と認むべからず、己れ未來の頭取りたらんとする冀望は、彼が北門銀行常務たるの日、他日の榮達を想像したのである、唯事功を收むるに急なる權謀術數を弄し、頭取長友の排斥を企つるあらば、之を稱して野心と謂ふ。

野心の遂行には、其れ相當の準備を要する、先づ部下の心を籠蓋しなければならぬのみならず、腹心の部下を製造する要あり、之が頭取乗取りの策戦計畫であらう、併し

頭取の器にあらずして、代つて頭取たらしんとする非望は、遂には失敗に終はるなきを保せず、聞く井上の神経質的辣腕は、既に各支店長に揮はれたりと、果して然らば是れ甚だしく無分別なり、自己を顧みざる暴舉なり、戒めねげなるまい、彼にして眞に頭取たらしんと欲せば、宜しく頭取の器を養ふべし、器とは他でない神経質を改めて、作り馬鹿となることだ、人を御するの道、青二才の會得する處に非ず。

本道新聞界の元老 上野貫一

新聞記者の筆を操る、恰も兵勇の劍を按づるが如し、苟も抜かず、抜かば將に血を見ずんば己まざらんとす、文を綴るペンは同一でも、其の使手に依りて切れ味が異ふ、腕利に使はすると、鈍刀でも村正ほどに切れる、本道の操觚界に於て、村正を鈍刀に使ひ下ぐる記者は濱の眞砂ほどある、併し鈍刀を村正たらしむる腕利は、其れこそ寥

々として曉天の星だ、上野貫一は、腕利の一人である、彼の筆鋒の鋭利なる、村正の名刀の如し、人觸れば人、馬觸れば馬を斬り捨つるに造作ない、彼の最も長ずるは、辯難攻撃の文だ、小心文にあらず、放膽文だ、是れ彼の性格の然らしむる所であらねばならぬ。

貫一の生れ故郷は、上州と相對峙して長脇差の本場と目せられる甲州だ、昔の甲州は人道の敵武田信玄の領域だ、信玄は策略家だ、彼の満身は權謀と術數とで打ち固められてゐた、父を逐ふほどの人間であることに依つて、彼の性格が察せらる、由來甲州人は信玄を崇拜の的とした、故に權略に長じ、術數に秀で、人の揚足を取るは愚か、人の寢首でも掻き兼ね間敷き性格は甲州人の通有性と見て可なり。

甲州は曾て天險の地であつた、攻むるに難く、守るに易い地であつた、今は文明の惠澤に浴して、鐵路縱横に奔り、小佛の險も、鯉ヶ澤の關門も破壊され終はつた、昔、祐天吉松や、清水次郎長の流を汲める俠客の跋扈しただけあつて、今尙俠氣は甲州人の心腔に刻み込まれてゐる、甲州名物の身延山と相並んで、其の俠風は天下に珍重さ

れてゐる、俠客的實業家の雨宮敬次郎を産出したので、一層甲州人の光を添へた譯だ。貫一は身延山下で、日蓮宗の勇壯なる進軍の太鼓を聞いて生れた、凡ての赤ん坊はオギアと叫んで飛出すが、貫一はアウンと空気を呑み込んで生れた、其の精氣を吐いて出でずに吸ひ込んで出た處に、貫一が生れながらに風變はりの根性を有することが判かる、信玄流の機略は産れつきと言つて好い位だ、長じて小細工も大細工も巧く企む本道に渡つて剃刀のやうな鋭い筆を振り廻はし、殆んで全道を風靡した、今日のタイムスや樽新の、二束三文の木葉記者等が到底企て及ばぬ處、其の奇策縦横の田中清輔を親分と仰ぐに至り、彼の天才は愈々冴へて來た、信玄流の策略は益々深刻味を加へて來た、田中と上野とは其の關係は形影相伴ふと云ふやうに、離るべからずだ、清輔一日も貫一なかる可からず、貫一亦一日も清輔なかるべからずだ、例へて言ふと、徳川天一坊に山内伊賀之亮が付いて居たと同じであるのだ。

貫一の筆は辛辣である、筆鋒銳利である、故に人或は稱するに毒筆家を以てす、蓋し其の文調が餘りに深刻なるが故だらう、一たび攻撃の筆を揮へば縦横無盡に斬りまくる、寸分の餘裕を剩さない、グイ／＼と攻めつけて、止めを刺さざれば己ます、之が爲めに屢々筆禍を買ふた、人が彼を目して毒筆の勇者と恐れるは、彼の眞意を解せざる半可通だ、世道人心の弊を匡すためには、勢ひ筆鋒は銳利たり、無遠慮たらざるを得ない、左れば識者の眼から観れば、毒筆でなく、實に藥筆である、而も尙擬するに毒筆を以てする、文章を解する能はざる無學者の言だ。

堂々たるタイムスや樽新の微温的の記者、彼等の筆力は、風呂の中に放屁したる程にも値しない、兩新聞とも近來の與太振りは如何で御座る、寧貫一に請ふて罌丸の垢でも煎じて吞まして貰ふふが宜い。

丸井商店總支配人 今井智能吉

徳川幕府には、本多佐渡という智囊がゐた、曲辰鈴木商店には、金子直吉の懐刀が居

る、一家にせよ、一國にせよ、何處にでも、大黒柱と頼む人物が居なければ、繁昌しないに極まつてゐる、公等碌々の徒の寄り集では、繁昌どころか、却つて衰微を招くが儲もの、其處の呼吸を呑こむのが、總大將の主たる役目である。

人を見るの明、之が將に將たる者の眼目だ、家を興すも亡ぼすも、眼の輝きやうに依るのだ、懐刀を探し求めて、采配を揮はする、斯の如くして興らぬ家は一軒もあるまい、假令智囊を得ても、之を遇するに其途を以てせざれば、充分に手腕を揮ふ能はぬ千里の馬を駄馬同様に、馬糞堆積の馬小屋の隅に押しこめて、酷待すれば、遂には雲を霞と迷出すはお極りだ、千里の馬は、駿馬らしく、柱石は柱石らしく待遇するのが、明將の明將たる所以だ。

今井智能吉君、丸井商店の智囊である、懐刀である、大黒柱である、渠は丸井商店の浮沈興廢を双肩に背負つてゐる、丸井の事業計畫は、一に渠の方寸から割出されて、一點半角の誤りない、渠あるが故に、丸井商店の業務は、日々進展してゐるのだ、斯の如き人材を遇するに其の途を得てゐる、店主亦渠を信じて疑はない、故に智能吉君

は、充分に安心して才能を發揮することが出来る。

着實の氣風は、實業家に無くてはならぬ要素だ、智能吉君は之を具備してゐる、併し其の半面には、犯すべからざる霸氣がある、彼は進を知つて退くを知らざる猪武者でない、又引込思案勝の着實家でない、霸氣と着實とを能く調和してゐる、進べくして進み、退くべくして退くの掛引を、能く會得してゐる、此處の呼吸は老巧者にあらずれば爲し能はぬ處だ。

商賣には資本が要る、まかぬ種子は遂に芽へない、資本要らずの商賣は、泥棒の外にないのは何人も異存のない處だ、商賣は客に依りて立つ、故に客の便利を計るは、商賣の秘訣である、商人は悉く顧客本位であらねばならぬ、ドコの商人でも之を表看板に掲げてゐるが、偕て其の裏を覗けば、言語道斷で、表裏正に反對だ、智能吉君の支配する丸井商店は、信用を基礎に築かれてゐる、其の信用は眞の顧客本位から出來てゐるのだ。

同情といふ言葉は、普通人に最も必要なる如く、商人にも又最も必要である、已が欲

せざる所を人に施さぬのは、詰り同情心の發露である、商店の信用に斯くて得られ、商業道德の基礎は斯くて築かれるのである、丸井吳服店が天下に信用を博する所以、是に存する。

智能吉君は、商業道德を極度に重じてゐる、假令一毛の微たりとも、丸井吳服店の信用を害することあつてはならぬと、日夜肝膽を碎き、總店員を戒めてゐる、世の狡猾な商人は、自分さへ利すれば、人は何うでも構はぬを主義としてゐる、斯様な間違つた根性の商人は商人の假面を被ぶつて、泥棒を働さかねまじき不埒な奴だ、斯んな商店に限つて、碌な品物を賣らない、故に買ふ人は却々安心は出来ない、獨り顧客本位の丸井吳服店は、安心して買へる、是れ信用の賜である。

智能吉君の同情は、關東大震災に際して發現した、幾多の取引先の卸問屋は、悉く罹災の厄に苦んだ、辛ふじて難を免かれしものも、着のみ着のまゝの裸一貫、生命を取り留めただけが儲もの、得意先への仕入帳など、固より顧みる場合でない、普通のズルイ商人は、人の窮困を見て喜び、仕入帳の消失を機會に、仕入代金を踏みにかゝる

左様な奸商、札幌にもチラホラ見ふる、然るに智能吉君は、大震災の報に接するや、直に戦闘準備を整へ、店員を引卒して救援に東上した、商人の戦闘準備は金だ、幾十万圓の金を準備し仕入先の急に赴いたのである。

人の窮厄に處して、同情の涙を流すばかりが能でない、涙を流すだけの同情心が事實に現はれなければ糞の役に立たぬ、彼は能く此理を解するのである、途方に迷ふ仕入先を慰安するのは、仕入金を支拂ふことである、彼は一々仕入先を訪問して慰問し、拂ふに從來の仕入代を以てした、尙且幾万の物品を現金で買入れた、寔に地獄に佛と有がたがつて厚意を謝されたは當然である、斯の如き機敏にして同情ある處置が源を爲して、丸井吳服店の災火に際して、仕入先の同情が翕然として集つた。

一夜にして札幌名物の一に數へられた、堂々たる建物が焼失した、數百万に値する物品を煙にした、寔に夢のやうである、東京方面の仕入先は、急を聞くや否や、一文の口錢も取らず、原價を以てドシ／＼物資を送りつけた、其の額は幾十百万圓に上ぼつたさうである、是れ問屋筋が、昔日の恩に報いたのである、是に於て同情は資本なり

と云ふのが證される、即ち蒔いた種子が生へたのだ、佛者の所謂因果應報の理が能く解せられるのである。

口銭なしの同情仕送りを受けた丸井商店は、不要の故を以て送り返す譯に行かぬ、飽まで現金に替へて、仕入問屋に支拂はねばならぬ殊勝の心掛から、今度は一文の利益なしの原價廉賣を試みた、其の賣上が十数万圓、斯くて仕送品の凡てを處分し盡した是れ皆智能吉君の方寸から割出された美事だ、彼や齡三十臺、尙春秋に富む、將來の發展想ふべしである。

風變はりの資本家 本間久三

浮沈興亡は浮世の常態である、恰も日月に蝕ある如し、曾つて榮華を誇りし百万長者一朝にして乞食の群に陥るもの珍からず、街頭に食を乞ふもの、亦一躍して富豪に列

せぬとも限らぬ、人間は絶へず運命に翻弄されて居る有。

有爲轉變の特に甚だしきものを、霸氣ある商業家となす、乾坤一擲の壯舉に出づる商人は興るも早い、亡ぶるも亦早い、其の意志や、廣大なり、興る必ずしも喜ばず、亡ぶる必ずしも悲まず、洒々落々たり、吾が本間久三君の如き、商業家として此の激變を体現したる一人であらう。

曾つて久三君は、本道商界の覇者であつた、其の商才と機略とは、正に雜穀王としての聲名を馳せた、其の勢力や故高橋直治君と伯仲の間にあり、若し彼等を元龜天正の群雄に比せば、本間は今川義元の如く、高橋は織田信長の如し、義元が桶狭の一戦に慘敗を招いたるは、眼中英雄なき自負心の結果である、既に自重心なし、假令暴虎憑河の勇あるも、勢ひ蹉かざるを得ざるなり、血氣に逸りし久三君は、見事に失敗したのだ。

一たび商界に失脚して、再び立つ能はざる程の創痍を蒙つた、之が普通人ならしめば愈々昆古垂れる處であつた、然も彼の勇氣は毫も挫けない、更に一層の強味を加へて

来た、彼は絶世の智勇を鼓して、復活を策した、遂に今日は相變らず資本家として世に立ち、多額議員互選者の資格を有するに至つた、彼の精力は實に絶倫である。要するに彼は不倒翁の如し、倒さんと欲して倒れず、投げられて立ち、轉んで起ち、底力の強い處に眞價値を見る。

久三君は風はりの資本家である、一般事業家や商業家に對する資本家たるに止まらず政黨に對しても、又政客に對しても、投資してゐる、其の籍を憲政會に置くが故に、支部のために投資を吝まざる如く、己れの欲する政客のために、選挙費用の一部を應援したる例に乏からず、曾つて北林屹郎が衆議院議員の候補を後志管内に争ふや、窃かに數千金の運動費を寄附したりと聞く、北林氏とは平常餘り仲好くない、其の好感を有せざるにも拘はらず、彼は頗る北林氏の立場に同情し、一切の私情を抛つて、一臂の力を添ふるに至つたのだ。

同黨員に向つての應援は、深く怪むにたらず、而も道會議員選挙に當り、自黨の候補者を差し置き、彼は中立の納谷信造を援けたり、此事や痛く支部員の激昂を招きたる如し、而も久三君は平然たり、蓋し彼の卓越せる政治意見は、地方自治を政争の渦中に投じて、破壊するの不可なるを知るからだ、彼の公正なる意見は、識者の嘆稱措かざる所である。

政治經濟上の識見抱負を現在の憲支部に需むる、恐らく彼に超越する程の卓見者を發見するに苦しむ、一柳支部長は、支部の音頭取りなるだけ、其れだけ凡ての點に於て卓越したる筈なるも、之を久三君に比して、遜色なきを得ざるべし、概括すれば、一柳は局部的なり、本間は一般的なり、一柳氏は稚氣多く、本間は老熟せり、想ふに支部の政策に於て一柳の因循姑息なるに比して、本間の豪宕卓落、茲に意見の扞格を來たさざるを得ない、本間氏は現に籍を憲政會に置くも、心は既に憲政會を去れり、記者は尋常一様の資本家に非ざる本間氏が、近き將來に於て卓勵風發、何等かの快舉に出づるを疑はぬ。

本道の藥種王 山形卯三郎

奈良の大佛の釣鐘は、日本三大鐘の一に數へられるほどの、素敵に大きな鐘である、其の重量は何千貫で、十人や二十人掛りで、一氣に押した處が微動だもしない、然るに人間の一念は恐ろしいもんだ、其れほど大きな鐘でも、長の年月を経れば親指一本の力らで動き出すさうだ、此の理窟は、雨垂れが敷石を穿つのと同一だ、人間も難行苦行の功を積めば、一廉の財産も出来れば、人物も立派に磨き上げらる、兎角人間の成不成は、耐忍にありと、今更道學先生の説法を真似るまでもない。

山形勉強堂と云へば、北海道の藥種王として、其の名は津々浦々にまで響き渡り、誰一人知らぬものはない筈である、卯三郎君は其處の本尊様だ、一代にして今日の富豪となり、所得調査委員、札幌區會議員、札幌商業會議所議員となり、其他の公職を有し、札幌市に取りては、無くて協はぬ必要の人物となりしまでは、人知れず苦勞を積だものだ、他人の恵に依りて、夫婦共稼をなし、令夫人克く良人の業を輔け、慰め

且つ勵ました、實に賢夫人の名に背かない、當代稀に見る貞淑の人である、則ち卯三郎君は、初め身を卑ふして、今日の位地を占め得たのである、是れ則ち一指の力を以て大佛の大鐘を動かすに至つたのと同じの結果である。

卯三郎夫婦は、熱心なる佛教信者である、身を持つる謹嚴、一言一行を苟もせず、日夕只一に如來の意に背かざらんことを是れ恐る、社會奉仕の觀念の熾盛なるは、要するに佛果がら流露するのである、

須彌山の大海を映するが如く如來の威光は、諸の大衆を蔽ふ、日の初めて出で、一切の闇を破るが如く、世尊の毫相は、偏ねく佛刹を照す、月の圓滿にして、光明熾盛なる如く、佛徳は圓滿にして、慧光普く照す、譬へば蓮華の水に著色する如く佛は世に處して、染著する所なし、師子王の林野に吼ふるが如く、人中の獅子は性空を唱へ、一切法の非有非無を説き、邊見を離れしむるを獅子吼と名く

是れ大藏經に見ふる、淨莊嚴王の偈であるが、卯三郎は朝夕に之を唱してゐるさうだ以て彼が現世に處する、思想と性行の一斑が推される。

既成政黨に對する理解は、誰よりも彼よりも、より多く憲政會に有して居る、然れども彼の態度は公正である、邊見に囚はれて、飽まで横車を押す愚を敢てしない、故に彼は黨人でない筈である、蓋し黨議に拘束されて、公正の見を葬るを嫌ふからである、記者は孰れの方面から觀ても、卯三郎君を穩健着實、公に殉ずるの人と推獎したい。

札幌魚市場の頭領 中西八百吉

世に無名の英雄が居る、凡そ天下に事を爲し、名を揚げやうとするものは、其の智慧を借り、其の策略を授からんものは稀れである、斯く言ふと、操り人形が、黒幕から操られて活動すると同じ、記者は世の成功者の凡てを目して、操り人形視せんと欲するものでない、固より自力本願の人に乏しからず、然れども他力本願に依る人が多いと謂ふまでだ。

黒幕とは指導者を謂ふのだ、輔佐役の事を謂ふのである、善き相談相手を有するものゝ事業は、榮ゆるに極まつて居る、故に事業の成否は、相談相手たる人物の良否に依ることになる、例へば一柳仲次郎今日の失敗は、暗愚なる相談相手を有する結果だ、玉葱貿易の失敗も政客としての失脚も、彼の周圍を包圍する、目先の見へない、言はば盲目同然の、無能、無策、無識の雜輩を驅り集めた結果である、詰り他が失脚せしめたのでなく、自から好んで跪づいたのだ。

八百吉は思慮深き人物である、理論家にして又實際家である、曾つて高等師範學科を修めて、教鞭を執つた、人を教養する位地に立てる彼は、恭謙の資質を具へたに相違ない、線香花火に類する、當座限りのパツパ事業は、固より好む處でなかつた、既にして法律經濟政治學を専攻するに及んで、彼の思想は幾分變化を來たしたるも、彼の人格を形くる、溫良恭謙讓の根本資質は尙依然たりである、如何なる場合に遭遇しても、欽すべき靈光を放つのみで、之を遮掩し能はぬ、人呼んで君子人と推賞するもの決して溢美過賞でなからう。

彼の性格——性格と云よりも寧趣味の變化は教育者たるの念を絶ちて、實業家たらしめた、一たび官吏となつて志を伸べんと欲したるも、情實一點張りの官海に游泳するの術を知らない、否知らざるにあらず、知つて之を行ふには性格が餘りに廉潔である、腰辨の將來を深く侮つた彼は、翻然志を轉じて、日本郵船會社に入つた、次で二三の大會社に轉勤して大に商才を磨いた、既にして會社の祿を食むを潔とせず、獨力を以て石材及び木材業を始めた、然れども業態意の如くに進展せず、是に於て方面を變へて本道に渡つた。

心機一轉せる八百吉は、明治三十五年の暮札幌に流轉して、札幌の長老對馬嘉三郎の番頭となつた、此處で醬油醸造の味を嘗め、後年獨力を以て醸造業を營んだが、醬油屋たるには餘りに人物が出来過ぎて居た、此處で傍ら石炭屋を始め、隨分収入も多かつた、彼が全盛を極むるについて、財産造成の方途は種々あつたに相違ないが、鑛山成金の結果なることを否む能はぬ、兎角に相當の資力が出来て、錚々たる實業家の仲間入が出来、新設會社は彼の力を假らねばならなくなつた。

北海道採炭株式會社の起るや、之が常務取締役となつた、定山溪鐵道會社の取締役も勤むれば、一印魚菜會社の取締役も勤め、北海道造營會社の顧問として世話を焼いた斯の如く彼は實業界に重を爲されたのであるが、悲い哉、彼は腹心の子分を有しない無名の英雄と稱する相談對手を得なかつた、之が抑も大成すべくして、大成し得ない缺陷である、彼の識見、器略、材幹は僚輩を抜き、寔に珍とするにたるけれども、自由の手腕を揮ふには餘りに故障が多かつた、故に時としては孤立の窮境に陥るの已むなきに至つた、此の缺點は誰れよりも彼よりも、彼自身が詳しく承知の筈である。

稚内埋立の統一を策する上に於て、彼の手腕は甚だしく冴へて居た、統一後の策戦を誤らずんば、將來莫大の利權を握るに難からざるも、真面目なる帷幕の謀士を得ざるため、或は事の計畫倒れに終るなきを保せず、想ふに八百吉を露骨に批評すると、才餘ありて力たらずと謂ふことになりはすまいか。

翻つて政治的方面から觀察すれば、彼は曾つて本道憲政派の重鎮だつた、其の實力は一夜作りの政治屋たる、一柳を壓するにたる、而も一柳の下風に立つを餘儀なからし

めしは、要するに野武士の一團を懐柔するの術を講ぜざるが爲なり、是れ彼の性格の然らしむる處にして、彼は野武士團懐柔の術策を弄するよりも、寧ろ首陽山に隠れて薇を食ふの快に如かざるを得たのであらう、一たび道會議員たらんとして、野武士團の迫害に遭ふて失脚し、爾來悞々として樂まず、遂に因縁深き憲政會と絶つと同時に、念を政界に斷ち、専念實業に従事す、今や一印魚菜市場會社の社長として、天成の商才を揮ひつゝあり、魚市場の興隆、期して待つべし。

北門銀行取締役 鷺見邦司

適として可ならざるなき人間を、多技多能と謂ふ、何をさしても、結構間に合ふ、之が潰しの利く人間だ、融通の利く人物だ、全体人間は智慧の凝まりであるべきはづで何事によらず、或程度までは、才能を働らかせられる、固より才に長短はある、能に

深淺ある、併し専門に屬せざる限り潰しの利くはづである、記者は敢て造物主に向つて人間製造の極意を聞いた譯でないが、造物主の意志を受賣すれば、人間は融通の利くやうに造られてあると云ふことに歸着する。

鷺見君は多技多能の人である、何をやらしても、結構間に合ふ重寶な人物である、餅屋でも、酒屋でも、會社でも、銀行でも、何でもムざれである、斯の如きは、常識が圓滿に發達し、事々物々に就て趣味を有するからである、此の種の人物は、假し裸一貫にほうり出しても、窮する處が無い、寔に都合よき人物である。

官吏にしても、政治屋にしても、共に可能性を有する一人にして千手觀音の働らきをする、寔に重寶である、世の穀潰連中は鷺見君に見習ふが可い、先づ彼の略歴を一瞥せよ、明治二十三年、普通文官の資格を得、埼玉縣收稅吏を振出しに、翌年には道廳屬に轉じ、河西支廳第二課長の役目を、圓滿に勤め終はして、能吏の評判を取つた、想ふに此の評判は其の能く潰しの利く處から起つたのであらう、即ち才氣の煥發で、多藝多能の本色を發現したのだ、由來人物本位にあらざる役人の任用が、窮屈なる官

吏任用法に支配せられる以上、官海に游泳する多くの役人は、情實とか縁故とかで、幸不幸、運不運が岐かれる、故に薯づるとか、南瓜づるとかに依りて幅が利く、眞の人物、眞の才能、眞の識見、眞の手腕などは、任用を度かる尺度になつて居ない、實に不都合極まる任用法である、鷺見君にした處で、判任官たり得るだけの資格は手に入れて居るが、任用法の存する限り、登り詰めた處で矢張り判任官の領域を脱しない勿論特別任用によりて支應長の位地には登られる、併し天ブラ高等官として、威張り得るのが關の山だ、是に於て鯉の瀧登りを眞似やうとするだけが愚の至りと言ふことになる、此處が心機一轉の爲し處だと悟つて見れば、支應の課長位の椅子をかじるの恥かしくなつて來た、十年間の官吏生活を、奇麗に抛ち、足を實業界に投ずるに至つたのだ。

官界にオサラバを極め込んで、彼は實業界に身を投じた、彼は何故に一身の處置を實業に選んだか、是には無論幾多の理由が存するであらう、記者の所見を以てすれば、社會に活動する資本を作らん爲であると信ずる、正しく活動資金調達の爲めであらう

世に所謂「死金」を作らんためでは決してなからう、何となれば彼は一たび念を腰辨に絶つたとしても、將來一廉の政治家たらんとする青雲の志は抛棄すまいと信ずるからだ、恒産なき者は恒心なしと云ふのが、我が政治界に飛躍し、若くは飛躍せんと試むるもの、通弊だ、此通弊に陥らざらんがために、所謂「活動資金」調達の必要が起きたのだ、彼は存外深慮の人物である。

政治家を大中小に區別すると、「國」政治家あり、「道」政治家あり、「市町村」政治家がある、從來の實例に依ると、市町村會議員から、道府縣議員、次で衆議院議員、之が順序である、無論例外もあるが、多くは此の階梯を踏んで居る、彼は初期の道會に推されて道會議員となつた、此の時に於ては將來の代議士を以て任じたであらう、併し道會議員の一期を終へた時、陣笠代議士になつた處で、何程の利益がある、何程の名譽がある、「起立議員」の尊稱を辱ふするは、決して家門の榮を誇るにたりない、却つて恥晒らしである、日夜營々として、政黨の小走り役を勤むるまでに立身しても、運強く國政料理番の末席を汚がすまでには、道程甚だ遠し、詰りは天に梯して登る愚に

陥ること必定だ、如何に政治慾旺盛なりとは云へ、窮極を達観すれば、大臣次官の迷夢は、豁然として覺醒せざるを得ない。

是に於て大政治家たるの觀念を絶つた、道會議員を一期にして止めたのは之が爲めであらう、併し本道の拓殖に關しては、深き智識を有する、拓殖大成については、其れだけの資金を要する、而して拓殖の速成を、役人任せにするの不可を知る彼は、拓殖資金の民間放下の急務を認めて居る、之を目的に設けられたる北海道拓殖銀行の貸出しにつき、大に研究する處あり、遂に銀行に入つて、鑑定課長と云ふ重要な位地を占めた、次で拓殖貯金銀行の監査役となり、轉じて札幌水力電氣株式會社の支配頭となり、縦横に手腕快を揮ふた、固より札幌水電は、獨占事業として、優越の位地を占むるもの、其の業態が異常の進展を観るは當然であるが、彼の措畫宜しきを得るに依るは勿論である。

今や電力の統一は、電業界の大方針となつて居る、今日は各地に幾多の水力電氣會社分立するも、將來は統一糾合されねばならぬ、會つて札幌市は水電市營の計を畫し、札幌水力電氣會社買収を試みたが、見事に失敗した、是に於て鷺見君は電力統一の方針に依り、王子製紙會社と併合の議を起し、遂に大會社と對等の條件を以て併合するに至つた、想ふに本道電力の統一は、現在の情勢を以ては至難の業に屬す、併し二大別の程度には纏り得るであらう、其の一は王子製紙會社だ、他の一は富士製紙會社だ今日は北海電燈會社が、王子の向ふを張つて居るが、行く／＼は北海電燈は富士製紙に併合せられるだらう、札幌水電が併合の議を練るに當り、一部株主中には北海電燈と併合するの得策を主張したやうであつたが、苟も目前の小利でなく、永遠の大利を見越したならば、有力な王子製紙を選ぶの利益なるに如かずと云ふ意見に賛同し、畢に王子に併合するに至つたのだ、是れ即ち鷺見事務の先見の明に依る、既に札幌水電が王子製紙に嫁せるに於て、鷺見君の身は閑散となつた、是に於て彼は推れて北門銀行の取締役に就任するに至つた、斯の如く彼の經歷は變化多し、今後如何に變化し、又如何に發展するか刮目に値する。

札幌温泉土地會社專務 高倉安次郎

天下の糸平が所謂天下の糸平としての名聲を博するまでには、随分と苦勞を積んだもので、其の行路は決して平々坦々たる長安の大道を疾走する如く單純でなく、極て複雑する、小學先生の言草ぢやないが、豊臣秀吉が信長の草履取りの小僕から、天下を掌握するに至つたのも、今日日銀總裁市來乙彦が、同郷の先輩田尻稻次郎の玄關番から身を起すに至つたのも、矢張り人知れぬ辛酸を嘗めて報はれた結果だ、彼等は一度風雲に際會して、遂に功業を樹つるに至つたのである。

世上有り振れた風雲兒と云ふのは、重に政治についての特許語の觀がある、併し是れ偏見たるを失はない、大臣も商賣なれば、實業も商賣である、爲す事、行ふ處、悉く商賣である、政治界に風雲兒ある如く、商業界にも風雲兒がある、吾が高倉安次郎は事業界の風雲兒である、實業を基礎にした本道政界の風雲兒である、未だ不幸にして政客の名を中央に馳する能はざるも、本道事業界の覇者たる雄名は、夙に遠近に喧し

きを否む能はざるである。

高倉は近江の人だ、明治六年の霜月に茶商の家に生れた、彼の性は聰明である處から深く學問を修めざるも、漢英の智識は一通り修得して居る、固より學問で飯を食はずに、手腕で食ふを本懐としたからの事だらう、然るに聰明なる彼は、宇宙を大學校と思ふて智を磨いた、宇宙の森羅万象は悉く彼の教科書でつた、斯くて彼は宇宙大學に入りて實物教育を受けたのである、此處が彼の聰明な處でもあり、又彼の非凡な處でもあるのだ、言はば彼の才器は、天地の自然に接して養はれた。

一二が四、二三が六、是れが動かすべからざる道理である、書物は此の動かすべからざる道理の原則を教ふるに過ぎぬ、之を各般の事物に活用するにあらずんば、學問は更に効能なし、此の單純な物の道理を解し得る腦力の人ならば、敢て深く書物と首引して、腦神經衰弱を惹起するに及ばぬ、例の雨宮敬次郎は無學の隊長であつた、處が彼の經濟財政上の智識は、東京帝國大學の專問教授等の舌を卷かしたと聞いて居る書物上では無學者でも實物教育を受けた點から言ふと、即ち無學の有學であるのだ。

ウォルヅウォルスは、世界の文豪であつた、彼の書齋には、古今の珍書が堆を爲すだらうと思ひの外、一冊の書物を見出す能はずと云ふことを聞き、彼の詩文の材料は郊外から拾ひ來つたさうだ、吾が高倉君も郊外求智の仲間である、彼の智慧は泉の如く滾々盡くるを知らず、彼一たび冥目すれば、事業上の材料は、積まれて山を爲すのだ記者が高倉安次郎君の智慧は、書物から授からずに、天から授けられると謂ふのは、之が爲めだ。

商賣は道に依りて賢しと謂ふ、併せて好きこそ物の上手なれと云ふ、如何に天才的商才を有する利口者でも、氣相合しなければ發達しない、否々ながら、己を得ずして從事する商賣が、成功した例しない、是れ畢竟商賣に興味を有せぬからである、是に於て何の事業に限らず、氣合の必要なるを否む能はず、彼は父が茶商なる故を以て、紀州の貿易茶商安入某の店員となつて、支那方面への製茶輸入業に従つた、製茶商賣は上品だが、何うも氣に合はぬ、將來製茶商として名を揚げた處で満足しない、蓋し其の事業が性質に適しないからである、其處で北海道に渡りて一旗揚げやうと志し、函

館に來りて商店の小僧たりしも、小僧の取扱ひを受くるを潔とせず、飄然として歸國した、けれども初めて北海道の空氣を吸ひ、併かも其大陸的な雄大の風光に接しては將來の發展地は北海道の外なしと思ひ詰めた、恰も好し、明治三十一年北海道視察團が組織された、即ち彼は其の委員に選ばれ、東道の主人役を勤めて再び渡道した、一團を率ひて各地を視察した結果が、遂に北海道に惚れ込んで仕舞つて、土着心を固め居を帶廣に卜し雜貨店を開き、次で米穀商を兼ね、商業の基礎を築くに至つた。

此等の事業は性に適した、彼の天才は愈々益々發揮された、彼は幾多前人の失敗に鑑み、専ら健實を旨とした、浮調子は彼の最も忌む處、浮雲に似たる榮華を夢みるを敢てしない、鞏固の上にも尙一層鞏固ならしめんとするは、彼の事業方針であつたのだ聞く經世的眼識を有する事業家は、宇宙の萬物を利用し盡さざれば己まない、一も廢物と目すべきものはない、否廢物があつても、之を有効に利用するから、遂に廢物なしと言ふことになる、高倉君は經世的眼識を有する事業家である、例の利用厚生の文字を、實地に當箝め得られる人物だ、世の屑々たる事業家と撰を異にする。

彼の事業振りを通観すると、眞に健實である、急進的でなく漸進的である、恰も基礎を固めて石垣を築き上ぐるが如し、彼は米穀雜貨商として基礎を築き、今度は牧畜業に手を染めた、明治三十六年帯廣町の隣地音更村に二百町の貸付を受けて牛を飼ひ、牛乳屋となつた、是れ彼が開墾に用意周到な点だ、開墾して耕作するに肥料は附物だ、其の肥料を製造するために牛を飼ふたので、所謂肥料の自給自足の、經濟的方針から割出した方法である、既にして肥料販賣を始め、附近農家に人造肥料を使用せしめて大に農作物の増收を計つた、農民悉く彼を徳とす。

本道の拓殖事業は、今尙遲々として進まない、明治四十年頃に於て特に然りとす、彼は此の事が利用厚生原則に反するを頗る遺憾となし、是に拓殖に貢献するの決心を堅め、明治四十四年には、更に河東郡然別に三千町歩の未開地を拂下げて、大仕掛けの牧畜業を營み、北米加奈陀よりエシヤ種乳牛を輸入し、幼稚なる畜産の改良を企て一面郷里より農民を募つて、土地の開墾に従事せしめた、斯くて雜貨店の主人公は一躍三千幾百町歩の大地主となり、大牧畜家となり、其の名聲を道の内外に馳するに至

つた。

由來秩序ある事業の成功せぬ例しない、世には運を天に任せて、一六勝負に没頭する事業家に乏しからず、されど彼等の多くは失敗の轍を踏んでゐる、偶々成功の觀あるも、其は即ち一時の僥倖に過ぎない、一時まぐれ當りの成功者は、忽ち鞍を覆がやして一文なしの素寒貧に甘ぜざるを得なくなる、何となれば其の成功と云ふも、砂上に建てられたる家屋同様だからである、覆へらざらんと欲するも、豈得べけんやである高倉安次郎君は、少なくとも十勝北見方面に於ける、事業界の中心人物となつた、其の手腕の優秀なる、凡てに於て必要の人物となつた、看よ彼の有せる肩書を町會議員學務委員、相續稅審査委員、十勝産牛馬組合長、衛生組合長、所得調査委員、北海道東部雜穀組合長、十勝川治水會幹事、十勝農産組合長、道會議員、銀行會社の重役、一に彼を煩はさざるは莫し、斯くて高倉安次郎君は、本道の代表的人物と推獎されるに至つたのだ。

政治は道樂商賣である、忽ちにして百万の身代を摺りつぶす危険が伴ふ、併し同じ道

樂でも藝妓買ひして財産を摺り潰すに比すれば、幾分か上品な處もあり、幾分が人聞きも宜いが、此の位高價な道樂はない、昔は相當の資産を有した代議士も、今は万金の選挙費用にさへキユー／＼たらざるを得ない連中が、眼前に數限りなく横はるの證據だ、固より政治商賣を專業とするから、遂に此の危険に陥るのだ、末は大臣を夢みて、盛んに天下國家の事を論ずるは尙可なるも、目的の大臣に有りついた代議士は、先ず十指を屈する位だらう、多くは參與官の椅子さへ拾ひ得ない、其れでも一廉の政治家の積りで、太平樂を並べ、自からを慰むる外あるまい。

詰り政治を道樂にせず、專業にしようとするから、憂目に遭ふのだ、故に利口者になると政治道樂は、容易に始めない、道樂に要する贅澤費を積んでから始むる、然るに初めは身代に疵のつかぬ程度に心根を締めて掛つても、偕て段々趣味が湧き、一步深入りすると、氣持が段々太きくなつて、遂には身代摺りつぶしの仲間入りすることになる、其處に行くと田中清輔あたりは却々の智者だ、未だかつて一度も代議士にならうと云ふ不見を起さない。

高倉君は一たび代議士たらんと欲して失脚した、熟々其の失脚の跡を察すると、失脚は固より當然である、勿論人物としては不足はない、財産も豊富である、政治道樂を始むるには適當して居る、併し當時は自から進んで道樂を思立つたのでなく、他より勧められて、嫌々ながら乗出したのだ、其の氣満ちない處に弱味がある、困より勝敗を度外に置き、勝つも可なり、敗るも亦可なりと云ふ戦法では、真劍の戦争が出来る筈がない、若し必勝を期して、四邊に氣兼ねするなく、思ふ存分に戦つたならば、彼は決して失敗を招くに至らなかつた、今や高倉君の財力は、愈々充實して來た、假令二三十万金を浪費した處で、豊富なる財産は枯渴の憂あるまい、政治道樂を始むるには、鬼に金棒だ、想ふに今後は政界に、大飛躍を試むるであらう、又斯くすることが政治的義務ではあるまいか。

彼の事業慾は益々旺盛である、十勝方面に於ける水電事業の勃興は、彼の啓發に頼ると言つて然る可し、彼の札幌温泉土地會社の如き、札幌市繁榮の一策として、彼が張本となり計畫したるもの、實は定山溪温泉の廢物利用策である、彼の眼界の高遠なる

には敬服せざるを得ない、彼の財力は優に本道の多額納税者たるに拘はらず、其の名を逸するは、本籍を滋賀縣に有するからだ、願くは政支部常任幹事として、政治的能力の發揮を吝む勿れ。

札幌病院長 醫學博士 林 敏 雄

伊勢大廟の所在地として、國民精神の淵源として小縣ながらも其の名を天下に輝かす三重縣は、古來名所舊蹟に富んでゐる、五十鈴川の清流に身を清め、天を磨する老杉の間を縫ふて、神代ながらの神域に進むとき、誰しもが崇嚴の氣に打たれて頭首自ら下る、外宮、内宮に參拜した者は、必らず二見が浦に日の出を拜し、天の岩戸に神代をしのび、健脚を誇る者は更に、万金丹で知られた朝熊山の峻峰に登るのが常例だ。二見が浦に對して鳥羽浦がある、御木本の眞球員養殖場の所在地として、また志州茶

の産地として知らる、古來この地の女は海女となつて稼ぎ、男は大工職人として、一年の半ばを國外に出稼ぎする風習が、今尙ほ残つてゐる、女尊男卑は志摩の國の奇習である。

眞珠王を産んだ三重縣は、古來偉人が随分出てゐる、現代では三寸の舌端よく桂巨大公を惱ました清廉の士尾崎行雄や、利權漁りを本職とする我利々々亡者の寄り集りである、今の政治家の中で、清貧を以つて甘んじ、人格の士として、敵味方に重きをなす濱田國松老もまた三重縣の産んだ傑物である。

この偉人の跡を追ふて生れたのが、即ち現時札幌市立病院長の林敏雄君である、彼は明治二十一年四月九日、春光麗らかな鳥羽港に呱呱の聲を揚げ、長じて獨逸學協會中學校に入り、第一高等學校を経て、大正五年に東京帝大の醫科大學を卒業し、次いで同大學病理學教室に山極、長與兩教授の下に學び、更に同大學附屬傳染病理微生物學研究室にて、斯界の權威長與教授の指導を受けた、其後滿三ヶ年間本邦内科醫の泰斗入澤博士から内科の實地指導を受けて造詣あり、又更に進んで大正十一年渡歐、主と

して「ミュンヘン」市「シュワーピング」市立病院で胃腸病の臨床、胃直達鏡検査法並びに「レントゲン」診断學を研究し、更に「ウキーン」市醫科大學「ホルツクネヒト」教授及び「ライプツヒ」市醫科大學「アスマン」教授に従ひ、内科的「レントゲン」學を修めて、十二年末に歸朝した。

この學歴が如實に物語るやうに、彼は三重縣の名物神代杉のそのやうに、その專攻するところに向つて一直線に歩みを進め、「胃潰瘍成因の實驗的研究」外數篇の學位論文を提出して、大正十二年七月十日、年齒僅かに三十六才にして名譽ある醫學博士を授與された、彼が尋常一様の博士にあらざるを知るに足りる。

勤勉力行、これは成功の秘訣である、彼は己が進むところに側眼も振らず直線に突進し、今日の成功を贏ち得た、彼の醫學に關する智識、殊に内科における實驗的手腕多く比類を見ず、我が醫界の珍とする處である、彼の實力と聲望は、歸朝後直ちに札幌病院内科醫長たらしめ、大正十四年三月二十三日、多數儕の輩を凌ぎ、三十八才にして院長に推された、市立札幌病院は北大附屬病院と共に、本道に於ける模範病院で、

その施設よろしきを得て範を他に示すべきであるのに、沈滞した水たまりには情實のウジ虫が生じ易く、數年前より對市會との情實から、種々の惡風習生じ一時批難されてゐた、然るに彼が院長に就任以來は快刀亂麻のメスを振ひ、情實を打破し、惡弊を掃蕩して院務の大刷新を企てた、即ち林新内閣に列するは悉く重望を負へる大醫で、内科醫長は林院長之を兼務し、副長は百石又城、外科醫長目良亮三、副長は長島太郎、眼科醫長中村競、副長波々部徳藏、婦人科醫長瀨川寅吉、副長萩島辰之助、耳鼻科醫長橋本徹雄、小兒科副醫長華岡雄太郎、皮膚科副醫長川上茂雄、藥局長濱武規熊其他專屬醫員十一名と、レントゲン擔任技手一名あり、看護婦及同助手を合して七十三名の大身代、各科一流處の名醫が手腕を揮ふので、患者遠近より殺到し來る盛況なり、昨今日々の外來患者約三百名、入院患者常に百五十名を下らずと云ふ、一時兎角の批評を耳にせぬでもなかつたが、林博士が院長として院務を統ぶるに至り、多年蟠屈せる宿弊は掃蕩され、各科の統一は圓滿に保たれて偶語者なく、和氣洋々の間に執務されて居る、今や札幌病院の名聲噴々たり、従つて患者の多きは當然である。

茲に特記すべきは林院長の英斷に就てである、過般内閣書記長にも擬すべき、病院書記長の更迭を行ふた、春宮某に代ふるに公正廉直なる齋藤知雄氏を以てした、記者は敢て曾つて札幌病院が受けたる幾多の批難攻撃が、書記長たる春宮某の不徳、不用意不謹慎、不廉潔に因るとは斷言しない、けれども醫師の技術以外に病院の事務についての苦情論難は、書記長の舉措に因れるの大なるを否み能はぬ、今や齋藤君代つて書記長たり、林院長安意して院務を任かし得るであらう、而して内外の積弊が必ずや一掃されるであらう、若夫れ病院の上下舉つて己を持する清廉にして潔白、一點半角の私心を挟さず、職務に忠實であつたならば、札幌病院の名聲と信用はいやが上にも重疊充揚するであらう、是れ一に弛緩せる院紀の振肅に依るものにして、林院長の功勞決して没すべからず。

土木建築業界の明星 山田足穂

望ある身と谷間の水は暫し木葉の下くぐる」之が人間成功の要素を説破した都々一だ人間が社會に頭角を現はすまでには、艱難辛苦が伴ふ、此艱難を征服して始めて事功が奏せられる、其れには忍耐が必要だ、忍耐とは即ち此の征服力の根源を意味する、溪水が滔々たる大河を形成するまでは、木葉の下を潜ぐつて流れるやうなもんだ。成功は機會に乗ずるを便とす、併し其の機會の到來するまで、安閑と待つのは愚である、機會は待つべきものにあらずして、作るべきものである、偉人傑物と稱するのは畢竟機會を製造し得る人を謂ふのだ、機會を作りも得ず、乗ずることも出来ない人間を、凡人と謂ふ、世の中には、醉生夢死的の凡人だらけで困る。

自己の運命を推開するについての天敵は、依頼心である、口を開いて牡丹餅の棚から轉がり落つるを待つ底の人間である、斯やうな意氣地なきものは、到底人の下風に立つて、頭が上がりず、社會の生存競争に打負けて、國家の穀潰しとなるが關の山だ、

試みに看よ、古今の俊邁は、自から進んで自己の運命を開拓した勇者でないか。

一二の例を引くと、世界の自動者王と謳はれる、米國のヘンリー、フォードは、貧乏農夫の子で、電燈會社の夜番から立身した、ローマの哲人エビクタスは奴隸から身を起した、天略歷程の著者パンヤンは鑄物職工だつた、吾が山田足穂君の手本としたのは、フォードであつた、其れは世界一の自動車王となるまで嘗めた艱難、而して之に打勝つた旺盛な勇氣を手本としたのだ。

山田足穂君は、明治十三年、日蓮聖人流寓の地、佐渡が島に生れた秀才でありしや否やは記者與かり知らず、而も瘦我慢強く、負け嫌ひの性格を有した事だけは、確かに聞及んでゐる、俗に云ふ腕白小僧の頭領であつた、喧嘩大將であつた、敵が一つ打てば二つで打返やす、取り組んで組敷かれたら、罌丸に喰ひついて勝を制する、此の負し魂が今日成功の素地を作つた所以である。

尺蠖の伸びんとするや先づ屈す、其の屈するは伸ぶるの準備だ、けれども勇氣なきものは、屈した儘に往生申してしまふ、恰も浮ぶ等の潜航艇が、機關か何かの故障のため沈んだ切りで何年経つても浮揚がらぬと同様だ、吾が山田足穂君は、屈した切りで伸び得ないと云うやうな、無氣力の人物でない、一たび發展の機會を捉へたならば、踴躍之に乗ずるの機を誤らない。

彼は初より土木建築請負業者たらんと志したでなく、中途にして志の立替をなしたぢやないかと思はれる、佐渡は山本悌二郎、今現に政友會の一方の旗頭たる山本君發祥の地である、だから年少氣鋭の山田君を唆つて、或は將來大政治家たらん慾望を唆つたかも知れない、然し能く政治屋の内幕を覗いて、嫌氣が生じ、遂に心機一轉して、一生を實業に托することになつたやうだ。

空拳を揮つて自家の運命を推開するには、廣場に限る、豫言者故郷に尊ばれずだ、寧ろ未開地、北海道に渡りて、一旗揚げやうと、斯ふ決意して渡道したのが、明治三十八年の蒸し暑き今頃であつた、兎も角も小樽の北辰合資會社に入つて、當分冷飯を喰つた、其處では志を伸ぶるにたらずとあつて、方向を札幌に轉換して、横山組土木請負業の帳場に住み込んだ、帳場さんくで大に持てた、ボロイ儲は請負業に限ると見

込をつけ、茲に愈々土木請負業者として、身を立てんと決意した、其の帳場さんたる間に請負業の呼吸を呑込み、秘訣を覺へた、遂に獨立營業を開始して今日に至つたのである。

政治家の願望を抛ちて土木請負業者となる、随分激變に相違ない、併し之が天分としたならば、宜しく安意すべしである、君や尙春秋に富む、請負業者として充分の資質を有す、今日多額議員互選者たる財力を有するに至つたのは、是れ一に努力の賜である、今後益々奮勵努力せば、遂には全道請負業界に覇たるを得ん。

多角多面の實業家 足立庸三

此の親にして此の子ありと、好く世間で言ふ、此の意味は賢愚兩様に共通する、親賢にして子は愚なるも、此の親にして此の子ありだ、親愚にして子賢なるも矢張り此の

親にして此の子ありだ、堯の子に丹朱あり、舜の子に商均あり、是は是れ不肖の子の標本である、想ふに朱も均も、其れほど馬鹿者でなかつたであらうが、親共が餘りに圖抜けた人格者であつた爲め、子供等の光りが薄すかつたに過ぎない、之を不肖の子として一概にコギ卸ろすはチト酷だ。

ズツト世相を見渡すと、如何にも不肖の子だらけである、親勝りの子は、堆砂の中に金を拾ふやうなものだ、看よ、大政治家、大實業家、大富豪と云ふやうに、兎角冠するに「大」の字を以てする人物の子供は、多く不肖の子と斷じて宜しい、其の親勝りの子は、貧乏の家か、無學者の家に育つた子供に多いのは、詰り親共が社會の下層にくすぶつて現はれないからだ。

人生百二十五歳と云ふ大隈侯の筆法から行くと、吾が足立庸三君は、當歳僅か四十五の鼻垂れ小僧の格だ、此の小僧却々の利口者で、學あり、識あり、膽あり、勇あり、當今得がたき逸材である、若し大隈流の年齒計算法から推すと、庸三君は神童と持囃され得る人物だ、寔に乃父の名を辱かしめざる底の人物——更に修養を積めば、乃父

に勝る人物——たるは、是れこそ十目の見る處で、十指の指さす處ではある、即ち善意に觀た、此の父にして此の子ありと言ふことになる、斯く言ふと乃父民治君の人物を管見するの必要が起つて來た。

足立民治君は、本道拓殖の功勞者であり、蠶糸業の先達であり、札幌の長老であつた君の一生を通覽すると、波瀾多く、曲折に富んで居る、先づ戸籍から調ぶると生國は美濃國、明治の初年に國替して、鹿兒島縣人となつた、幕末には佐幕黨に與みして、近藤勇を主將とする新撰組に仲間入りして、天晴武勇を現はし、伏見や淀川堤に薩長の兵と戦つて負傷した、其後順逆の理を究めて王師に従ひ、奥羽征討の際、薩兵に加はつて、各地に轉戦偉功を樹て、次で黒田清隆の知遇を辱ふし、函館征討軍に加はつて殊勳あり、君が鹿兒島縣土族となりしは明治二年の八月である。

黒田清隆の腰布着となつた民治君は、黒田君が開拓使廳副長官の椅子を占むるに及び抽でられて使廳權少主典となり、札幌に來たのだ、其れは恰度明治五年の三月であつた、明治七年使廳は蠶絲業を起す素地を作るが爲め、蠶絲業女子傳習生を、蠶糸業の

本場上州に派した、民治君は之が取締として共に派遣された、彼が斯業に堪能なる智識は此の時に於て養成されたのだ、明治十年女子傳習生を率ひて歸札するや、直に勸業部製糸場主任となり、從來専ら力を斯業の發達に注いだ、明治二十年官を辭し、官營製糸場の拂下を受けて、盛に斯業の發達を策するもの前後三十年、其精勵努力意想外に出つ、民治君は實に本道蠶糸業界の恩人である。

民治君の閱歷聲望は札幌市民を壓した、當時恐らく君の右に出づる者は、一人もなかつたと信ずる、彼は初期の區會議員に推され、兼ねて札幌商業會議所議員となり、北海道協會の幹事、北海道蠶糸協會の會頭となり、公私事業に盡瘁するもの淺からず、功を以て三等有功章を授けて表彰せらる、寔に札幌の元老であつたが、悼ましい哉、大正八年八月、病を以て没す、享年七十有二。

庸三君は名家の子である、父の性を承けて、克く各種の事業に手を染む、今や壯年事業家としての名、漸やく隆々たらんとす、彼は明治四十三年帝大出の法學士である、法律書生の通弊たる、政治慾、官吏慾は探め得ないほどの淡泊である、故に大學を卒

するや直に足を實業界に投じた、セメント工業株式會社に入りて、専務取締となり、大にセメント工業發達の爲めに盡瘁した、父の没するや東都より歸りて家事を宰し、傍ら事業を企畫す、かの余市中島埋立事業に於ける、又札幌送電會社に於ける、彼の力を俟つや大なり、彼や多くの趣味を實業に有し、政治に意なきが如くなるも然らず暫らく實業家として財力を養ひ、將來政治界に雄飛するの基礎を築くの方便に外ならずと信ずる理由あり。

錐の囊中にあるや必ず穎脱す、庸三君の政治的才幹は、札幌市會議員として、又市參事會員として、群を抽いでゐる、想ふに非凡なる實業家は、又非凡なる政治家たらざるを得ず、若し吾が足立庸三君が政治家たるの時、彼は秩序的深慮の政治家にして、決して亂暴的淺慮の政治家にあらざるを發見するであらう、父民治君は秩序的に榮達した、庸三君亦然り、實に此の親にして此の子ありである、記者は足立君父子に就て初めて此言葉の意義あるを認め美望に禁へない。

本道運送業界の頭領 南部多三郎

世の中は儘にならぬものである、其の儘にならぬ處が浮世だ、若し思ふ儘になつたら一人も貪乏人は居なくなり、凡て金持のみになつたら、怠氣滿々、世は腐つて仕まう貧者多く、富者少ない處に、調和が巧に行はれる、之が造化の巧妙な攝理だらう。空拳を揮つて自家の運命を推開する、之が儘ならぬ浮世に處する途だ、是には勇氣と見識とが必要だ、之なくんば運命を開拓することが出来ない、世には成るも、成らぬも凡て運命だ、故に果報は寢て待つ外はないと、呑氣に構ふるものあり、是れ大なる心得違である、寢て太平樂を極めこむが最後、運は素通りして終もう詰り運は寢て待つのでなく、練つて待つものだ、此の「寢と練」とを取り違へて居る、畢竟「練る」は運命推開の方法を研究することである。

既に運命推開の方法を研究し會得しても、之を實行する勇氣がなければ、佛造つて魂を入れぬの愚に陥る、實行の勇氣とは自主自恃の精神を謂ふ、換言すれば獨立自尊心

だ、實に運命の開拓を妨害するものは依頼心である、運を寝て待つ人間は即ち依頼心の強いので、到底世の狂瀾怒濤を乗り切り能はぬ、斯やうな柔弱な人間は、遂に何事もも爲し能はぬは論なき處だ。

南部多三郎は立志傳中の一人である、彼は人一倍負惜みが強い、而も義侠心に富んでゐる、彼は現に札幌市會議員であり、北海道公認運送業者の牛耳を握つてゐる、のみならず運送業者としての名は、全國の同業者に推稱されてゐる、彼が今日の位地、聲望を有するに至れるは、努力の賜である、百難不屈の精神に依る、千里を見るの明、遠く慮かるの思、之が今日成功の基礎であらねばならぬ、彼は決して世に謂ふ好運兒ではなかつた、順風に帆掛けて走る底の好運兒でなかつた、波瀾重疊の間に苦められ翻弄された、實に困難は彼に取つては良藥であつた、彼は平氣で安心して之を満喫したのだ。

彼の今日あるは、汗と血との報酬だ、玉なす汗血を絞つて今日の成功を看るに至つた彼は筋肉労働から身を起した、彼は馬車追の艱苦を嘗めた、裸一貫で故郷を飛出して

本道に渡る、宿昔青雲の志を遂げんためであつたに相違ない、獨立自尊心の強き彼にあつては、徹底徹尾、人の恩恵に浴するを快としなかつた、只頼む處は自己である、自己の力であり、手足であつた。

他の助力に浴して成功するも、他に頭を押へられる悲が伴ふ、寧ろ裸一貫で運命を天に任するに加かずと奮起した、當時彼の陰日向なき、眞劍味の奮闘に惚れ込み、資本を投じて成功を速かならしめんと試みた有志あり、而も彼は其の好意を謝し、固辭して受けなかつた、蓋し依頼心の大事を成すに妨害なるを知るからだ、彼は飽までも自主自恃の人物である。

彼の成功は漸進的であり、楷梯を踏み、順序を正し、決して一足飛ではなかつた、彼は馬車追に成功して運送業を始めた、運送業に終生を託するは、本意でないかも知れない、當初からの希望は、他にあつたと推する、彼本來の目的は、天下國家にありしと信すべき理由がある、暫らく身を運送屋に潜むるは、境遇の然らしむる處である、彼は潔よく境遇に順應した、若し好んで成金的の考へを起したならば、今日の成功は

得て望まれなかつたらう。

金剛石は暗夜に能く輝く、人の材器は自から晦ましても他が認めて棄てない、南部多三郎は有用の材なりという評判は、嘗に同業者の一角に熾なるのみでなく、札幌市民の多くが唱へた、其の結果が市會議員として重要な椅子を占むるに到つた、従つて同業者の信頼は愈々高く厚くなつて、北海道公認運送業者の牛耳を握り、惹いて全國公認運送業者の重望を負ふに至つた、蛟龍雲霧を得れば、遂に池中のものに非らずとは彼の謂である。

運送業者を根據として彼の勢力は愈々加はつて來た、將來普選實施の曉に、彼が勞働團體を選母體として、月桂冠を戴き、中央政界に打て出づるを信ぜんと欲す、斯くて宿昔青雲の志は漸次達成せらるべし、好漢大に自重重愛せよ。

公僕を以て任ずる 阿由葉宗三郎

大男總身に智慧が廻はり兼ねと言ふ川柳がある、驅幹長大のものは、多くデクノポーたるを免かれぬを諷したものである、然らば倭軀短身は、智慧の結晶であるかと言へば、萬更左様でもない、例せば八田理學博士の如きは、丈はペラポーに高い、併し總身は智慧の結晶であり、學問の間屋と謂つて可なり、其の萬國博物學者の權威と云ふことで、左様に評價される、札幌市立病院長林醫學博士も、驅幹から言へば、吾が阿由葉君に比して、弟たり難く、兄たり難き間柄である、固より人間の才智と云ふものは、必らずしも長身短軀に比例しないが、何うも見渡す處では、利口者はノツポーに尠ないやうである。

山椒は小粒でもピリリツト辛ふ參さる、吾が阿由葉君は、山椒の精であらう、全く彼は山椒のやうに、ぴりつとしてゐる、よく其處らの獨活に似た先生達が、彼の怪腕に翻弄せられて土俵の上へ四つん這ひになつてるのを見る毎に、吾曹つく／＼小粒山椒